

---

# サマー・エンゲージ

ゆほ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サマー・エンゲージ

### 【Nコード】

N4936K

### 【作者名】

ゆほ

### 【あらすじ】

曾祖母の萩<sup>はな</sup>乃様に連れて来られたお見合い。まだ高校生の私は興味なかったけど、現れたあの人はずっと私が探していた人とても良く似ていたから……

## 第1話 お見合いはティータイムに 1

1学期の期末試験が終わった試験休みの日、曾祖母の萩乃様はきのがセツティングしたお見合いの席に私は来ている。

といっても萩乃様と良く行くホテルのティールーム。

「超高級」といことで有名なホテルのティールームだから、天井もものすごく高くティールーム自体がとても広い作りになっている。

1席1席もきちんとしたソファークッションで隣の席との間隔も広く取っている。そんな贅沢な作りのティールームで目の前にあるケーキにまだ手がつけれないのが不満その1。

というのも肝心の見合いの相手もその付き添い？も来ていないのよ。

どういうこと？不満その2。

お見合い相手は萩乃様の女学校時代の先輩の曾孫。なので付き添いというのはその萩乃様の先輩になる。

先日、萩乃様は女学校の同窓会に行ってきたの。まだ現役のおばあ様がいっぱいいると思うとすごいことだわ。そのとき萩乃様の先輩、亜紀枝様あきのえとおっしゃるんだけど、亜紀枝様が「曾孫に良い方はいないか？」とおっしゃったらしい。

萩乃様を始め同窓会に集まったおばあ様達は「是非自分の（曾）孫娘を」と殺気だって写真鈞書きを送ったらしい。その中で今日のお見合いに選ばれたのが私、津和路桃乃つわぶき ももの。

はつきりいってお見合いなんてやだったから、お見合い写真の撮影は高校の制服でしたのよ。だって相手は24歳だっていうから、高校生だったらドン引きかなって。

でも、結局は亜紀枝様を選んだみたい。というのも私が今通っている立花<sup>りっか</sup>女学館高等科こそが亜紀枝様、萩乃様が若かりし頃を過ごした女学校なんだもの。

送られてきたお見合い写真の中で高校生は私だけ、しかも立花の卒業生は1人もいなかったとか、母校に誇りをもっている亜紀枝様はその辺りで決めたみたい。

立花<sup>りっか</sup>女学館は初等科から高等科まであって、大学はないの。昔は高等科を卒業したらみんなそれなりの家へお嫁に行っていたらしい。そういった卒業生の子供や孫は「縁故枠」での入学試験を受けられる。でも私は「縁故枠」ではなく「進学枠」の入学試験で受験した。

立花<sup>りっか</sup>の「進学枠」ってのがくせものなの。立花には大学がない分、縁故枠で入ってくる子の偏差値はたかが知れている。

でも逆に「進学枠」の入学試験はかなりハイレベルで入学してくる子の偏差値は高いし、授業も難関大学進学用になっているから、進学率も物凄くいい。塾には通わず6年間立花に通っただけで有名大学に合格できるってことで人気がある。

そんな「縁故組み」と「進学組み」が校内で上手くやっているかっていうと、意外と上手くいつている。

「縁故組み」はやっぱ「お嬢様」と呼ばれる人が多いから性格も妬みとかなくて品があって穏やかだしね。たまにおかしな人がいる

けど、「縁故組み」は在学中に「縁談」があるから学校側が生活態度に厳しいの。特に異性関係で生活態度が悪くなると「ご縁がなかった」ってことで進級すらできないんだから、あれはあれで大変そう。

まあ「ご縁がなかった」人達は「お金」はあるみたいからそういうケースのときは大体「留学」しちやってるみたい。

私はわけあって小学校6年生まで立花への進学は考えていなかったけど、中学受験はする予定だったから塾に通ったりと準備はしていた成績は良かったのよ。

立花も合格圏内だったから「進学枠」で受験した。でも面接の時に「縁故」があるってばれちゃった。そりゃそうよ。「津和路つわふき」なんてめったにない名字だもんね。

しかも萩乃様もおばあ様の菊乃様きくのもママもみんな立花OGだったんだから。長くいる先生が知らないって言う方がおかしいわ。

その「進学組み」に入ってくる子達も難関の試験を合格しただけはある頭脳の持ち主で高い目標も持っている。だから立花に通っている生徒同士で問題が起きるってことはめったにない。

私の高校生活はそれなりに充実してた。「進学組み」にいるのに、お見合いで結婚なんて逃げ道っぽく感じてた。

## 第2話 お見合いはティータイムに 2

目の前にある紅茶すら冷めつつある。萩乃様のゴーサインができれば紅茶もケーキも頂けるんだけど、それも無い。でも萩乃様もさすがに亜紀枝様が遅れるのはおかしいと思い始めたとき、

「ごきげんよう」

紅茶の向こうから品格の塊のような、聞いてしまったら背筋を伸ばしたくなる声がした。

「亜紀枝様！お時間になってもお見えにならないから何かあったのかと思っておりますのよ」

立ち上がって亜紀枝様を迎えた、萩乃様が遠まわし過ぎるくらい遠まわしに「遅刻です」と言っている。

亜紀枝様は片手を眉間に添えながら私達の向かい側に座った。

「ほんとうに萩乃さん達は失礼を働いてしまつて、申し訳ないわ。忍<sup>しのぶ</sup>さんが一旦家に戻ることになつていたのですが、研究室で何かがあつたとかで結局戻られなかつたのよ。その連絡がくるまで家で待つていたから、ごめんなさいね。」

亜紀枝様が「ごめんなさい」って言うときは両手をきちんと膝で揃えて私と萩乃様の目を見てからおっしゃってくれた。その姿は「淑女の鏡」って感じだった。

良く見ると亜紀枝様は本当に素敵な方だった。大正生まれとは思え

ない若々しさ（なんかこれって言い方へんよね）というかなんというか。うちの萩乃様も元気だけど、こっちはバイタリティー溢れるって感じで外見からそれなりの年齢であることは分かる。

萩乃様と二人のやりとりを見ていると亜紀枝様の方が萩乃様より年上であることは推察できるけど、実際何歳？って話しになったら、亜紀枝様は若くみられそうな感じ。

「そうでしたか、事故かなにかだったらと思って心配していたんですよ。あつ、亜紀枝様、こちらが曾孫の桃乃です。」

肝心のお見合い相手である「忍さん」がいないけど、萩乃様は亜紀枝様に私を紹介した。私は少しゆっくりめに立ち上がって

「はじめまして、津和路桃乃です。」と挨拶をした。

「はじめまして周防院<sup>すおういん</sup>亜紀枝です。素敵なお嬢さんね。お会いできて嬉しいわ」亜紀枝様はそれはそれは麗しい笑みを私に向けて親しげに語りかけた。

「立花の進学クラスなんですって、萩乃さんの曾孫なら縁故もつかえたでしょうに、優秀なのね。」

「優秀なのね」の一言に萩乃様は鼻の穴が膨らむくらい誇らしげな笑みを浮かべた。

亜紀枝様が注文した紅茶とケーキが運ばれて、やっと目の前のケーキにありつけることになった。

季節限定の桃のシフォン。名前に桃があるだけに桃のスイーツは欠かせないわ。でも私が生まれたのは3月で桃の花の時期の頃。早生まれなので同級生はほとんど17歳になっていくけど、私は修了式まじかまで16歳で過ごす。

かといって童顔ってわけじゃない。小学生くらいまでは大人顔だったからよく中学生に間違われたけど、今では年相応の顔だ。

待ちに待った桃のシフォンだけにやや大きめにフォークに取って口に入れた時、背後から声がした。

「遅くなりました。」

自分に余裕があればきちんと呑み込んでからゆっくりと振り返ったんだろうけど、気配もなくいきなり声がしたから口に桃のシフォンを頬張ったまま、反射的に振り返ってしまった。

「こんにちは、桃乃ちゃん。」

多分私が食べながら振り返ったのがおかしかったのだろう、口にクリームでもついていたのか、その人は笑いながら私に声をかけて来た。

銀色のフレームの眼鏡をかけているけど、それが全く嫌みではなく「知性的」な感じ。人当たりの良さそうな笑顔を浮かべて亜紀枝様と萩乃様に遅刻のお詫びをしている。

多分あの眼鏡を外してもすっごいかわいいいんじゃないかな。説明のしようのない「大人の男の色気」とでもいうような雰囲気を出している。



家に戻らずに研究室から来たという割にはきちんとした格好だ。上  
下揃ったスーじじゃないけど、仕立てはいいもだと思う。ノーネクタ  
イのシャツに、ジャケットとズボンという格好だけときちんと手入  
れがされていて、シャツもしっかりアイロンしてある感じだった。  
革靴の輝きも完璧。

はつきり言って姿かたち、立ち居振る舞いに全く隙がない。

お見合い相手の「周防院忍様」は24歳現在医学部の6年生、つま  
り現役で合格してるってこと。3月には国家試験を控えているそう  
です。ご両親は5年前に事故で亡くなっていて、生前ご両親と住ん  
でいたご実家には今、亜紀枝様がお一人で住まわれている。忍様は  
大学に近いところのタワーマンションの1室を購入し（買ったらし  
いよ。キャッシュで。）一人暮らしをしているそうです。

そもそも「周防院家」というのは「SUOH製薬」という製薬会社  
を創設した家柄で、現在亜紀枝様はその製薬会社の大株主らしい。  
ただ「SUOU製薬」は同族企業ではなく、忍様も「SUOH」に  
縁故入社する気はないというお話だった。

なんていうか、肩書きにも隙がないわ。

お見合いそれ自体に全く興味がなかったから、私は写真も釣書きも  
見てなかった。それを知っていてなのか、他に話題がないからなの  
か、忍様の経歴の話が続く。

医者として前途有望な医大生が高校生と結婚を前提としたお付き合  
いを選ぶわけではないから、今日お見合いがお開きになれば向こうか  
らお断りの連絡が来ることは確信できた。

なんていうかもっと「女性に縁のない」って感じの人だったら、こっちが「結婚はまだ早すぎて考えられない」とかなんとか言って断らなくてはならなかったから、萩乃様が私のその意見を聞いてくれなかったらどうしようとかそれだけが不安なお見合いだった。

この分なら今日は素敵なティールームで美味しい桃のシフォンケーキを食べたったことで終われそうだ。

夢中でケーキを食べていた私の意識を3人の元へ戻したのは萩乃様の歓喜の声だった。

### 第3話 お見合いはティータイムに 3

「まあまあ、本当に桃乃でよろしいんですか」

えっ、何が？

桃のシフォンはあと一口、でも萩乃様の発言がどうという流れからなのか分からず、最後の一口食べないで顔を見上げた。

「僕としては桃乃さんは申し分ないお嬢さんだと思っています。」  
コーヒークップを片手に持って忍様が悠然とした態度で萩乃様に答えている。

「良かったわね」桃乃、こんな素敵の方がお前をお嫁に迎えていいとおっしゃってくれて」

はい???思わず目を見開いて忍様を見た。忍様は何も言わず私に微笑み返してきたので、つられて微笑んでしまったが、かなり引きつってしまった。

この場のオピニオンリーダーであろう亜紀枝様も満足げに笑みを浮かべていて、この縁談に「待ったをかける」雰囲気ではなさそうだった。

なんでこんな展開になっているだろうと茫然としていたら、

「頂き物の歌舞伎のチケットを持っているのよ。萩乃さん良かったらこれからおかしら？」

お見合いでよく聞く「後は若い二人で・・・」みたいなのをかな

りさりげなく持ち出した亜紀枝様。萩乃様もその空気をしっかりと読んで。

「よろしいんですか？是非一緒にさせて下さいませ」と答えていた。萩乃様は日本舞踊を長くやっているから歌舞伎とかも大好きだし、これは断らない流れだわ。

亜紀枝様と萩乃様の話題は今日の演目に変わり、私と忍様の存在を忘れ始めていた。

私は萩乃様達が歌舞伎座に行くタイミングで、一人で帰ろうと考えていたら、忍様はとんでもない申し出をしてきた。

「では、桃乃さんは僕がお送りします。ちょうど車で来ているので」

「えっ、けっこう、です。」

「あらいいじゃないの。車の趣味はあまり宜しくないけど、忍さんは運転は上手よ。」

お断りしようとしたら、亜紀枝様が忍様の後押しをした。それに忍様も譲らなかった。

「確かに、あまりいい車ではないんですが、安全運転は保証しますよ。それに「これからのこと」もお話したいですし」とにっこり。

萩乃様は「なんてお優しい」と感激している。

「これからのこと」って、目の前が暗くなるような感じがして口も動かなくなっていた。

「でもね、忍さん。」

亜紀枝様は優雅な微笑みを忍様の方に向けて、でも瞳はから鋭い光を放って言った。

「おいたはだめよ」

出たー！立花用語の「おいた」

これって、異性関係のことを指していて、「縁故」の子が特にそうなんだけど、婚約者にもなっていない男性と色々経験しちゃうと「おいたが過ぎる」ってなって、まあ上手く婚約とかになれば「おいたが過ぎたけど・・・」って言われ方に変わるけど、逆に「おいたが過ぎて、ご縁がなくなる」ってケースもある。けど、これはかなり少数。立花がそういう学校だって分かって入っているはずだからね。

でも、生徒が「おいた」しているって確固たる情報を入手してくる立花の教師って凄いわ。かなり怖いけど。

「もちろんです」

亜紀枝様の鋭い視線にも怯まずに、忍様は優雅に微笑んで答えた。

忍様は何を考えて私との縁談を進めようとしているんだろう？

亜紀枝様と萩乃様はタクシーで歌舞伎座へ行くと言うので、ティールームを出たところで別れた。

「正式なご返事はまた改めて」  
このまま縁談を進めるから、縁起のいい日を選んで連絡をしたい。  
そういう含みのある亜紀枝様の発言だった。

一介の女子高生が縁談を断るにはどうしたらいいのだろうか？肝心の萩乃様の方が乗り気で途方に暮れる。萩乃様の意見にはママもパパも逆らわないしなあ。

忍様に連れいて行かれたホテルの地下の駐車場、「これです」と言われて見た車は

真っ赤！左ハンドル！出来たら乗りたくない！

って、いかにもお金持ちのお坊ちゃんが持つてそうな、個人的には乗りたくないってタイプだった。

お嬢様学校に通っているけど、萩乃様や菊乃様はいかにも「お嬢様育ち」って感じだし、ママもどちに分類するかっていえば「お嬢様」だ。だから私も「お嬢様」の部類に入るのかもしれないけど、生活している空間は至って一般家庭だ。家政婦さんがいるわけでもなく、ママや萩乃様が家事をやっている。菊乃様も一緒には住んでいないけど、やはり自分のことは自分でなさっている。「周防院」と並ぶほどではない。

だからこの縁談は当事者が顔を合わせたところで破談になる！そう思っていたのに、何故？進展しそうな雲行きになってる？

忍様が私でもいいと判断した理由は何？

理解できないことが多すぎる。

忍様は丁寧なハンドルさばきで車を発進させた。車中で忍様から話しかけてくることはなかった。結構運転に集中するタイプなのかしら？もしかして余裕なかったりする？

不用意に声をかけたらマズイかなと思い、私の方も黙っていた。

流れる外の景色を背景に運転する忍様の横顔を見ると、今となつては思い出したくはない、でも心の中にしまっておきたい人を出してしまった。

#### 第4話 夏の夜の贈り物 1

もう一度会いたい。そう思うけど、今となってはどうやって探し出したらいいのか分からない。

それ以前に私なんか探していいのか分からない。

そんな人がいる。

彼の名前は「シン」。私はそれしか知らない。

多分、似ているのかな？

同じ男の人だし、年齢も近そうだし、背格好も・・・

ただ持っている雰囲気まるで違う。まあ別人だからあたりまえだけど。

「人生のターニングポイント」なんて言ったら、まだ16年しか生きてないのに大げさ過ぎるだろうって言われそうだけど、

でも私にとっては重要な3日間だった。

小学校5年生のクリスマス前だったかな。ママの妊娠が発覚した。実に12年ぶりに妊婦になった。

実は津和路家は女系家族で有名だった。



萩乃様から私まで血の濃い親戚でも「女」しか生まれていない。  
萩乃様のお母様もお婆様もそのまた・・・萩乃様曰く「ここ200  
年直径は女しか生まれていない」とのことだった。

パパも亡くなったお爺様様、曾お爺様もみんな婿養子。立花で古い  
先生なら知らないわけないっていう要因もそれだったりする。

所謂立花のお得意様なのだから。

でも私が生まれたとき、「何がなんでも立花へ入学」ということに  
はならなかった。

萩乃様の頃から比べたら、女性が社会で活躍する場も増えている今、  
然るべき婿取りをするにしても箱入り娘じゃなく、きちんちした社  
会人である方がいいと大人たちは考えたのだ。

まあお婿さんが見つからず婚期が遅れてもきちんとしていれば  
大丈夫だろうということだと思う。

というわけで私立受験も視野に入れてあったけど、立花一本ではな  
く過すごごしていた。

ママの妊娠はそんな頃だった。

私が6年生になったある日ママが検診から変な顔つきで帰ってきた。

「どうだったんだい？」

「あつ、うん、元気みたい」

萩乃様もママの様子がおかしいのに気づいて聞いてくれているのに  
反応がよろしくなかった。

「来週あたりもう一回病院に行くの。萩乃様とお母さんにも一緒に行ってもらいたいんだけど・・・」

「私はいつでもいいけど、菊乃にはもう言ったのかい？」

「後で電話して予定を確認します。」

長野に住んでいるママのお母さん、私にとってはお婆様の菊乃様は  
絵を描くのがお好きで絵画教室もやっているけど、絵の題材にする  
草花は家の庭でご自分で育てている。

スケッチ旅行とか行ってなかなかつかまらないことも多い。

それでもママが赤ちゃんを産むときは、萩乃様が病院でママの付き  
添い、菊乃様が私の面倒を見るって分担を決めてあったらしい。

1週間後、萩乃様、菊乃様、ママの3人が病院へ行ってきた。帰っ  
てきた3人は何故か茫然としていた。

「百合ちゃん、どうだったの？」

ママに甘甘のパパがママ達の様子のおかしさにお腹の赤ちゃんに何  
かあったのではと心配して聞いてきた。

「こんなこともあるのねえ」

いつも冷静な菊乃様までが何かにとりつかれたようだった。

「一体どうしたというんですか？」

「あのね勉<sup>つとむ</sup>さん、お腹の赤ちゃんね、男の子なの」

「性別が男だったからって、ええっ!!!」

そばで聞きたい私も驚いた。

## 第5話 夏の夜の贈り物 2

男の子、うっん、跡取りが生まれるってはっきりと認識してから周囲の変貌は凄かった。

まず萩乃様は親戚中に連絡してその喜びを顕わにしていた。

それに菊乃様が「もしかしたら男が生まれないんじゃないかと、昔は医療が発達してなかったから病氣や何かで成人できなかったりしたんだろっね」なんて言い出して、ママの体調管理は厳重になっちゃったわ。

さらにパパの株がものすごく上がったの。別に今までの扱いが酷かったわけじゃなくて、歴代の婿養子の中でも「特別」な存在になっちゃっていうか。親戚からは「パパの親戚で年周りの合う人はいないか」とか問い合わせまで来ちゃったんだから。

そんなお祭り騒ぎの中、私といえばなんだか電車かバスにでも乗り遅れた旅行者のような気分だった。

「次の電車はいつだ？」みたいな感じで毎日を過ごしていた。

その上、「立花は特に受験しなくてもいい」なんて言っていた萩乃様達が急に私に立花を勧めてきた。

もうこっちはえ　　っって感じになった。だって、立花を勧めているノリがどう見ても「縁故」を意識していて、「女の人生はいい旦那様にめぐり逢ってこそ」なんて言い出した。

私の方はどんな進路を選択することになってもいいようにって頑張ってきたのに、どうにもその努力をあっさり切り捨てられた気分

なった。

志望校が曖昧なまま夏休みに入った。お腹の赤ちゃんはもういつ生まれてきてもいいっていう時期になっていて、季節的な暑さもあつてか大きなお腹で「ふ　ふー」いいながらママは毎週バスに乗って検診に通っていた。

結局私は一度も一緒に病院へは行つてはいなかった。平日は学校だったし、夏休みに入ってから学校と塾の夏期講習とでスケジュールが合わなかったのと、付き添って萩乃様が逐一細かくお話してくれていたからね。

その日も午前中に学校でプール、お弁当を持参していたから家には帰らずそのまま塾の夏期講習に行った。

でもね、夕方家に帰ったら誰もいなかった。

パパは会社、赤ちゃんが生まれたらしばらく休むことにしているから最近毎日帰りが遅いつて分かっていたけど、居るはずの萩乃様とママが待っても帰ってこない。

その時はママに陣痛が始まって萩乃様が病院に付き添っているのかなと漠然と思った。そうなるかと菊乃様が長野からこっち来るはずだからと、私はまず菊乃様に連絡してみた。でも繋がらなかった。

萩乃様やパパの携帯にも連絡したけど、こっちは「お客様のおかけになった電話は現在」ってアナウンスが流れちゃった。

そのうち誰かから連絡が来るだろうと思いながら、その夜は家にあるものを適当に食べて一人で寝た。

でも翌日朝起きても誰もいなかったし、帰ってきた形跡もなかった。

私はこのとき重大なことに気がついた！

ママが出産する病院の名前、連絡先をちゃんと知らされないってことに。

午前中は誰かから連絡が来ないかと家の中で待っていた。もちろん私の方からも何回かは電話してみたけど、結局誰とも連絡がつかなかった。

こうなつてくると家でぼーっとしているのももったいないし、だったらママの病院を探しに行ってみようって思っちゃった。

朝誰もいなかった段階でプールも夏期講習もサボっちゃってたから、もしかしたら外にいれば何か思いつくかも知れないしって。

外に出たら物凄い暑さだったからコンビニで水分買って、行き当りばったりバスに乗って、アナウンスを聞いていた。ほら時々「病院は次の停留所です」みたいなアナウンスもあるからそれがヒントになるんじゃないかって。

でもその時乗ったバスではそういうアナウンスは聞けなかった。

終点で降りて、さてどうするか迷っていたら遠くの方で水しぶきが上がるのが見えた。どうやら今いる場所から信号を挟んだ反対側の緑地公園に噴水があるみたいだった。

私は夢中でその噴水に向かって駆け出していた。

## 第6話 夏の夜の贈り物 3

緑の木々に囲まれた公園のほぼ中央に広々とした空間があつて、その空間の真ん中にあの噴水はあつた。

噴水の周囲を取り囲むように設置された花壇には色鮮やかな花が植えられていて、そのそばにいくつか置いてあつたベンチのうちの一つに座つて噴水を見ていた。

水が湧き上がるのは一定の高さではないし、中央に大きな噴水、周囲に小さい噴水つて色々な動きのある水の芸術品つて感じがした。

昨日からの出来事を忘れてしまつくらい夢中になつて私は見ていた。

プールとか海とか泳いだり潜つたりが私は好きだから、噴水の水が深い海にでも飛び込んだ時の水しぶきに思えて堪らない気分になつていた。

どのくらいの時間だつたのだろうか、私が座っているベンチとは違うベンチにうずくまつた男の人がいることに気がついた。

というよりその男の人は私がベンチに座る前からいた気がした。

両手で頭を抱える感じで背中を丸めて足元を見ているような格好はなんだか具合が悪そうに見えてきた。

夏の日差しもかなり強い日だったから脱水でもしているじゃないかと思つて、私はその人に声をかけてみた。



「具合悪いんですか？」

「・・・いや、大丈夫だから」

男の人は俯いたまま答えた。やっぱり具合悪いんじゃないかなって感じた。

「これ飲みますか？」

私は手に持っていたスポーツドリンクを差し出した。

男の人は頭を上げて不思議そうに私を見た。めっちゃめっちゃつれた顔をしていて絶対具合悪いと私は確信した。

「ありがとう、少しただこうかな」

男の人は口の端で少しだけ笑って私のスポーツドリンクを口にした。

「・・・病院行きますか？」

私じゃ連れて行けないけど、管理局がある公園だからその人に手助けしてもらおうよう頼みに行くくらいならできると思って聞いてみた。

「病気じゃないから、ちょっとね、両親が急に事故で亡くなったから」

視点の定まらない表情で男の人が言った。

「えっ、あっ・・・」

それは、辛いよなあ、かける言葉が思いつかなくて黙っていたら今度は向こうが聞いてきた。

「君は？結構長く噴水見てたみたいけど」

「あー、ママが赤ちゃん産んでるみたいなんだけど、病院とか分かんなくて、誰とも連絡とれなくなっちゃたから、病院探そうかなとかってウロウロしてたら噴水見つけちゃって」

「それって・・・」

あつヤバ、育児放棄かなんかと勘違いされたかな。急に目に光が宿って、心配そうに私を見た。

「いや、お婆様がうちに来到ることになってるから大丈夫なんですけど、えっと、家で待ってても良かったんだけど、その・・・落ち着かなくて」

『男の子はもたなかった・・・』菊乃様のあの言葉が引つかかって赤ちゃんに何かあったんじゃないかってずっと気になっていた。

「そう・・・」

男の人はまた元の表情に戻った。なんとなくその隣りに私も座って、またしばらく、でも今度は二人で噴水を見ていた。

「名前、何ていうんですか？」

会話がないのもなんだかなあと思って不意に聞いて見た。

「・・・シン・・・」

「ふーん」嘘っぱいなと思ったけど気づかないふりをした。

「君は？」

「桃乃、桃の節句に生まれたから」

適当な偽名を思いつかなかったし、正直に答えた。

「ふーん」

さっきの私の言い方を真似してベンチに背中を預けながらシンが言った。辛いだろうちにちよつと笑ってた。その顔が結構かつこいいなあって思った。かなりやつれているけどね。元気なシンはかつこいいんじゃないかな？

つられて私も笑った。その時空を見上げたら黒い雲が近づいている感じがした。

「あつ」って思ううちに雨がポツポツ降りだして、その降りは段々強くなっていった。

私は一人で帰った方がいいのかシンと一緒に公園を出た方がいいのか一瞬迷った。

「うちへおいですぐ近くだから傘を貸すよ」

立ち上がったシンが私の腕を掴んで公園の出口へと誘った。

## 第7話 夏の夜の贈り物 4

土砂降りになる前にと走って行ったシンの家は、少し、いやかなり、とてもつもなくオンボロな木造アパートだった。

シンの部屋は2階でドアに表札として「SHIN」と書いた紙が貼ってあった。

偽名じゃなかったのか？

でもシンで名字？名前？聞きそびれた疑問が胸に残った。

招き入れられた部屋はキッチンと片付いてシンがキレイ好きなんだと分かる。

傘を借りたらバスに乗って帰ろうと思っていたけど、雨の降りがどんどん酷くなってくる。シンの部屋の窓に雨が打ちつけてくる音がなんとも攻撃的で「このアパート大丈夫か？」気になった。

「しばらくここで雨宿りして、様子見てから出発したら？バスも遅れるかもしれないし」

借りたタオルで髪や服を拭いているとシンが言ってきた。タオルも洗濯がきちんとされているらしく石鹸のいい香りがした。

「ありがとう」

「あつ、あと家に電話してみたら、誰か帰ってるかもしれないよ」

!!!

そうだ。パパか菊乃様なら車が出せるから迎えにきてもらってもいいし。早速電話を借りて家の番号をダイヤルするが、誰も出なかった。ついでにみんなの携帯にかけたけど、やはり反応無しだった。

「・・・・・・・・」

受話器を置く私をシンが見ている。どう言えばいいのだろうか？私は俯いて黙ってしまった。

「ラーメンでも食う？」

何もなかったかのようにシンが聞いてきた。私はシンの方へ向き直ってぎこちない笑みを浮かべて答えた。

「食べたい」

「桃乃、シャツ貸してやるからシャワー浴びてこい。濡れたままだと風邪ひくから」

「あっ」

初めて会った男の人の家でシャワーなんて借りていいのかと思ったが、さっきタオルで拭いたけど完全に乾いているわけではなかった。さすがに迷ったが、風邪をひいてはプールや夏期講習に差しさわりがでると思いシンの申し出を受けることにした。

「その間にラーメン作っておくから」

またシンが笑ってくれた。ラーメンを作るということはお風呂場に近づかないと遠まわしに言っているのだろうか。それでもこの部屋は狭いから台所の隅がすぐにお風呂場だ。

服を脱いでいる間シンは奥のテレビやテーブルのある部屋に行ってくれた。

日中は暑かったとはいえ濡れた服を着ているとそれなりに体は冷えていたようで、熱いシャワーは気持ちよかった。

脱衣所なんかない部屋だからどうやって着替えようかとお風呂場で悩んでいたけど、少しドアを開けたらシンは奥の部屋に行ってしまったみたいで、ドアの下に置いてあったバスタオルを借りた。

「出たか？ ラーメンはあと30秒で出来るぞ」

お湯をかけるだけのやつだから向こうに行けたのか。幸い下着は雨の被害にはあっていなかったので、自分の下着の上にシンのシャツを羽織って奥の部屋へ行った。

奥の部屋と言っても台所とその部屋だけなんだけど、そこへ行くと着換えたシンがカップラーメンの前で時計を見ていた。

「3、2、1、完成ー！ さあ桃乃食べるぞ」

「いただきます」

小さな座卓のシンの隣りに座って一緒に食べ始めた。

雨が窓を打ち付ける音が止まないまま二人でラーメンを食べ続けた。  
本当にこのアパート大丈夫？家の中よりはキャンプでもしているよ  
うな気分になった。



## 第8話 夏の夜の贈り物 5

「桃乃、大変なお知らせがあるぞ」

「なに？」

「今夜台風が来るらしい。」

「ええー！？」

びっくりしていたらシンがテレビをつけてくれた。通常の番組の画面が少し小さくなっている。その脇に台風に関するニュースや交通情報、テロップになって流れていた。

「そういえば、昨日からテレビ全然見てなかった・・・」

「桃乃も？俺なんかここ5日間くらい何してたのか良く覚えいないんだよな」

えっ？

そういえばシンで見かけたときからすぐやつれていたけど、それってちゃんと食べてなかったことなのかな？ラーメンを食べているシンをじっと見つめてしまう。

「どうした？」

「シン、お父さん達死んじゃったとき、泣いた？」

シンが黙ったまま私を見た。

私っては何聞いているんだろう。泣くよね普通。シンは何も言わずまたラーメンを食べ始めたから、私も何も言わずに食べた。

「桃乃、そっち向いてて」

ラーメンを食べ終えてからシンが言った。

何だろう？って思ったけど、言われるままにシンに背中を向けた。

シンの頭が私の背中に寄りかかってきた。

「シン、どうしたの？」

「・・・・・・」

シンは返事をしなかった。具合が悪いのかなって思ってた振り返ろうとしたら、シンがかすかに震えているのが分かった。

泣いている？

「親父、ガンだったんだ」

シンがポツリポツリと話し始めた。

「仕事継げって言われて、俺は違う進路を希望していたらそれは出

来ないって断った。喧嘩になったから家出て、1年くらい会ってなかった。そしたらお袋と二人一緒に事故死したって、なんだってんだよな、それ……」

最後の方は涙声だった。シンがお父さんとはもう仲直りできないってことだけは分かって、胸が苦しくなった。

何て言ってあげたらいいんだろうけど、言葉が見つからない。

シンが背中から頭を離れたから、私はシン方へ振り向いた。シンの顔には涙が流れていたであろう跡が残っていたけど、シンは口の端で私に微笑んでいた。私はシンに優しくしてあげたいって思った。

「なぐさめてあげようか？……」

そういつた瞬間シンがの表情が凍った。

「どういう意味？」

なんでだか怒せちゃったみたい。どうしよう。

「えっと、あの、なんていうかお母さんが頭なでてあげるみたいな、そんな感じのことなんだけど……」

「……ぶっ」

ってシンが吹き出してワッハッハッと大笑いし出した。どのへんが

笑いのツボだったのか全く分からなかった。

「なんか変なこと言った？」

「だって、桃乃みたいな子供にお母さんなんて、クスッ」

「そんなに笑うことないじゃない」

ほんと笑いすぎだよ。

「ごめんごめん。じゃあ桃乃が大人になった時によしよしてしてもらおうかな」

その時シンていくつよ。そんなことを思ったけど、シンが笑ってくれたので安心した。

その後また家にそれから携帯にも連絡したけど、誰とも連絡が取れなかった。

「とりあえず、今夜は泊っていけ」

シンが布団を敷いてくれた。しかし、布団は一つさすがにどうしようって思ってた固まっていたら、シンが台所の方で寝てくれるから布団を使えって言い出して

「だったらシンが布団使って、こっちは畳だから私はこのままでも大丈夫だよ。」

一瞬私が台所につて思ったけど、シンには布団で寝て欲しいなあって思つて提案してみた。

そうしたらシンは布団を台所に運んでマットレスだけこっちに残してくれた。

雨の激しい音を聞きながら私は初めて会った人の部屋で眠りについた。

シンから借りた衣類やタオルその他みんな、洗いたてのやわらかな感触と石鹼の香りがして心地良かった。

## 第9話 夏の夜の贈り物 6

台風一過、朝は眩しいほどの晴天だった。

シンとファーストフードで朝ごはんにした。一人で帰れるって言うけど、シンは送ると言って一緒にバスに乗ってくれた。

もしかして家出娘だと思われている？

「もし、今日誰も帰って来なかったらここに電話して」

渡された信用金庫の粗品みたいなメモ用紙に携帯の番号が書いてあった。

「？」

「俺の携帯の番号だから。心配なら一緒に警察に相談に行ってもいいからな」

「ありがとう」

なんだか大げさに心配されているような気がした。

メモ用紙を財布に入れて私たちは目的のバス停で降りた。

「あの通りの向こうがうちだから」

シンを安心させたくて言ったのに、何故か自分の心に不安が生まれ

ていた。

「・・・じゃあ」

シンは静かに微笑んでくれた。

信号が青に変わって私は走って渡った。どうして走ったのかは分からなかったけど、信号を渡り切ったところでシンに向かって思い切り手を振った。

シンも手を振ってくれた。

「ありがとう！シン！」

朝、電話したときにも誰も出なかったので予想はしていたけど、やっぱり家は無人だった。

それからすぐにバタバタと萩乃様が帰ってきた。

「桃乃ー！！」

萩乃様が私に飛びついて来た。

「萩乃様？」

「さっき菊乃から電話があって、私はてっきり菊乃が桃乃を預かっていると思っていたから・・・」

息を切らしながら萩乃様がこれまでの経緯を教えてもらった。

まず私が塾から帰ってきた日の昼間、ママに陣痛が起きて萩乃様の付き添いで助産院へ行っていた。

このとき萩乃様は菊乃様の携帯の留守電にメッセージを入れたつもりでいたんだけど、これが菊乃様の自宅の留守電だった。

そしてタイミングの悪いことに菊乃様は旅行へ行ってしまったのだ。菊乃様の方も携帯に連絡をもらえばいいからと特に萩乃様達には旅行に行くことを伝えてなかったらしい。

当然家には帰らないから留守電は聞けない。

そしてパパも取引先とトラブルが起きたらしく、急きょ出張に出ってしまった。

パパと萩乃様は連絡を取り合っていたんだけど、私のことは菊乃様に任せているからと安心しきっていたみたい。

そしてママ、実はママは通常の検診は病院で行っていたんだけど、助産院で赤ちゃんを産む予定にしていた。だから陣痛が起きた最初は助産院へ行ったんだけど、ところが赤ちゃんの様子が設備のある病院ではないとダメだと分かり、病院へ移動。

どういうわけか病院へ移動するのに時間がかかったらしい。まあママは運ばれるだけだったけど。

なんだがんだで夜中に緊急帝王切開に切り替わり、付き添っていた萩乃様も病院で仮眠したみたい。



翌日、私がシンと噴水を見ていた頃は赤ちゃんは無事生まれていたけど、ママが相当参ったようで、萩乃様はママのそばにつきっきりになっていた。

そして今朝私とシンが朝ごはんを食べていた頃、萩乃様は無事赤ちゃんが生まれたことをパパと菊乃様に連絡した。

そして萩乃様達は私が一人っきりにされていることを知ったの。

## 第10話 扉を閉じて 1

萩乃様と再開した翌日病院で赤ちゃんに対面した。

すっごく可愛かった。

夏に生まれたから「夏太郎」<sup>なつたろう</sup>って名付けられた。そのままじゃないって思ったけど、シンと出会ったあの公園の生い茂った緑の樹木や噴水に反射した太陽の光とか花壇の色鮮やかな花なんかの綺麗な景色が思い起こされると、私はそつと「夏くん」て呼びかけていた。

夏くんとママが退院してからママは昼も夜もない感じ夏くんのお世話にかかりつきりだった。

私はシンに「大丈夫だったよ」って連絡しないまま2学期になっていた。

進路は結局進学枠で立花を受験することになった。何故なら縁故は進学の試験の一週間後なので落ちたら縁故で再受験という作戦になった。

私は何も言わなかった。その代わり合格して中学生になったら水泳を習わせてもらおうって考えてた。

水泳部に入ること考えたけど、立花の水泳部じゃ水遊びにしかないなそうだし、もっと本格的に、というか本当は飛び込みがやりたいって思ってたからそれに繋がる所に入りたかった。

シンは悲しい結末を迎えてしまったけど、子供が親に自分のやりたいことを主張するのは間違ったことじゃないって思ったから、ここは立花合格のご褒美にお願いしてみようと心の中で決意して、受験勉強に精を出していた。

それでもシンには一度きちんとお礼がしたいって思っていた。

携帯に電話をしてお礼を言えいいのかもしれないけど、萩乃様の前でシンに電話をする勇気がなかったから、タイミングを計っている内にいつの間にか木枯らしの季節に変わっていった。

これ以上間があくのも嫌だったので、図書館へ行つて来るってママ達には嘘をついてバスに乗り、アパートを直接訪ねることにした。

以前にここへ来た時は暑くて、夜には台風まで来たのに、この日は一段と寒さが厳しかった。

通りからシンの部屋のドアが見えてきた。嘘をついて出かけてきちゃったこともあって、私の胸はかなりドキドキしていた。

シンはびっくりするだろうか？元氣そうな私を見て喜んでくれるかな？ううん、シンが前より元氣になっているかな？

頭の中はシンのことでいっぱいだった。

突然シンの部屋のドアが開いた。シンが出てくる！そう思うと嬉しくてたまらなかった。

でもシンは女の人と一緒に出てきた。すごい綺麗な「大人の女の人」

だった。私といるところからは少し距離があるけど、その女の人の口紅の色が鮮やかに瞳に焼きついた。シンの恋人なのかな女の人はシンの腕にしがみつくような感じでアパートの階段を二人で降りてきた。

私はとっさに向かい側のアパートの中に入ってシン達に見つからないように隠れた。

だけど、アパートの入口で二人がキスをしているのをこっそり見てしまった。

シンには恋人がいたんだ。さっきの嬉しさはすっかり消えてしまつて、悲しい気持ちでいっぱいだった。

シンと女の人がアパートを出ていなくなるまで私は隠れていた。このまま消えてしまいたい、そんな気持ちだった。

とにかく受験勉強に集中することにした。「合格して中学生になったら飛び込みをやる。」それだけを目標に毎日頑張った。

頑張ったおかげで無事立花に進学クラスで合格した。水泳に関してはいいい教室があつたらしいことでもまずは立花の生活に慣れることが優先と言われた。

自分の気分が明るくなってくるとシンに彼女がいたことも受け入れられるようになった。

だってあんなに清潔な生活をしていたんだよ。もしかしたら洗濯とか彼女がしてたのかもしれない。

それにお礼を言うことはシンに彼女がいるとかいないとかは関係ないって思えた。萩乃様の外出のタイミングを狙って私はシンからもらったメモの番号に電話をした。

「もしもし・・・」

「アンタまた懲りずにかけてきたの？カレはもう私と付き合ってるの、いい加減ウザいんだよね！」

えっ！？何これ？

私は何も言わずに電話を切った。

シンにはもう関わらない方がいい。心の中で警戒警報が激しく鳴っていた。

## 第11話 扉を閉じて 2

春になって立花に入学した。

やはり予想していた通り授業すごく厳しくて毎日予習復習に追われていた。水泳どころじゃなかったけど、なんとかしたくてまずは立花の勉強を頑張った。

1学期の成績はかなり良くて、これなら水泳と両立も出来そうな手ごたえを感じたから「水泳を本格的に習いたい」ってパパとママにお願いしたの。

反対したのは萩乃様、まあ予想はしていたけどね。「女の子があられもない格好で」って、それでも合格と成績が良かった時はと約束していたから、目星をつけていたスイミングスクールにまずは見学に行った。どういうわけか付き添いは萩乃様だった。

飛び込みのクラスもあるスクールだったので、ここに通いたいってずっとチェックしてたんだよね。飛び込み台をみていたらもうすぐそれが叶うかもしれないって思ってたウキウキしちゃった。

でもね。家に帰ってパパとママに報告しようとしたら

「あそこはダメだよ」

って萩乃様が一言。

「なんでー、確かに先生は男の人だけどみんな指導の仕方とかすごい良さそうだったじゃない！」

「桃乃っ」

私が珍しく口答えしたからママはびっくりしてたけど、やっぱり萩乃様の意見は承服できなかった。

なのに、なのに、なのに。

それから一週間くらいして、見学に行ったスイミングスクールの先生が痴漢で捕まったってテレビのニュースが出たの。どうもスイミングスクールに通っていた女の子にも体を触られていたっていう余罪もあるらしいとのことだった。

もう、がっかりよ。

萩乃様もなんでそんな先生がいたことに気付いたのか、あれもすごいと思っただけど、このニュースのせいで水泳習いたいって強く言えなくなっちゃったて、話しはそのまま立ち消えになった。

でもこのニュースを聞いて、私は夏くんが生まれたあの日の自分の行動がとんでもないことだと痛感してしまった。

初めて会った男の人の部屋に泊ったのに、自分の身が無事だったことが奇跡的だった思えてきた。

シンで紳士だったんだあって、まあ彼女いたしね。小学生に何かするわけないか。

それにあの電話に出た口の悪い女の人は何かの間違いじゃないかつ

た思えてきたりもした。

とにかくシンのことばかり考えるようになった。もう一度電話を試みようと思ったけど、もらったメモを失くしてしまっていた。

シンに会いたい、シンに会いたい。

そう思っ学校帰りにシンのアパートへ行った。

彼女がいるかもしれない。またもめてるかもしれない。

でもそんなのどうでもいいから。シンに会って話したいって、うん、話なんて出来なくてもいい。もう一度だけ会いに行きたい。

バスを降りてからはシンのアパートまで全力で走った。

行ってみると、シンのアパートは取り壊されていた。

もう2度とシンには会えない。

その事実だけが心の中に傷跡になって残った。



第12話 婚約者の条件 1（前書き）

やっと戻ってきました。16歳の桃乃です。

## 第12話 婚約者の条件 1

あれ？昔のことなんか思い出してぼーっとしてたら車が高速？首都高？なんだろう、を走ってる。

「あのう、家と方向が違う気がするんですが？」

運転に差し支えないように気をつけて忍様に声をかけた。

「これからのこと話したいから」

えっ、どこで話する気ですか？

車はしばらく走って一般道に降りた。それからまたしばらく走ったところのコインパーキングに停めた。

あの赤い車は相当目立つらしく降りるとき通りすがりの人達かが「どんなヤツが乗ってるんだ？」って感じでこちらを見てくるから困った。

住宅街へと入っていく忍様の後についていった。「こっちだよ」とか言いながら気がつけば手をつながれていた。

「お茶でもしょうか」

一軒の白い家の前で立ち止まって忍様が言ってきた。「どこでー？」  
と思っていたらその白い家がスイーツショップだった。

家の中というか店内というか、靴を脱いで上がるとお店の人が元は

リビングだったような部屋に通してくれた。

「さっきケーキ残しちゃったでしょ？」

見てたのか？

しかし、ここはどこ？車に乗っていた時間を考えると結構距離を走った気がするけど、ケーキを食べさせたくてここまで来るのか？おぼっちゃまは！

「僕はコーヒー、桃乃ちゃんは？」

見せられたサンプル（否、全部本物だけど）を見たら桃半分を丸ごとゼリーに閉じ込めたのがあった。私はそれを指さして言った。

「これがいいです」

「はい、では今ご用意しますね」

ケーキを選ぶ姿がよつぽと子供っぽく見えたのか忍様はクスクス笑ってて、私は恥ずかしかった。

ああそうか笑い方がシンと似てるんだ。

あの時のシンは笑ってるような状況ではなかったけど、多分私を励ますつもりで私と目が合うと笑ってくれた。

「聞いてもいいですか？」

「何かな？」

「これからって、私どうなるですか？」

恐る恐る聞いてみた。

「・・・多分、年内に結納・婚約」

年内？婚約！？

「年が明けると僕は国家試験の準備になるし」

国家試験の勉強は年明け？いいんですか？間に合うんですか？あー  
ゆー試験で難しいじゃないんですか？

「4月からは研修医で病院勤務になって、桃乃ちゃんは大学受験があるでしょ？」

研修医って受かる気満々？

私は大学受験？

えっ、大学？

すぐさま忍様を見た。

「大学、行ってもいいんですか？」

「もちろん、そのために進学クラスで頑張ってるんでしょ？」

この縁談が進むと、立花を卒業したらすぐ結婚だって思い込んでいたけど、違うんだ、ちよつとホツとした。

「・・・大学卒業したら、お嫁にいらっしゃい」

コーヒー片手に忍様が麗しくおっしゃった。

「はあ、えっ？」

今のつていわゆる「プロポーズ」なの、かな？

「いや、忍様、だって私と忍様って今日知り合ったばかりで、だから・・・」

「じゃあこの夏休みはお互いを良く知るために一緒に過ごしましょうか？」

あつ、なんか今嵌められたような・・・

「ゼリー食べたらどうですか？」

目の前にあるまだ手つかずのゼリーは桃の果肉以外は透明で、私のことシンのことも忍様のことも全部こんな風に透き通って良く見えたらいいのって思った。

忍様は家に帰りながらどこかで夕飯でもとお誘い下さいました。

できたら遠慮したいなあなんて思っていたので、両親に確認を取ると言って家に電話をしました。

「桃乃です。」

「うわーんっ！もちゃあ〜ん」

忍様にお借りした携帯から夏くんの私を呼ぶ絶叫が聞こえる。

「ほら、萩乃様がお昼寝が済んだら桃が帰ってるわよっておっしゃったから、起きた時に家中探しまわって、どこにもいないって分かってからずっとなのよ」

これはいい口実だと思って、私はママに帰りますと伝えた。でも神奈川にいるとは言えなかった。

「弟が私を探して絶叫しているので今日はこのまま失礼します。」

恐らく忍様にもあの絶叫は聞きとれただろう、一応頭を下げて状況を伝えた。

「分かりました。夏休みに入ったらどこかへ出かけましょう。どこがいいか考えておいて下さいね」

そう言って忍様はあの赤い車で私を送り届けてくれた。

## 第12話 婚約者の条件 1（後書き）

感想等お待ちしております。

第13話 婚約者の条件 2（前書き）

祝・アクセス（ユニーク）2000突破

嬉しいです。



## 第13話 婚約者の条件 2

自分で言うのもなんだけど、12歳離れた弟夏くんは私のことが大好き。

そしてこの夏くん5歳にして「天才バイオリン少年」として一部では有名だったりもする。

まあママが音大の音楽科の出身なので、頷けなくもないけど、一方の私はレッスンは今でも続けているけど、音楽的才能は全く無縁だった。

一応私も今の夏くんくらいの時からバイオリンは習っていたけど、バイオリンを選んだ理由も確かピアノが大きくてなんか嫌だったのよね。子供用のバイオリンは小さくて持ち運べるし、バックが可愛くて確かそんな理由だった気がする。

夏くんがママのお腹の中にいた頃はよくバイオリンを聞かせてあげたの。まああんまり上手くないんだけど、ママが歌う時に何か楽器の音があった方が楽しいって言い出すから、つい。

夏くんはバイオリンの音がお気に召したみたいで、赤ちゃんの頃は音が聞こえると泣きやんだり、喜んだりしてくれた。

その内私の真似をしてバイオリンを弾きたがるので私が子供の頃使っていたのを持たせたら、それはそれは夢中になって弾いていた。

最初はすごい音だったけど、毎日一生懸命やっていたら段々格好とか良くなってきて自然と音も良くなった。

私のレッスンは家に先生が来てくれるのレッスンだったの。ある日私のレッスンを聞いていた夏くんが一緒にやりたいと言い出して。二人で曲にもならない音遊びを先生に聞かせてしまった。

そのとき先生の目が光った。そしてパパとママに言ったの。

「この子の才能、私に預けて下さい」って。

萩乃様や菊乃様は才能云々よりも毎日努力を積み重ねることで跡取りとしての根性を育てるといいとか言い出して、夏くんは私と一緒にバイオリンを習うことになった。

夏くんにしてみたら私と一緒に演奏ができるようになれるってことで最初は張り切っていたんだけど、私も学校の勉強や友達に頼まれた生徒会の手伝いが忙しくなって、合奏をする時間が減ってきていた。

私と一緒に演奏できないとなると夏くんは途端にバイオリンは不要に感じたみたいだけど、先生の方が入れ混んじやって、私に夏くんのレッスン内容に合わせて曲を仕上げて欲しいと言ってきた。

「この曲に花丸がもらえると桃乃お姉さんと合奏できるわよ」が先生の殺し文句になっていた。

夏くんは私と合奏のために毎日練習に励み、その甲斐あって5歳とは思えないほど上達した。

先生が自分の先生に夏くんの話しをしているようで、音楽関係の偉い先生の間では「将来有望」とマークされているらしい。

ただ、夏くんレベルのお子様って意外とたくさんいるみたいだからこの先はどうなるかは夏くん次第で分からないけどね。

「ももちゃん、ほしにねがいをがっそうしようよお」

さっきまで泣いてましたという顔でこれをしなきゃベッドには行かないと言い張る夏くん。パジャマ姿でバイオリン持ってやってきました。

私と言えば忍様に送られて家に戻ってから夕飯を食べ夏くん後にお風呂に入って今しがた出てきたところ。先にママと入った夏くんはパジャマに着替えて歯磨きして、寝るのは合奏してからと譲らない。

「一回だけだよー」

「うん！」

夏くんがメロディー、私は前奏と伴奏。

今の夏くんはもう少し難しい曲も弾けるけど、簡単かなという曲を合奏して上手く合わせられるところが楽しいみたい。

活き活きしてて本当にいい顔するんだ。音もしつとりと響いていてそばにいとすとごく心地いいの。

でもね、合奏が終わるといつも言うの。

「ももちゃんとおとがちがう・・・」

そりゃやつぱ夏くんの楽器の方が高いからかな？でも夏くんの言いたいことはそういうことじゃないような気がする、いつも気休めの言葉しか答えてあげられない。

「夏くんが上手だからだよ」

「ぼく、ももちゃんのおとがいいなあ」

私の音、夏くんにはどんな風に聞こえているのかな？

## 第14話 婚約者の条件 3

夏休みに入ったお日柄の良い日の午後。

亜紀枝様と忍様が我が家へお越しになつて、「結婚を前提としたお付き合いの正式なお申し込み」があつた。

この時の忍様は意外にもかっこ良かった。

だって、きつと亜紀枝様と萩乃様のやり取りで進んでしまふと思つていたんだけど、忍様がご自分でパパとママと私に申し込んだんだもの。

亜紀枝様はそれを忍様の隣りで見守っているって感じだった。この前お会ひした時のように背筋がピンと張っていてソファーには少し浅く腰かけ向きは少し斜めに忍様の方を向いていた。

いやー貴婦人の鏡って感じです。

一方の忍様もそんな貴婦人亜紀枝様の曾孫として見劣りすることはなかった。

紺地のスーツなんだけど、織り糸に水色か何か薄い色が入っているみたいで、水色のシャツが馴染んでいる。クリームイエローのネクタイも紺と水色で模様が施されているので全体的に統一感があつて、爽やかさと上品さが上手く同居している。

シルバーフレームの眼鏡から零れる知性と親しみのある笑顔で萩乃様だけでなく、初対面のママのハートもガッツリキャッチしていた。

「お嬢さんと結婚を前提にお付き合いしたいと考えています。つきましてはお許しを頂きたいのですが、」

婿養子でなかなか主導権を握れないパパもさすがに私の縁談には首を縦には振っていないかった。でも忍様の隙のない完璧なお申し出にすっかり「分かりました」と言いそうになっていた。

萩乃様はもろ手を挙げて大喜び、ママは展開の早さにびっくり、そして夏くんは意味は分かってなくせに号泣。

で、私と言えば、完全に流されている状態。夏くんの方が自己主張出来るている感じだわ。

忍様は悪い方ではない、なんで私でいいんだろうって疑問はあるけど、私の進路のこととか色々配慮してくれているのはなんとなく分かる。

でも今日でお会いするのが2度目かと思うとこの勢いに乗っていいのかどうか躊躇する。

正直言えばもっと考える時間が欲しい。

その辺りを上手く萩乃様や亜紀枝様に言えないところがやっぱり子供なんだろうなあ。

ママと私の間で夏くんはまだ号泣している。

忍様を見たら夏くんのおかしいのだろうか優雅に微笑んでいた。目が合ってしまったちょっと恥ずかしくなって俯いてしまった。

「桃乃ちゃん明日は空いていますか？もし良かったら二人で出掛けませんか？」

「だめー！ーっ」

夏くんが叫ぶ。萩乃様がコホンと咳をしたら、ママが何かピンと来たのか夏くんを抱えて、でも物凄い抵抗しているからパパも手伝って二人掛かりでリビングから退場していった。

「桃乃、明日の都合を聞かれていますよ」

萩乃様がまるでご自分が誘われているかのようにウキウキと催促してくる。

「・・・空いてます」

明日は特別用事がないことを萩乃様はご存じだし、でも宿題はあるのよ。ただそれがお出かけをお断りする事由にはならないわよね。

「午前中大学に用事があるので、それが済んだら迎えに行きますね。どこに行きたいか考えておいて下さい」

「はい」

一応返事はしたものの、16歳と24歳、この二人が一緒に出掛けられるところって一体どこだ？

あっ！と思ったけど、萩乃様と亜紀枝様がいる前では言えない。

忍様がお1人になった隙に提案してみようと思った。

亜紀枝様と萩乃様は結納はどこがいいとかいつ頃がいいとかそんな話しをしている。パパもママも私も忍様のお申込みにまだ返事はしていないはずなんだが、どうも私は周囲に置き去りにされるような状況に陥りやすみたい。

神様が味方に付いているのかしばらくしたら二人きりになれたので、チャンスとばかりに

「あのお、プールとかでいいので泳ぎに行きたいんですけど、ダメですか？」

「いいですよ。毎日暑いですからね。どこにするかはこちらで選んでおきますので、支度をしておいて下さい」

「はいっ！」

なんと！嬉しいことに泳ぎに行けることになりそう。

学校の近くに公営のスポーツセンタがあつてそこに時々一人で泳ぎに言っているんだけど、萩乃様がいい顔しないので、家族には内緒で行っていた。そうなるとタイミングよくいける機会って少ない上に、プールで会う人でちょっと困った人がいて、最近は行くのを止めていた。

なんかすごい話しかけてくるんだよね。こっちはたくさん泳ぎたいって言うのに、泳ぎに行けばピツタリ付いてくる感じがどうにも気分悪くて、私の気のせいかもしれないけどやっぱり自然と足は遠のいてしまって、泳ぎたいのに泳げないストレスが溜まっていた。





## 第14話 婚約者の条件 3（後書き）

脱字がありましたので、訂正しました。

名無し     さんご指摘ありがとうございます。

## 第15話 婚約者の条件 4

翌日「大学の用事に時間がかかりそうなので昼食は家で済ませて欲しい。」と午前中の早いうちに忍様から連絡があった。

午後には出掛けるということをやくに感づかれてしまったので、午後はすんなり出掛けられるように午前中は宿題もそこに夏くんにサービスしまくった。

何曲合奏したんだろう。腕がだるいわ。しかも夏くんかなり上達しているんで、合奏する曲も段々難しくなっているんだよね。こっちもそれなりに準備が必要になってきたわ。

でもたくさん合奏出来たおかげなのか夏くんはお昼を食べたらこてっとお昼寝しちゃった。音楽って動きが少ないように見えるけど、いい音出すにはそれなりに筋肉使うし、集中力もかなり必要だから小さい子には結構な体力消耗になるのよね。

忍様が迎えに来て下さったときにはしっかり寝入っていたのですんなり出かけられた。

「迎えが遅れてしまったので、夕飯を済ませてから送り届けますね。」

昨日とは打って変わってカジュアルに現れた忍様。黒のポロシャツに黒のジーンズと上下真っ黒。でも雑誌にでも載っていそうなくらいカッコ良かった。

その姿にボーっとしているときに「夕飯〜」という忍様の声が聞こ

えてきた。サクツとプールで泳いで帰ってくるくらいのつもりでいたからその発言にはびっくり。

未だ先日の「お付き合いの申し込み」正式な返事をしていないからママはどういう態度を取っているのか分からないようだったが、「宜しく願います。」とだけ言っただけで送ってくれた。

忍様の度派手な赤い車で連れて行かれたのは、高級感漂うスポーツクラブ。なんとなく遊園地とかにある屋外プールとかを想定していたのでまたびっくり。

いつも行く公営のプールとは受付の作りも違うわ。こっちはなんだかホテルのフロントみたい。

「ここの会員なんですか？」

「違いますよ。このスポーツクラブの親会社の株券持っているんですよ。その優待です。」

「はあ」仕組みがよく分からないなあと思っていたら、忍様が笑った。

「要は、年に2回くらいビジターで利用できる招待券をもらうんです。2回分あるから桃乃ちゃんと使えるでしょ」

なるほど！招待券。株とか優待とか良く分かんないからなあ。

受付で対応してもらったけど、担当の女性が忍様にポーっとなっちゃって、多分それって聞く必要ないんじゃないのってことまで話しかけていたよ、好きな食べ物とか。それから私の方を見てにっこりと「妹さんですか？」って聞いてきた。

「いいえ、婚約者です。」

忍様も受け付けの女性に負けないくらいの満面の笑みで答えていた。受付の女性は一気に凍ってたわ。

一瞬にして空気が変わった頃受付の手続きも済んだので、早速施設内に入った。

「プール以外にも色々利用できますけど、どうしますか？」

「もちろん泳ぎます。」そのために来たんだから、一秒たりとも無駄にはいけない。

「では着替えたらプールで待ってますから」

私の言い方がおかしいのかクスクス笑いながら、忍様は男子更衣室へ消えて行った。

忍様って笑い上戸？

水着に着替えてプールに行くと忍様既に待っていてくれた。

うゝ、眼鏡を外した忍様を初めて見たけど、やっぱりシンに似ている。正直いうともうシンがどんな顔をしていたか正確なところは定かではない。でも私の記憶に残るシンの顔立ちがどうにも忍様とシンク

口するのだ。

準備体操にストレッチをして早速コースへ。忍様もご自身のペースで泳いでいらっしゃる。以前ちゃんと習っていたんだなと確信するくらい、フォームが綺麗でかつこい。参考にさせていただきます。

会員制のスポーツクラブでもっとお金を持っている人が遊び感覚で来ているのかと思ったら、以前通っていたプールより本格的な人が多くて忍様以外にも参考になるフォームの人がたくさんいた。公営プールの方はもっと気分だけでも健康指向って感じ。

「泳ぐの好きなんですね」

お互いマイペースで楽しんでたけど、途中10分ほど全員が休憩しなくてはいけない時間がある。水分補給していたら忍様が聞いてきた。

「すつごく、この前まで公営のスポーツセンタで泳いでいたんだけど、最近行けなかったから久しぶりに泳げて・・・あっ」

しまった!!

「あのっ、ずうずうしいお願いなんです、公営のプールに行っていたこと萩乃様達には内緒にしてもらっていいですか？」

「いいですよ。じゃあ、口止め料考えておきますね」

えっ？口止め料??取るの???

忍様はそれはそれは楽しそうに「何にしようかな」とか言ってい

る。

何にする気ですか？

そう聞こうと思ったら、休憩時間が終了した。忍様が何を考えているかは気になるがここは1本でも多く泳いだ方がいいと思ったので、また私はコースへ行った。

## 第16話 婚約者の条件 5

今日はとにかく泳ぎぬいた。最近の泳げないストレスも解消された。

25mのプールでコースによつては往復出来る場所もあったけど、一度上がってプールサイドから戻っていくときに忍様のフォームを盗んでは次に泳ぐときに実践するというやり方で泳いでいた。

プールサイドにあった大きな時計で時間を計ったら結構速くなっていたからかなり実りある日だったわ。

それでもさすがに「もういい」って思うくらい泳いだので、後はスポーツジム内のリラクゼーションルームを利用したりして過ごした。

それから出掛けるときに約束した通り、晩ご飯を食べにお店に入った。

忍様は既にどこにするか決めていたようで、カジュアルな雰囲気のレストランに連れて行ってくれた。

前菜にパスタやピザを適当に頼んで、でもどれもすごく美味しかった。ピザなんてお店にある石窯で焼いてくれたんだから。

「こういうお店良く来るんですか？」

今、忍様に聞きたいことがいっぱいある。

「昼間大学で友人に最近行ったお店で一番美味しかったところを教えてくださいって言ったらここだったんです。」



それって女の人ですよ？って聞こうと思ったけど、嫌味に取られるとマズイかなと思いこれは止めた。でもそうなんだろうなあ。だってお客さんOLさんとか大学生かなっていう女性が多いんだもん。

「水泳の選手とか目指してたんですか？」

「高校まで水泳部でした。両親が海の事故で亡くなったからそれからは泳ぎに行ってなくて」

「すみません。」

忍様のご両親が既に亡くなっているってのは聞いていたけど、この質問もまづかったか。

「もう大丈夫ですから、それに今日久々泳いで楽しかったし、他に質問はありますか？」

忍様はにつこりとおっしゃってくれたから少し気が楽になった。それに私が色々疑問に思っていることも察してくれているようで、ならばと思い。

「どうして私と結婚してもいいって思っているんですか？」

聞いちゃった大本命の疑問。

忍様がじつと私を見ている。忍様に見つめられるのって結構恥ずかしいんですね。なんかドキドキするというか・・・分かってやってるのかなあ。

俯いちゃいそうだったけど、これはしっかり答えを聞きたいから半ば睨み返すように忍様から視線を外さないようにした。

「一目惚れです。」

亜紀枝様のところでたくさん写真を見せられたんですけど、あつ、お見合い写真ね。桃乃ちゃんが一番可愛かったので、一度お会いしたいなあと思ってあの席を設けてもらいました。

会ってみたらこれまた可愛いお人柄だったので話を進めてもらうことにしました。」

嘘だ！！

忍様は何か肝心なところを隠している。直観だけだそう思った。でも「嘘ですよね」って言ってもきつと忍様は本心を明かしてはくれないだろうから、笑ってごまかした。

照れ笑いに取ってくれば好都合だけど、どうだろう・・・

その後は「大学でどんな勉強してるんですか？休日は何をしているのですか？」とか差し障りのない質問ばかりだった。

それでも忍様はあの質問以外はきちんと答えてくれた。

デザートに桃のソルベを頼んだけど、どんな味だったのか分からなくなっていた。

食事を終えて駐車場に行った。お店の中は冷房が効いていて体が冷えていたので、蒸し暑い感じが少し気持ち良かった。

助手席を開けようとした忍様の動きが止まった。どうしたんだろうと思って忍様を見ていたらこっちを向いた。

忍様は黙ったまま私を見ている。

何か言いたそうな感じもしたので、「なんですか？」って聞こうとしたら、そのまま抱きしめられた。

体を離そうしたら更に強く抱きしめられて

「何もしないから、このままで」って言われた。

忍様の心臓がドキドキ言っているのが分かった。多分私もドキドキしていると思う。

忍様は抱きしめたまま全然動かなくて、私の体は徐々に熱くなってきて、それが忍様に分かっちゃうんじゃないかって思ったらまたドキドキしてきた。

どれくらいの時間抱きしめられていたんだろう。

しばらくじっとしていたら忍様が体を離してきた。忍様の方を見るとその顔はなんだか消えちゃいそうな笑顔だった。

「これっておいたですか？」

ドキドキを隠すようにわざとムツとした顔で言ってみた。

「口止め料でしょ」

さっきまでの消えちゃいそうな笑顔じゃなくて、いつもの麗しい笑顔でおっしゃった。

第16話 婚約者の条件 5（後書き）

誤字訂正しました。

## 第17話 婚約者の条件 6（前書き）

祝・アクセス3000ユニーク突破！！！！

ありがとうございます。

## 第17話 婚約者の条件 6

プールに行った翌日、大学に泊まり込みをすることになったと言われ、その後忍様とはお会いしていない。

その間、夏くんの「がっそうしようよ」攻撃が続き、宿題が捗らず、さすがに今日は合奏している場合じゃないと思い、図書館へ行く準備をしていたら忍様から電話があった。

「さつき家に帰ってきたところなんですが、良かったらお昼一緒に食べませんか？」

「えっと、今日こそは宿題をしなくちゃと思っっているんですが」

お昼だけなら前後を図書館で過ごせばいいやと思ったけど、食事のついでにどこかへは遠慮したいなあと遠まわしに言っているのが通じたかしら？それなら午前中忍様宅で宿題をし、お昼を食べに出掛けた後図書館へ送ってくれると提案して下さった。

ベイエリアにある忍様の家、正確にはマンションですが、そこまでは1時間と少しかかるけど、今日は英語の宿題を片付けることにして、行きの電車の中では単語を調べながら過ごすことに決めた。

行ってみてびっくり、忍様の住んでるマンションは以前テレビCMにもなった。超高級タワーマンション、でも忍様のお住まいは7階だったけど、セキュリティのインターフォンが2回もあるのよ！

1回目の解錠をしてもらってロビーに入ったらそこは「ここはホテルのフロントか何かですか？」と言いたくなるような作り出し、2

回目の解錠の後入ったエレベーターホールの表示は32階とか50階とか近所ではありえない高さだった。

行き先が7階で良かったとちよつとだけホツとした。

忍様のお部屋はエレベーターから離れた角部屋だった。

玄関前の最後のチャイムを鳴らすとすぐに出て来て下さった。

「いらつしゃい」

先日より更にカジュアルなＴシャツとハーフパンツの忍様が現れた。

玄関を入って真っ直ぐに短い廊下がある。突き当たりのドアの向こうに案内してくれた。その手前にある左右に扉があつて左側から洗濯機が稼働するグオングオンという音が聞こえた。

し、忍様が洗濯している！？

実際どうしているかなんてここに来るまで考えたことなかったけど、なんとなく全部まとめてクリーニングとかハウスキーパーさん雇つたりとかのイメージだったからびっくりした。

通された部屋はリビングで大きな黒革のソファーに黒ベースのＡＶコーナー、ガラスのローテーブル、そしてその奥のベランダに続く大きな窓の向こうには風にたなびく干された洗濯もの。

シャツとかタオルとか白が多くて眩しかった。



どうも水回りが固まっているようで洗濯機の音が聞こえる部屋とリビングの間がキッチンだった。独立したキッチンみたいで間口からチラッとしか見えないけど、調理スペースらしきところに色々大きな鍋がピカピカになって重なっていて、そのそばに菜箸やら盛り箸らしきものがたくさん縦に入っている何かの空き缶みたいなものが見えた。

忍様、多分料理もするわ・・・

料理をする人って菜箸とか盛り箸をたくさん用意するのよね。まあ割り箸で代用したりもあるだろうけど、1膳を都度洗って使うんじゃないくて、最終的にまとめて洗う。鍋の種類が多いのも下ごしらえ用とか煮込み用とか使い分けているんだと思う。

萩乃様達に家事関係は同年代の子達よりしつかりと仕込まれているから、出来る人ってなんとなく分かるんだよね。

忍様のキッチンは綺麗に片付いている中にも色々出来そうな気配を感じた。

忍様って、完全に自立しているんだ。

「そのテーブルでもいいけど、椅子がいいならあっちの部屋に僕の机があるから使ってくれていいよ。こっちの部屋と違って狭いしかなり散らかっているけどね。」

そう言ってキッチンの隣りの扉を指した。ローテーブルでもかまわなかったんで、リビングで宿題を始めた。忍様はさっき稼働していた洗濯が終了したらしく、ベランダで干していた。

なんだか変な感じだったけど、居心地が悪いというわけではなかった。

洗濯が一段落したらしく忍様が戻ってきた。その手には何か紙袋を携えていた。

「お昼、冷やし中華にしようかと思っているけど、どお？」

どお？と言われても絶対忍様のおごりだろうし、前回のイタリアン同様間違いないお店をチェック済みだと推察しているので、にこやかに「是非！」と答えた。

「あと、これ」と言って持っていた紙袋を渡してくれた。

中を見たら携帯電話とそれが入っていたらしき箱があった。

「これって」

「桃乃ちゃんのお母さんに聞いたら、まだ持たせてないって聞いたから。僕と出掛ける約束しても研究室の都合で予定が変わることもあるから、それにあって困るものじゃないでしょ？」

「でも・・・」

「あつ、お家の方のご了承は得ているから大丈夫だよ。僕の連絡先は登録しておいたから、自宅とか友達とかの連絡先は自分で作業してね。僕と同じ機種だからやり方聞いてくれてもいいからね。」

正直携帯は欲しいなあと思っていた、その上、萩乃様のオッケーが出ているなら・・・

私は忍様と色違いの携帯を受け取った。

## 第18話 婚約者の条件 7

予想した通り、忍様が連れ行ってくれたお店は古めかしい外観とやや時代遅れを感じる内装でびっくりしたけど、冷やし中華はすっごく美味しかった。

「今回もお友達情報ですか？」

美味しいもの好きのお友達がいるのかな？

「ここは昔両親と来たことがあるお店なんですよ。ものすごい子供の頃ですけどね。この前通りかかったら冷やし中華って看板出ていたら今年は食べておこうって思っていたんです。」

そうなんだ。忍様の思い出のお店かあ。

そう思ってみると時代遅れの内装もかえって親しみを持って見ることができた。

家事が終了した後着替えた忍様乃格好はブルー系のチェック柄のシャツを羽織って、ブルージーンズにスニーカー、カジュアルだけどトレードマークの眼鏡にも合っていて、いつも通りかっこいい。

私もブルー系とグリーン系が混ざったチェックのワンピースに白のサマーカーデイガンを着ているから、なんとなく合っている感じ？

「宿題は進みましたか？」

「はい、家だと夏くんが構って欲しがるんで、今日はものすごく捗

りました。」

「そお、いつでも来ていいからね。それに多分あそこが新居になるから」

「へ？」

忍様が麗しく微笑んでおっしゃったのに、私はきつとヘンな顔で反応していると思う。

だって、宿題の話題が何故新居の話題へ???しかもまだお返事をしていないのに、っていうかこの前の返事って一体いつお返事するものなの????

「あのお、父や母が忍様にこの前のお返事をもうしているのですか？」

忍様が新居を話題にするということは誰かが・・・

「いいえ、まだ何も言われていませんよ。」

なら、何故新居？

「もし桃乃ちゃんが僕と結婚するのが本当に嫌ならそれだけははっきりご両親に告げるんじゃないかなと思います。」

でもそれがないようにですし、最初のお会した日にこの夏休みはお互いを良く知るために一緒に過ごすことに決めたくないですか、お返事はその後でいただければと思ってますよ。

新居のことを言ったのは話しの流れということであまり深く捉えな  
いで下さい。

現実問題になったときに違つところが良ければ変えてもいいこと  
ですから」

あつ話しの流れだったのか・・・なんか物凄く深く考えてしまった。

忍様は私を優しいお顔で見ている。

「また泳ぎに行きますか？」

「あついいんですか？」

「もちろん」

私の表情が曇つたことを氣遣つて言ってくれたみたいだけど、前回  
スポーツクラブで泳いだことをママ、パパ、萩乃様がいるところで  
話したら萩乃様は意外にも忍様のエスコートがあるならと咎めな  
かった。

だからまた行けたらいいなあって思っていたんだよね。

「あつでもあそこは優待券だったんですよ」

「まあ入会してもいいですけど、せっかく夏休みですから車を出し  
て遠出をしてもいいかと。」

忍様が何やら思案している様子。遠出つて海とかつてことかな？私  
としてはバリバリ競技プールがいいんだけどさすがにそれはずうず

うしいかなと思ひそれは黙っていた。

忍様の携帯が鳴った。

大学からだったようで、冷やし中華ランチ終了後私を図書館に送り届けて忍様の方は大学へ行くことになりました。

## 第19話 婚約者の条件 8

私がよく行く図書館は、大きな緑地公園のに隣接されている図書館でそのそばには美術館とカフェがあり、それらの利用者のための駐車場もある。

だから忍様の車で送ってもらって駐車場で「さよなら」を言った。

はつきりとした次の約束がなかったから少し悲しくなったけど、忍様が「連絡しますね」と言って携帯が入った紙袋を指したからちよつとにやけてしまったわ。

図書館に入ると座席を確保するために真っ直ぐ閲覧コーナーへ行っただ。閲覧コーナーのそばの大きな窓から駐車場がよく見える。

忍様はもう出発したのだろうかと窓の外へ目をやると、私には背を向けて車の横に立っている忍様が女の人と話していた。

知っている人かなと思ったけど、それ以上にその女の人が私より忍様にお似合いな上品な感じの美人だったのが面白くなかった。

忍様の身振りから道を聞かただけみたいで、女の方は忍様に会釈をして行ってしまった。

忍様もそのまま車に乗り込んで行ってしまった。

忍様が好きって思った。



まだ知り合ったばかり、回数にしたら今日が3回目、いつかは誰かを好きになつて結婚とか考えるだろうつて思つてはいたけど立花に通っているから今までは出会いなんてなかったし、突然現れた忍様は完璧過ぎて私なんかでいいですか？つて恐縮したくなるけど、また会えるつて分かつていてもサヨナラするのが淋しかったり、優しくされると嬉しくなったりする。

ご両親が海で亡くなられて泳ぎに行くのをやめていたのに、私が行きたいつて言つたから連れていつて下さつた。

本当はお辛い思いをしてたのではないかしら？

それでも私がお願いしたから？

亜紀枝様の反対もないからこのまま成り行きに任せてしまえば私は忍様のそばにいられる。

私つてズルいかなあ？

それでもそばにいられたらだつたら、いつか私も忍様を喜ばせたりサポートしたりできるのかな？

頭の中は忍様でいっぱいだ。

家に帰ってから忍様から携帯を頂いたことをママに伝えた。

「失くしたりしたら忍さんにご迷惑がかかるから大切にするのよ」

おっとり、のんびりママだけど、個人情報に関しては意外とうるさい。バイオリンの香澄先生が以前夏くんのことので我が家の電話番号を自分の先生に無断で教えてしまったのだ。

その時の厳しい言い方と言ったら、先生が物凄くびっくりしていた。頂いた携帯に友達の連絡先も登録すれば猶更だろう。

夕飯やお風呂を終えて自分の部屋で携帯をいじりながら、分厚い説明書のページをパラパラとめくっていたら忍様からの着信が来た。

「もしもし忍様？」

画面に「SHINOBU」って出ていたのになんで聞いちゃうんだろう。携帯って不思議だ。

耳元にはクスクス笑う忍様の声。恥ずかしい。

「そうですよ。今家に戻ってきました。宿題、捗りましたか？」

午前中ほどではなかったけど一応「はい」と答えておいた。

「あのですね。泳ぎに行く件なんですけど、面白そうなところを思い出したのでどうかと思ひまして・・・」

忍様が提案した場所はこちらからお願いしたくなるような場所だった。

それにプランも女の子が好きな人となら是非ともいう内容だった。

問題は萩乃様の快諾だけだった。

## 第19話 婚約者の条件 8（後書き）

感想お待ちしております。

## 第20話 婚約者の条件 9（前書き）

気がつけば5000突破しました。

皆さまありがとうございます。

## 第20話 婚約者の条件 9

眠い……

でも隣りで運転している忍様も相当眠いはず。

何故なら今時間は朝の4時。

しかも前日は遅くまで研究室にいらしたとか、きっと研究室から一旦あの湾岸のマンションに戻ってから私を迎えに来てくれたのだと思う。

私達は関西方面にある超大型レジャー施設へ向かっている最中で、なんと今回はお泊りなんです。

いやあ、忍様から「泊りでレジャー施設に行きませんか？」と言われた時はほんとびっくりしたわ。

でもそのレジャー施設調べてみたら、遊園地有り、ゴルフ場有り、プール有って直結したホテルに何泊かする間に色々なエリアで楽しむようになっていた。

プールも巨大スライダーや波のプールなんかもあってその上飛び込み台があるのよ！

高さにしたら3mの素人さんOKのお遊びでやるって感じだけど、これは絶対やってみたいって思っ、ママ達に確認する前にしかも泊りと分かっている、是非一緒に過ごさせて下さい」って言うてしまった。

一番の難関は萩乃様の反対だろうって思っていたけど、「忍様がエスコートしてくれるなら」って案外あっけなかったわ。

意外にもママが渋い顔になった。

夏休み中だから急な計画でホテルが手配できるかどうかって問題もあって、さすがにレジャー施設直結のホテルは無理だったみたい。

その代わり車で20分くらいのところのホテルが手配出来たからと、忍様が直々にママ達にお願いに来てくれた。

部屋が別々だということでOKになった。

残る問題は夏くんだった。

「どうして行っちゃうの？」って泊りで出掛けるって知ってから毎日ウルウル顔で聞いてくるから困った。

忍様と亜紀枝様が一緒にいらした日以来かなりナーバスになっていくみたいだったけど、「お土産を買ってくるから」となんとか納得してもらった。

車は高速に入った。

途中サービスエリアで休憩を取ったりしたけど、忍様はずっと運転。それなのに私には「少し眠っておくように」っておっしゃってくれ

て、申し訳なかったわ。

それでも無理して早く出発した甲斐もあり午前中には目的のレジヤ  
ーランドに到着した。

専用の更衣室で水着に着替えた。学校で着ているスクール水着しか  
持っていなかったから、ママが旅行用にと新しい水着を買ってくれ  
た。赤地のワンピースにデニム風の短パンがついていてパーカーで  
も羽織っていたら普通の夏服に見える可愛いデザイン。

私の年齢には十分な可愛さだ。実際に着たところで気がついたけど、  
忍様と並んだ時はどうか？と思ってしまった。

更衣室を出て忍様と約束した場所へ行くと、忍様は3人の女性に囲  
まれていた。

〇しさんかな？しかもその3人揃いも揃って色っぽい。水着もビキ  
ニで、っていうか布少くないですか？

胸を大きくて、思わず自分の胸を見てしまった。

うっ

どうしたらいいのだろうか？忍様のところ「お待たせしました」とか  
あの3人を丸つきり無視してしまっているのだろうか？と対処に困  
っていたら、忍様の方が気がついてくれてこっちにいらした。

「お待たせしてしまつてすみません」

そう言つてチラッと3人の〇しさん（推定）を見ると、何故か向こ



うはびつくりした顔をして私を見ていた。

私は忍様を見た。忍様は私の肩を抱きながらOLさん達に背を向けるようにした。

「すみません。あんまりしつこかったんで新婚旅行だと言ってしまいました。」

しつこいって「ナンパ」されてたってことかな？

それを断るために新婚旅行って

「ええっ！！！」ってちよつと声を出したところで忍様の掌に口をふさがれてしまった。

「いや、だって婚前旅行みたいなものでしょ？」

平然と何かを分析するように忍様が言った。

そうだよ

この旅行ってちよつと古めかしい気もするけど、「婚前旅行」なんだよね。

いや

ちよつと、かなり、ドキドキしてきたんですけど、「おいた」の予感が……



## 第21話 婚約者の条件 10

「さて、これから行きますか？」

忍様が聞いてきた。もちろんどのプールから行くかってことですよ。

「婚前旅行」うんぬんにドキドキ中ですが、長くあこがれていた飛び込み台を目前にしたらそれはちよつと置いておいてと切り替えてしまった。

「もちろん、あれです。」と指差したのは飛び込みコーナー。見れば順々に人が飛び込んで行っている。

もちろん危機管理のために施設の人が「GOサイン」を出してから飛び込むだけだね。

競技用のは違って高さも3m程度だけど、それでもやっぱり飛び込んで行く人を見ると結構な高さに見えたわ。

お盆休みの影響もあってかプールには人が溢れかえっていたから、忍様と私は自然と手をつないでいた。そして飛び込み台の順番を並んでいる間もずっと手をつないでいた。

時々飛び込み台にたどり着いたとたん怖くなってしまふ人がいたけど、それ以外は順調に流れていたし、そもそもものすごい長蛇の列というわけではなかったから、手をつないで黙ったままでいたらあつという間に忍様の番になった。

忍様が飛び込み台に上がった。そしてためらうこともなく頭から飛び込んでいった。この前泳ぎに行った時のような綺麗なフォームで

見とれてしまった。そばで並んでいた人たちも感嘆の声を上げていた。

水面から顔を出した忍様を見た見知らぬ女性達が「かっこいいー」って色めき立っていた。

忍様がプールサイドまで泳ぎ切ったところで「次の人」ってプールのスタッフの人に声をかけられた。

「足から立った格好で飛び込んでもいいですよ」と助言された。

確かに飛び込み台は少しなって足元が揺れる感じが恐怖心を生んだ。だって飛び込み台は高さ3m、水深も3mって表示があった。合わせて6m。いや飛び込んでプールの底まで行くことはないだろうけど、6mっていったら四捨五入して10mじゃない！って四捨五入する必要もないんだけど、にわかにパニックなってきた。

でも、ずっとやってみたいことだったし、せっかく忍様が連れてきてくれたのだから、プールサイドをチラッと見たら忍様がニツコリと笑いかけてくれた。それで、忍様のフォームを参考にしてタイムが良くなったことを思い出した。

よし。

さっきの素敵なお手本をイメージして、忍様のように、私は忍様と同じフォームで飛び込んだ。

湧きあがった噴水の水がまた水面に戻っていく。

そんな景色を思い出していた

「ぷはっ！」

水面から顔を出すと忍様が私の出てくるところを狙っていたみたいですぐに目が合った。

「やりますね」

私は得意満面でにやりと笑ってしまった。

せっかく来たのだからとウォータースライダーとか他のプールにも行った。水の遊園地って感じなので、競泳のような泳ぎをした気はしないけど、水を存分に楽しんだという満足感はあった。

最終的にはあの飛び込み台から5回飛び込んだ。

4回目5回目となると忍様が「まだやるんですか」と可笑しそうにしているので、ちよつと恥ずかしくなったけど、「地元では出来なから」と心行くまで飛び込んだ。

「また来年もここに来ましょうか？」

ホテルへ移動中の車の中で忍様が聞いてきた。

！

でも来年は忍様は研修医（試験に合格していれば）でお休みなんて取れるのかな？返事に困っていたら。

「夏休みくらいはあるでしょうから」

「来年じゃなくてもいいです。でもまた行きたいです。」

そう言った後で気がついた。忍様はプールについて言いたいわけではなく、私達の将来のことを言いたかったのだ。

私達には未来がある。

## 第22話 婚約者の条件 11

「百合乃さんには部屋は別々でと言いましたが、実は一緒の部屋なんです。」

ホテルの駐車場に車を停めたところで忍様がおっしゃった。

へ？

「桃乃ちゃんがあまりにも楽しみにしているようだったので、多少嘘を言っても決行した方がいいかなと思ひまして」

確かに施設直結のホテルは取れなかったとは聞いていたから、このトップシーズンに良く宿の手配が出来たなあとは思っていたんだよね。

なるほど

「今から帰ろうと思えば車なんで帰れますが、どうしますか？」

どうしますかって言われても、このまま車で帰るには今朝も早かった忍様の負担が大き過ぎるし、「帰りたい」なんて言ったら忍様のことを信用してないみたいじゃない。

それに多少のことなら覚悟は出来て・・・

私は忍様のお顔を見てきつぱりと言った。

「忍様と一緒に大丈夫です。」

にっこりと

私達を通された部屋はシンプルな内装だったけど、窓も大きく予想より広々していた。

ツインのベッドも多分セミダブルなんじゃないかな。

ベッドを見てたらなんだか恥ずかしくなっちゃったけど、とりあえず旅の疲れを取るために大浴場に行かなくては・・・

でもね、また男女別々になるじゃない？で、部屋のカギは一つしかないからお風呂が済めば先に出てきた方が入口近くで待っているわけじゃない？これまでの経緯を考えると、忍様の方が先に出て待っていてそうなんだよね。

そうするとまた見知らぬお姉さん達が忍様に声をかけて・・・

いやだ、そういうの見たくない。

だから私は一人ずつお風呂へ行くことを提案した。

「忍様先に入ってきて下さい。私お部屋で待ってますから」

「桃乃ちゃん？」

「ええっと、お部屋のカギって一つしかないじゃないですか。だから行き違いになったりしたら困るし、だから、そのお」



しどろもどろの私を忍様が優しく見ていた。

「分かりました。僕が先に行ってもいいんですか？」

「はい、ここでテレビでも見て待ってます。」

忍様は「分かりました」と言っ大浴場に行かれた。

私は結局テレビはつけなくて、部屋の窓から外を見ていた。

ホテルの明かりが夜空の明るくしているけど、でも家で見る夜空よりは断然澄んでいてホテルのお庭とか散歩に行けば星もたくさん見えそうだった。

しばらくするとコンコンとドアをノックする音が聞こえた。忍様が戻って来たのだ。ドアを開けた時「ただいま」おっしゃっから「おかえりなさい」と言ったら妙に照れくさい感じがした。

忍様はホテルの浴衣を着ていて、でも手も足も長いから若干短めでそんなところがまたかっこ良かった。

「今日は朝も早かったからゆっくり温まっておいで」

お風呂の支度を持って部屋を出るとき忍様が声をかけて下さった。

一瞬不思議な感覚になったけど、「はい」と返事をして今度は私が大浴場へ行った。

大浴場には男女別だけどそれぞれに露天風呂がついていた。露天風呂は極力灯りが控えられていて、周囲は視界が遮られていたけど天井からとっても綺麗な星空が見えた。

家族で旅行と言えはいつも女4人プラス夏くんでお風呂に入るので会話が絶えない。

こんな風に旅先で一人でお風呂に入るなんて初めてだ。

だまつたまの自分が不思議でならない。でもその分星空をゆっくり眺めることができた。

忍様もこの星空をご覧になったかしら？

## 第23話 婚約者の条件 12（前書き）

ご無沙汰します。

また頑張って更新していきますのでよろしく願います。

## 第23話 婚約者の条件 12

お風呂を出て部屋のドアをノックしたら忍様はすぐにドアを開けてくれた。

「おかえり」と言ってくれたことがすごく嬉しくて、でもさっきと同じで少し恥ずかしくて「ただ今戻りました」という声が小さくなってしまうた。

「散歩に行きませんか？」

お風呂から戻って来たばかりだったけど、タオルや着替えを置いて忍様とホテルの庭園に行った。

星空がよく見えるようにと証明を足元に少しだけしているの、夜の景色は想像以上にきれいだった。

忍様も私も黙ったまま歩いていて、でもいつの間にか忍様と私は手を繋いでいた。

「桃乃ちゃんはもう志望大学なんかは決めているんですか？」

「いえ、まだです。まだ、学部も決めてなくて・・・」

「そう」

まだ2年生だけど、志望学部が決まっている同級生は確かに多い。それに比べて私はまだ、大学へ行ってどんなことを勉強したいのかもはっきり決まっていはいない。

忍様はこんな私にがつかりしちゃったかしら？

ふいに忍様がこつちを向いた。

「それなら、自分が一番やりたいこと知りたいことを選んで下さいね。僕と結婚を控えているとか将来に有益とかそんなことは考えないで、今しか学べないものを選んでもいいですよ。

もちろん、就きたい職業があるならそれを目指せる学部を選んでもいいですけど、

なんにせよ、自分の願いを諦めないで下さいね。僕が協力できることはなんでもしますから、絶対に諦めないで・・・」

諦めない・・・

私は何か言った方がいいのかと思ったけど、言葉は出て来なかった。ただ、静かに「はい」とだけ答えていた。

忍様はにつこりとほほ笑んで下さった。

こんな風に私の進路の話をしている間に庭園を一周してしまった。

大学には行く、でも私はそこで何がしたいんだろう？自分に聞いてみた。

そもそも私がやりたいことはどんなことなんだろう？

それは大学に行ってできることなのだろうか？

部屋に戻ったところで、心臓がドキリとした。

だって別々のベッドとはいえ男の人と二人きりで寝るんだよ。

5年前にシンの部屋に泊まったけど、あれは台風が来ていて帰れなくなっただけだし、今回は最初から泊るって決めていて……

あつ、最初は部屋は別って話だったんだ。

忍様が何かしてくる可能性は低いとは思っただけど、免疫がないからか妙にそわそわドキドキしちゃっている。

でも忍様は部屋に戻ると大きく体を伸ばしてそのままベッドに倒れこんでしまった。

バフツという音がしてベッドの上で寝転がりながら眼鏡を外してベッドの脇のサイドテーブルに置くとその体制のままじっと動かなくなった。

しばらく様子を見ていたら静かな寝息が聞こえてきた。

夏くんと同じような寝息なのでクスツと笑ってしまった。

よくよく考えたら今日は少ない睡眠で早朝から長距離を運転し、その後はプールで泳いできつと疲労もピークに達したのだと思う。

ゆっくりと眠れるように私は部屋の明かりを消して、自分のベッドに入った。

第24話 婚約者の条件 13（前書き）

たくさんアクセスありがとうございます。



第24話 婚約者の条件 13

これは夢だ、と思った。

だってシンがいるんだもん。

どうしてか笑ってる。

シン、どうしたの？っていうか今までどこに行ってたの？心配してたんだよ。私はシンに色々聞いている。

なのにシンは何も答えない・・・

でも笑ってる。桃乃はしょうがない奴だなあって言っているみたい。

「おはよう。桃乃・・・」

「おはよう、シン・・・」眠い目をこすりながら私は答えた。

「朝ですよ。桃乃ちゃん」

えっ？

忍様！

目を開けると目の前に忍様のドアップがあって、よく見ると既に着替えは完了していて・・・

うわあゝ、寝坊した！って今何時？

「おはよう。目が覚めた？僕、ロビーで新聞読んでますから、支度が済んだら来て下さい。朝ごはん食べに行きましょう。」

忍様はクスクス笑いながらおしゃって、軽く手を振って部屋を出て行かれた。

私はふうつと深呼吸してベッドから出て洗顔や着替えを始めることにした。

あれ？

私さっき「シン」って言ったの声に出してた？

もしそうなら、あの距離だと忍様には聞こえていたよね？

ど、どうしよう・・・

心臓がバクバクしてきた。なんか男の人の影があるように思われていたらどうしよう。

動揺するままに支度を終え、忍様の待つロビーに向かう。広いロビーにはソファアールがいくつかあって、そこで新聞読んだり出発までの時間を過ごしたりする人達がいた。

端の方のソファアールに新聞を広げた忍様がいたけど、どうしてかそのそばに見知らぬ綺麗な女の人が立っていた。忍様に話しかけているようだったし、忍様も新聞は読まず女の人の話を聞いている風だった。

多分昨日と一緒に忍様をナンパ？しているんだろうなと思って、忍様が困っているならと思い二人に近づいたら忍様の声がした。

「お元気そうで良かったです。」

「忍くんもね。心配していたのよあのまま死んでしまうんじゃないかってもっぱらの噂だったから」

死！あまりに縁起でもない単語が耳に入ったので驚いて固まっていたら忍様が気がついてくれた。

「彼女が来たので、これで失礼します。」

忍様は新聞を畳んでソファから立ち上がった。

女の人は私を見て微笑んだ。とても綺麗な大人の女の笑顔ひとだった。私は言葉が出て来なかったので会釈だけした。

「こんにちは、可愛らしいお嬢さんね。良かったわね忍くん、死んじゃなくて、フッフ」

女の人の唇には綺麗なバラ色の口紅が塗られていて私の目はその色に釘づけになった。

忍様は少し呆れたように笑っていた。

「じゃあまたね、ってのは変よね。お元気で」

「サオリさんも」

サオリさんとう女性は私達の方は振りかえず手を軽くあげて立ち去って行った。

「朝ごはん、食べに行きましょう」

忍様が私に声をかけてきた。

二人はどんな知り合いなんだろう？聞きたかったのに聞くことが出来なかった。

私は忍様に手を引かれて朝食を予約したダイニングへ行った。

第25話 婚約者の条件 14

忍様はさっきの女の人のことは何も言わない。そうすると返って聞きにくくなる。

「昔の知り合いで」とかなんとか言ってくれば何か質問を返すことも出来るのに、でもさっきの「シン」発言の件が気になるから、黙ったままでいた。

忍様はなんだかとっても落ち着いた穏やかな表情でコーヒーを飲んでいた。

かつこいいい・・・

やっぱり昔の彼女とかかな？

気になるけど、「彼女ですか？」って聞いて「はいそうです」って答えられるとちょっとキツイかも、やっぱり忍様が何か言うまで聞くのは止めよう。

「おみやげ・・・」

「はい？」

「夏太郎くんにおみやげを買って帰らないとね。」

「ああ、そうですね。夏くん何がいいかな？」

忍様もさっきの女の人は話題に支度はないのだと思った。

胸に小さなしこりが残ったような気がした。

ホテルをチェックアウトした後、忍様は車で「道の駅」というところへ連れて行ってくれた。

そこで売っている地元の果物なんかを家族へのお土産にした。

夏くんには忍様が木のおもちやを選んで下さった。木を切って表面を綺麗に磨いただけの素朴なおもちやだったけど、きっと夏くんは喜ぶと思う。

買い物が済む頃には「サオリさん」のことは頭からいなくなっちゃって、私はご機嫌になっていた。

高速に乗ったら道路の混雑状況によっては休憩が取りにくくなるからと、道の駅に出ていた出店<sup>でみせ</sup>で車に持ち込めそうな食べ物を買ったり、その場で食べたりして過ごした。

ただ、あまりにも人が多くて一瞬人波に吞み込まれたと思ったら忍様を見失ってしまった。

忍様は背が高いからすぐに見つかりそうなのになかなか見つからない。

人の流れに逆らって元の所に戻るかその場に留まっていたいのにそれも出来ずどんどん思わぬ方向へ移動してしまう。

どうしよう・・・

なんだか不安になってきた。こんな気持ち、以前にも味わったことがあるような気がしする。

出店が並ぶ混雑したところから吐き出されるように、ひとけ人氣が少なくなつたところでやっと立ち止まることが出来た。

忍様に連絡してみようと思ったが携帯は車の中だ。

車を止めてある駐車場に戻ろうか、どうしようかと考えていたその時、腕を強く掴まれて引つ張られた。

!!!!!!

誰? と思って腕を掴んだ主を見たら忍様だった。

「突然消えたみたいになつたからびつくりしましたよ」

「ごめんなさい・・・」

「人が多かつたから仕方ないです。怪我はないですか?」

忍様はそう言いながら私の背中に手を回し優しくそつと抱きしめてくれた。

「・・・忍様?」

忍様が黙つたまま動かなくなつた。私は忍様の胸に頬を押し当てている状態だ。

知らない人達とはいえ通りかかる人達が抱き合っている？私達を見ている。

恥ずかしい・・・

そして忍様が私に囁いた。

「そばにいて欲しい、婚約者として」



## 第26話 さよならシン 1

トクントクンって音が聴こえる

忍様の心臓の音だ。

私達のそばを通る人がこっちを見て抱きしめられた直後はすごい恥ずかしいって思ったけど、でも段々そんなことは気にならなくなつて、逆にホッとしてきてちゃって忍様のシャツを掴んでいた。

そして……

「はい」って静かに答えていた。

「別段、何が変わるってわけじゃないんですけどね。ただ、桃乃ちゃんに直接言いたくなってしまうて……」

よどみなく進む高速で車を走らせながら忍様は静かにおっしゃった。

お見合いが故にどうしても、一つ段階を進ませる度に私達の場合は亜紀枝様、萩乃様、菊乃様、そして両親が関わってくる。忍様はそれは後回しにしてまずは私と決められたと思っていたみたい。

そんな感じのことをおっしゃっていた。

将来のことを二人で決めて、それを家族に報告する。そういう風に

したいって・・・

なんだか恋人同士みたいって思ってしまった。

嬉しかった・・・

その後忍様は大学がお忙しいのか、ご自分の様子を知らせたり私の様子を尋ねてくるメールを時折送ってくるくらいで、外出、いやこの場合デートよね、そのお誘いはなかった。

私の方も2日間家を空けてしまったためにご機嫌斜めの夏くんのお相手や、なかなか終わりの見えない宿題を消化しなくてはならない日々だった。

それでも宿題の方の目途がついてきたので、図書館へ行ったときに「お時間があるようでしたらどこかでお茶でもしませんか？」とメールを送ってみた。

だって会えない日が続いてしまったから忍様にお会いしたくなってしまうって・・・

自分からお誘いしてもきつと忍様にご馳走になってしまっただろうなあと思うと恐縮してしまうけど、それでも私は忍様からの返信を待った。

しばらくすると忍様から返信が来た。

メールのやりとりなんて何度かしているのに、今日に限っては内容を見る前からものすごく嬉しくなってしまった。

「3時過ぎても良ければ大学病院の喫茶室で待っていて下さい。合流したら移動しましょう。忍」

良かった〜断られなかった。

待ち合わせが喫茶室だけど、合流したら移動って書いてあるからお店をどこにするか考えておかなくては！私のはりきって広げていた教科書なんかを鞆に片付けて忍様のいる大学病院へ移動することにした。

この日もおとなしく忍様からの連絡を待つて過ごしていれば良かったのにと後々悔むことになるとは、私はまだ知らなかった・・・

第26話 さよならシン 1（後書き）

ふう やつとサブタイトルが変わりました

## 第27話 さよならシン 2

私立 りつりょうかん 律療館医科大学附属病院

都内でも有名な、忍様の通う大学の病院。以前伺ったけど、大学と病院は同じ敷地内にあつて実習や手術の類の見学は附属病院で行われているらしい。

ふうんってあまり興味なく聞いていたけど、実際行ってみたらびっくり！

だって大きな緑地公園みたいところなんだもの。

緑の木々がいっぱいあつて、花壇には色鮮やかな花が咲いていて。少し古めかしい何棟もある建物が大学みたいで、その隣りの白をベースにした近代的な建物が病院だった。

忍様に指定された喫茶室はその近代的な建物の最上階にあつて眺望はなかなかのものだった。

病院の施設だけど、外来の患者さんやお見舞いの人など外から来る人が利用するエリアのようだった。

忍様くらいの年齢の白衣を着た学生らしき人達もいた。

メニューを見たらちよつと気になるケーキセットやパフェがあつて移動は無しでここでお茶にしましょうと提案したくなった。

そう言ったらきつと忍様はいつものようにクスクス笑って「いいで

すよ」っておっしやっる姿を想像していた。

結局はフルーツミックスジュースというのを頼ってしまった。適当に切られたフルーツを何種類かミキサーにかけてジュースにしてくれるの。ジュースバーみたいにその場で作ってくれるから思わず頼んでしまった。

それを持って大学の校舎が見える窓際の席に座った。

一口飲んで美味しい余韻に浸っているとき、私の前をかなり派手な服装の上に白衣を着て、コーヒーらしきカップを持った二人の女の人が通り過ぎた。

通り過ぎた瞬間に匂った香水に少し嫌悪を感じた。二人は私の背中側にある席に座ったようだった。

決して大きな声ではない二人の会話が私の耳に届いた。

「聞いた？周防院くんお見合いしたって」

「聞いた聞いた。レイコがびっくりしていたよ。いつかは自分が『彼女』につて・・・タイミング計ってたみたいだったし」

「しかも相手、女子高生らしいよ」

「マジ？何それ？」

自分のことを言われていると分かってドキんとした。そして耳が二人の会話を聞き取ろうと必死になっている。

「ほら周防院くんのおばあさんか誰かが立花のOGらしくてその繋がりみたいだよ。」

「アンタなんで知ってんの？」

「周防院くんが話したゼミの教授が他の教授としゃべっているときに聞いたかったの」

「サカネ教授かあ。あの人ほんとおしゃべりだよね」

「それよりも驚いちゃったよ。だってかつては『律療医大の夜の帝王』と呼ばれた男がだよ。お見合いで結婚相手決めてるっていうだから」

そう言つて忍様を馬鹿にしたように女の人は笑った。悔しさからなのか私は両手を握りしめていた。

「だってアレでしょ？周防院の跡取りとしてはおばあさんのお気に入りと結婚しないと色々あるんじゃないの」

「じゃあ本妻狙いじゃなければレイコにもチャンスがあるのかな」

「ええ、それってどうなのよ。私だったら嫌だなあ」

「でもあの子そういうの気にしなさそうじゃん。周防院くんも結婚は結婚、遊びは遊びって感じにしたいんじゃないの」

「かもねえ・・・あつ、時間だよ行かなきゃ」

二人は席を立つて行ってしまった。

残された私は両手でスカートを握りしめ、体が震えるのを止められずにいた。



## 第28話 さよならシン 3

しばらくは動けなかったし、動きたいとも思わなかった。

ジュースも一口飲んだだけで、あとは残してしまった。

時計を見たら3時半を過ぎていたけど、忍様がくる気配がないので帰ろうって思った。

いや、帰りたいここにはいたくないって思った。

知ってしまったから、自分がどうしてたくさんのお見合い写真の中から選ばれたのかを理解してしまったから・・・

「目くらまし」

多分そういうことなんだろう。

亜紀枝様が納得した女性と結婚しておけば後は自由に出来る。そう考えていたのだろう。

しかも年齢が離れた私のような高校生なら適当に構っておけばごまかしも効く。

そんなところだろう。

帰ろう。帰って夏ちゃんとバイオリン弾いて、宿題やって、やらなくてはいけないことはたくさんある。

将来のことなんて今は考える時間はない。考えたくもないし・・・  
そんなことを考えながらゆらゆら歩いていたら後わずかで病院の外  
に出られるというところで見つかってしまった。

忍様に

「桃乃ちゃん！」

「あっ」

いつもどおりに細いシルバーフレームの眼鏡をかけていて白衣は着  
ていなかった。もう帰り支度なんだろう。

優しくそうに笑いかけてくれるけど、心が動かなかった。

「駐車場に車を停めてあるから、こっちです。」

そういわれて肩に手を置かれて駐車場へ連れて行かれた。

一人で帰りたいと思ったけど、そのことを伝える気力もなくなっ  
ていた。

早く帰りたい、そんなときに限って車は渋滞にはまっていてなか  
な動かない。

私は忍様と視線を合わせたくなくて助手席からずっと窓の外を見て

いた。

「どこかお目当てのお店はあるのですか？」

そういえばお茶でもって誘ったのは自分の方だったと今思い出した。

お茶なんかする気分じゃないからどう答えようって考えていたら視界に遊園地のアトラクションらしき物が目に入った。

電柱みたいに細長い塔で、実際間近で見たら電柱より全然太いんだろうけど、ゆっくりと乗り物らしきパーツがその電柱を昇って行って、一気に落下している。

「・・・忍様、アレに乗りたい・・・」

本当に乗りたかったわけではなかったし、忍様の問いかけの返事にはなっていないだろうけど、私はそう呟いていた。

## 第29話 さよならシン 4

遊園地やその周辺のホテルなんかの施設利用者のための駐車場をすぐに見つけることができたので、忍様そこに車を停めて遊園地へ連れて行ってくれた。

夏休みということもあり多くの人で賑わっていた。

時間帯が午後ということもあるのか少しずつライトアップされている風景の中に恋人同士らしい男女二人連れが多く眼に入った。

私達も恋人同士に見えるのだろうか？

そう考えると胸が痛んだ。

目当ての乗り物にはいくらか長めの列もあったが思ったよりは進みが早かった。

待っている間私は一言も発しなかったし、そのことについて忍様は何も聞いてはこなかった。

ほどなくして私達が乗る順番がやってきて、私の隣りに忍様が座った。

「怖くない？」

忍様が静かに聞いてきたとき、私は黙ったまま首を横に振った。

スタッフのアナウンスが聞こえた後、大きな機械音鳴り出し私達が

座っているものが静かに上昇し始め足元の地面がなくなった。

何故か私の視界はぼやけていて全くはつきりしない。足が踏ん張れない以外は高いところへ来ていると実感するものが私にはなかった。不意を突いたかのように私達の乗り物が急降下し始めた。

私のこめかみに何か水滴が触れた。それは瞳からあふれ出ている涙だっけすぐに分かった。

飛び込んでみたかった。

あの10メートルもある飛び込みこみ台から。慈しみ深いと思っていた頃の忍様の胸の中に。

そのどちらかが決して手に入るものではないということを私は理解しなくてはいけない。

泣いてなんかいられない。

足が地面に着く手前で乗り物は減速し、静かに地面に着地した。

安全のためのバーが外され私は乗り物を降りた。

後ろを振り返ることなく真っ直ぐ柵の外に出た時、強く腕を掴まれて後ろを向かされた。

ぼんやりとした視界にいるのは忍様。

「泣くほど怖かったの？」

私は首を横に振ったけど、涙は止まらずポロポロと零れていく。

悲しかった。

自分が亜紀枝様の目くらましのために選ばれていたことが、それを知ってしまったことが。

忍様に会いに行こうとしなければ何も知らず幸せな婚約者になれたのに、今だって「乗り物が怖かった」と言って涙をぬぐいながらニッソリし続ければ、遠からず私は可愛い婚約者になれるのに。

誰はばかりなく「周防院忍の婚約者」と名乗ることが出来るのに。

それが出来ない。

かといって忍様を問い詰めることも出来ない。

何も出来ない。

忍様が私を抱きしめてきた。

背中に回った手は優しく、温かだった。この温かさが真実ならいいのと思うとまた涙が溢れてきた。

忍様なんて大嫌い。

萩乃様も菊乃様もパパもママも・・・

シンだって・・・

でもそんな忍様に抱きしめられている私が一番嫌いだと思った。

### 第30話 さよならシン 5

次の日から私は宿題が溜まっているからと図書館へ行くようになった。

夏くんのご機嫌が悪くなっていたけど、宿題が終わっていないのは本当だし、家にいればママや萩乃様に忍様とのことを何か聞かれるのも嫌だった。

図書館なら携帯に出てはいけなから私は忍様からの連絡を無視するためにも図書館へ行った。

あれから忍様は時間があるであろう時は必ず連絡を下さった。

夜、時報の直後にメールがくるともう家にいるのだと理解出来た。

日中大学にいるようなときは手が空いたタイミングで送信しているようだった。

メールを開封することは一度もなかった。

でも電源を切るようなこともしなかった。

メールの着信のタイミングで忍様がどんな様子なのか良く分かった。

あの時聞いた話なんて全くのでたらめで、本当に私を大事に思っていてくれるような気になってきた。



でも怖いのだ。

本当のことが今自分が感じていることとは全く別のものだったとしたら、そう考えると忍様と連絡を取ったり、会うことさえ怖い。

何も知らないふりをする自信がないのだ。

逃げるように毎日を過ごしていたら、宿題も終わってしまった。

台風が来ていて強い雨が降っていたからさすがに家で過ごした。夏くんが合奏をしたいとバイオリンを出してきたので二人で久々に合奏をした。

「ねえもちゃんこのおんがくしってる？」「てんじょうのおんがく」  
「つてきよくの『そろ』なんだって」

そう言つて夏くんは楽譜のコピーらしきA4サイズの紙を一枚見せてくれた。

どうやらソロパートの箇所だけを切り貼りしてコピーしたものを夏くんに渡したようだ。

つてことは「天上の音楽」というのはオーケストラか小編成の楽曲のタイトルということになるのかな？

楽譜を見る限りではメロディーは割とシンプルだけど、『ソロ』というからには聴かせるべき表現力が要求されるのだろう。

「初めて見る楽譜かな？夏くん今この曲練習してるの？」

「うーん、よくわかんない。かすみせんせいがちょうせんしてみ  
てはいつたけど、しゅくだいじゃないって。どうしたらいいの？」

「なつくんはどうしたい？やってみたい？」

「やってみたい！！！」

「じゃあ少しずつ練習してみるといいよ。」

「わかった！ぼくがんばるね。じょうずになったらももちゃんき  
てくれる？」

夏くんは瞳をキラキラさせて言った。私は「もちろん聴かせてね。」  
と答えた。夏くんは本当にバイオリンを弾くことが好きなんだなあ  
って思った。

「夏くん・・・もしバイオリン弾けなくなったらどうする？」

「えーやだよ。かすみせんせいのれっすんにいけなくてもいいけ  
ど、ばいおりんないのはいや。」

香澄先生はいいのか・・・

「ぼくね、かすみせんせいのおうちにしらないおとながくるのがい  
やなの。あとはぜんぶいいよ。」

知らない大人って・・・香澄先生誰を呼んだの？

「バイオリンがあればいい」夏くんのシンプルな気持ちがとても羨  
ましく、自分が色々なことを複雑に考え混んでいるような気がして

きた。

### 第30話 さよならシン 5（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

なお作中でできます「天上の音楽」はゆほの作ったものになります。  
ご了承くださいませ。

### 第31話 さよならシン 6

翌日は台風一過でもものすごい晴れた。一瞬シンと出会って送ってもらった日のことを思い出した。

夏くんの誕生日が近いせいもあったのだろう。

ママ達には宿題は終わったとは言わずにいたけど、まだ終わっていないと言い切るとあまりに拗りが悪いようにも見えそうだったので、お昼を食べた後、生徒会の用事を手伝いに行くと嘘をついた。

今年の生徒会長は「雪姫<sup>ゆきひめ</sup>」という愛称でみんなから慕われている人物で、彼女は縁故組みにも関わらず「進学組みとも親睦を深めたい」と言ってお茶会などを開いてくれていた。その流れで1学期の終わり頃には生徒会の手伝いをするくらい雪姫と個人的に親しくなっていた。

そのことをママ達は知っていたので、「雪姫が手伝いつて欲しいと言っている」と言うだけであっさりとお出掛けすることが出来た。一瞬「雪姫」の名前を出したのはまずかったかなと思っただけで、言ってしまったことは取り返しがつかないし、帰宅が遅くならないように注意することにした。

ただし立花の制服を着ての外出となってしまうた。

制服を着た自分の姿を鏡で見て、この格好で繁華街をウロウロするとやはり「立花の生徒」として目立ってしまうからどこかで着替えた方がいいかなとか色々考えた挙句、プールに泳ぎに行けば水着に着替えるから目立つ心配がないことに気付いた。

学生鞆に水着とタオルも加えて私は外出し、そして最近行っていないあの公共のスポーツセンターへ向かった。

夏休みのプールはそれなりに混んでいた。忍様と行ったスポーツクラブとは違い、夏休み中に泳ぎを上達させようと頑張っている小学生なんかもいた。

私はとにかく泳いだ。スポーツクラブに行ったときは一旦プールサイドに上がって他の人の泳ぎを見たりもしていたが、泳ぎに行くのも久々ということもあり、ひたすら何往復もできるコースの方を選んだ。

遠泳といってもおかしくないくらいに泳いだ。

プールの規則となっている休憩以外はずっと泳いでいた感じだ。

気がつけば日が落ちている。

家でお昼を食べて夏くんがお昼寝するまでは家にいて、プールに着いたのは3時前くらい。

プールの時計は7時を過ぎていた。

2時間の利用時間なんかとくに過ぎているし、きっとママ達が心配しているはずだ。

私は急いで更衣室に戻った。

泳ぎ過ぎてしまったようで、ドライヤーを持つ手がしんどいくらい体が重くだるかった。

ここでママ達に連絡するれば「今から迎えに行く」と言われたときに困るから、辻褄の合う場所までは連絡しないことにした。

多分携帯に連絡が何度も入っているだろうと思うと携帯を見る気にもならなかった。

更衣室をでたところで超過利用の料金を払った。

着替えに相当時間がかかったようで外は真っ暗だった。スポーツセンターに着いたときは賑やかだったロビーも今は閑散としている。

今何時なんだろうと思うって時計を見ようと鞆の中に入れたままだった腕時計を探しているときだった。

「きみって立花の子だったんだね」

後ろを振り向くと知らない人が・・・

いや知ってる。以前にプールでしつこく話しかけてきた人だ。

「ねえ向こうでおしゃべりしようよ。」

そう言って私の腕を掴もうと手を伸ばしてきた。

「いやっ」

腕を掴まれないようにと手を振り払った時、カタンと何かを落とした音がした。

余所見をしたら捕まると思い、それが何だったかは確認できなかった。

逃げなきゃ。

そう思って少しずつ後ずさりをして、その人の間隔を広げてから背中を向けて走り出そうとした。

「えっ!?!」

グイッと体が後ろに引つ張られた。

鞆の持ち手のところを掴まれたのだ。

「ねえ向こうに行こうよ。」

怖い・・・

鞆を手放して私は走り出した。でもプールで泳ぎ疲れて体力の限界だった私はすぐに追いつかれてしまい、あっけなく腕を掴まれてしまった。

萩乃様の声が遠くで聞こえた。



「その男について行つてはダメだよ……」

## 第32話 さよならシン 7（前書き）

ストーリー上残酷と思われる描写があります。

苦手な方はご注意願います。

### 第32話 さよならシン 7

「放して下さいっ」

男は聞く耳など持たず私の腕を引っ張って駐車場奥の暗がりへと進んで行く。

駐車場の奥には樹木が植えてあつてその奥は真っ暗で何も見えない。男はそこへ乱暴に私を投げ飛ばした。

昨日の雨でぬかるんでいて足元の踏ん張りがききにくく、私は投げ出された勢いのまま尻もちをついた。

助けを呼びたいのに声が出ない。そのことが自分の中にある恐怖心を増幅させていた。

「立花の子と仲良くなれて嬉しいよ。」

そう言いながら男が覆い被さってきた。手足をバタつかせて必死に抵抗していたら「バシッ」と右手が平手打ちするように男の頬を叩いた。

「なにしゃがる!」

バシッ。

逆切れし態度を豹変させた男に殴り返された。しかも向こうの方が力があるから頭がクラクラする。

一瞬動きが止まった隙に男がの私の両腕を片手で掴んで組み敷いた。

「いやっ、うっ」

叫んだ瞬間男が口の中に布か何かを突っ込んできた。

足をバタつかせて出来る限りの抵抗を試みたが逆にスカートの中へ手を入れさせてしまった。

もうダメなんだっと思うと涙が溢れ出てくる。

「桃乃！」

ガザツという植え込みが入ってくる音と一緒に声がした。

シンの声だ！

「貴様っ！」

シンのそう言う声が聞こえると私の上にいた男が剥がされた。

力が入らず起き上がれない私の耳にバシッとかガツツとか殴ってるような音が聞こえてきた。

ガサガサッと植え込みを出て行く音がするとぐいっとな私の体引き起こされしっかりと抱きしめられた。

「ゲホッ・・・ゲホッ」

苦しくて男に入れられた布を吐き出した。

そのとき私を抱きしめて入る人の腕が緩んだ。

駐車を照らす街灯が薄明かりでその人の顔を照らした。

私を抱きしめていたのは忍様だった。

その顔は絶望に満ちていて多分青ざめているに違いない。

「あのう・・・」

泥だらけで見た目が凄いいことになっているけど、一応無事なことを伝えようとしてみた。

「もう、いいから」

泣いてるような絞りだすような声で忍様は私を再び抱き寄せて背中をさすりながら言つと、そのまま私を担ぎ上げた。

こういつときってお姫様抱っこじゃないのかな？と頭の隅にいる冷静な自分が思った。良く見ると忍様はもう片方の手に私の鞆を持っていた。

忍様は私を駐車場に停めてあつた忍様の赤い車へ連れて行つた。

シートに泥がつくのが気になったのに、忍様は有無を言わず私を助手席に座らせてしまい、大学で使っているであろう白衣をかけてくれた。

忍様は何も言わない。ただ私をじっと見つめている。

その視線から逃れたいのに逃れることが出来ない私の目からは涙が  
どんどん溢れてきた。

最後にはうわ〜んと大きな声で泣き叫んでいた。夏くんじゃあるまいし何やっっているんだろうと思っているのに涙は一向に止まる気配を見せない。

忍様は優しく労るように頬を撫でて涙を拭いてくれた。

その甲斐あってか、少し落ち着き始めた私に忍様が言った。

「帰りましょう」

私は涙をぬぐいながら頷いた。

車が静かに発信した。

窓の景色を見ながら私は眠りに落ちた。

### 第33話 さよならシン 8

体に細かな振動が来る。

遠くで救急車のサイレンの音がする。

あつ私が救急車に乗ってる？

体を少しずらしたら忍様の声がした。

「事故があつたみたいで進まないんだ。もう少し休んでなさい。」

忍様は私の瞼を覆うようにそつと手のひらを乗せた。

暖かった。

私はそのまま目を閉じた。

・・・通りの向こうに誰がいる。

誰だろう？

目を凝らして見るとシンだった。

ああシンが私を家に送ってくれたところなんだ。

でもシンはあの時みたいに手を振ってくれない。

私は「ありがとう」って言いたいの、タイミングが掴めない。

シンは困ったような寂しいような表情<sup>かお</sup>して私を見ている。

「どうしたの？」そう聞きたいのに声が出ない。

「ねえシンどうしたの？」心の中で叫んでみる。何度も何度も叫んでいるけど声にならないから涙が出てきた。

涙がこめかみに触れたと思ったら突然自分の体が急降下して行く。

この前忍様と行った遊園地の乗り物に私は乗っていた。

乗り物は減速することなくどんどん下へ落ちて行く。

このまま落ちたらどこへ行くんだろう。

そう思った私は周りの景色を確認しようと目を見開いた

目を開けたら、乗り物には乗っていなかった。夢だったらしく、どうやらどこかに寝かされているらしい。

病院？と思ったけど首だけ動かして周りを見たら誰かの部屋のように



だった。

開かれたドアの向こうから人の話し声が聞こえる。

忍様の声だ。

「・・・すみません。僕の気持ちも落ち着きたいんです。」

誰かに懇願しているようだ。

ああそうかここは忍様のマンションだ。どうして寝ているのかは分からないけど、家に帰らなくてはと思いベッドから体を起こした。

!!!!!!

タオルケットをどけた私の体はブラとショーツだけだった。脚や腕には擦り傷がいっぱいあって薄く痣も出来ている箇所もある。

「なに・・・これ・・・」

急に寒気がして自分の体を抱きしめた。

「あつ起きたみたいです。では申し訳ないですが今晚は預からせてもらいます。」

忍様が電話を終えたようだった。

自分に何が起きているのか理解できない。忍様がこっちに来るようだったのでどけてあったタオルケットを自分の胸に引き寄せ、下着姿を見られないようにした。

それと同時に水色の布のようなものを持って忍様が部屋に入ってきた。

「気分はどう？頭が痛かったりはしない？」

私は黙って首を横に振った。

忍様は手に持っていた水色の布を私に掛けた。忍様のシャツだった。私がシャツに袖を通していると忍様が再び声をかけてきた。

「あのね、制服は泥だらけだったから今下のクリーニング店に出しているところです。」

あつ、そっか。私プールの帰りに襲われて・・・

「傷は一応消毒だけはしてありますが、どこか痛いところがあったり気分が悪かったりしたら言って下さい。」

忍様が助けに来てくれて・・・

どうして忍様はあそこに来たんだろう？？

「制服、脱がしちゃったけど、桃乃ちゃんの名誉に関わるようなこととは何一つしていないから安心して下さい。」

そう言われた瞬間、反射的に忍様を見てしまった。

忍様はどことなく疲れたような困ったような表情だった。

それでも優しく私に笑いかけてくれて

「どうして連絡くれなかったのかは今は聞きませんがね。それよりももう少し休んでおきなさい。」

そう言って私を寝かした。タオルケットをかけなおしたときに手を握ってくれた。頭の中はぐちゃぐちゃだけど心がホッとして行くのが分かった。

「あれって、『おいた』になるのかなあ」

天井をぼんやり見上げながら呟いた。

「違うでしょ。ああいうのは『おいた』なんて言いません。あれは『暴力』ですよ。」

感情を押し殺したように忍様が答えてくれた。

私は首だけを忍様の方に向けた。忍様の目は潤んでいるような気がした。

「ここにいるから、目をつむって・・・」

私は忍様の言われた通り目を閉じた。

### 第34話 さよならシン 9

電話が鳴ってる・・・

そう思つて目が覚めた。

忍様はいないのだろうか？音が止まない。

様子を見るためにベッドから起きてリビングへ行ったら、ほぼ同時に着信音は止んだ。

「ただいま出掛けております。ピーという発信音の後にお名前メッセージをお願いします。」

そんな機械の声が聞こえてきた後すぐに「ピー」と鳴った。

「夜分遅くにすみません。サカネゼミのサイトウです。来週のサカネ教授の特別講義が2時からに変更になったので、お電話しました・・・」

・・・妙な間だ。普通「ガチャ」とか「ツー」って音がするはずだけど、向こうはまだ電話を切っていなかったようで再び声が聞こえた。

「あとお良かったら特別講義の前にランチでもしませんか？・・・また連絡しますね。」

ああそうか・・・

ここも私が来るべきところではなかったのだと悟った。

すぐに帰ろうと思ったけど、忍様のシャツを羽織っているだけなので、ママに連絡して、驚くだろうけど迎えに来るときに着替えを持って来てもらおうと思った。

「桃乃ちゃん」

ぼんやりリビングに立っていたら忍様がどこから戻って来たようだった。目が合った瞬間不自然に俯いてしまった。

「あのお、電話、貸して下さい。ママに着替えを持ってきてもらいたいんで」

「百合乃さんには今日はここで預かりますって連絡してあるからゆっくり休んでくれていいだよ。」

忍様は私の顔を覗き込むように言った。

どうして？どうしてこの人は私の優しくするの？？

私は俯いたままシャツを握りしめていた。

「ほつといて下さい・・・確かにさっきは怖かったけど、何もなかったし・・・私のことなんてどうでもいいじゃないですか！！」

「どうしてもよくないですよ！」

忍様の声が怒りを含んでいるように荒々しかったので、思わず顔を上げてしまった。

忍様の表情は本当に苦しそうで、まるで私のことが心配で堪らないみたいに見えた。

そうじゃないくせに……

「どうして私のこと構うんですか？」

睨みつけるように半分は涙目で忍様に問いかけた。忍様はためらうことなく即答した。

「好きだからに決まっているでしょ！」

「そんなの嘘じゃないですか」

「どうして嘘だと思うんですか？」

「……んですか……『夜の帝王』ってなんですか？」

「それっ……」

「私との結婚なんて、本当は自由でいるための、亜紀枝様への目くらましとかじゃないんですか？」

忍様が初めて動揺した表情を見せた。

「だから、好きじゃないから、私と旅行に行った時、指一本触れなかったんじゃないですか？」

これじゃああの旅行の時に何か起きて欲しかったと言っているよう

だ。でも自分の意志とは関係ないところでポロポロと涙がこぼれていた。

忍様は黙ったままだった。私を言い含めるために言いわけを考えているのかと思っただけ、感情が全く読めない表情をしていて、どうしてか忍様も苦しんでいるように見えた。

「僕のこと、この前待ち合わせした時にでも聞いたんですか？」

忍様が静かに問いかけてきた。私は黙ったまま頷いた。

第34話 さよならシン 9 (後書き)

感想お待ちしています。



### 第35話 さよならシン 10

「確かに僕は亜紀枝様が呆れるくらいの、立花で言うところの「おいた」をたくさんしていた時がありましたよ。」

今ちゃんと説明すれば、桃乃ちゃんが耳を塞ぎたくなるようなことばかりです。

でも貴女とこれからの人生を一緒に生きて行きたいと思っているのは事実です。

結婚するんであれば隠し事はない方がいいに決まっていますから、貴女が大人になる前には話しをするつもりでした。本当に結婚するかどうかはその時に決めてもらってもいいと思っていましたし。

ただ、貴女の成長を待つという理由で先延ばしにすることが本当に正しいことなのかは常に迷っていましたけどね。」

忍様は最後の一言で悲しげに微笑んだ。

「だから何もしなかったんですか？・・・」

「・・・あの旅行の時？だって貴女は立花独特の価値を持って育てられているから、実際に入学したのは中学からでも、貴女の家族は立花の卒業生ばかりじゃないですか？自然と価値観が身についていておかしくないでしょ？」

確かに・・・同級生の中には立花の教育方針に驚いていた子が何人かいたけど、私はすんなり受け入れられた。

「僕の欲望だけで貴女と一線を越えても貴女には罪悪感しか残らない。その上僕の価値観に無理に合わせることになる。そんなことはさせてはいけないって考えてましたよ。」

「……………」

再び沈黙が訪れる。

多分、いや確実に忍様の言っていることは正しい。今何を聞かされても結婚をするしないの判断は私には出来そうもないから。

でも何かが納得できない。

私が忍様から聞かされたいのはそんな事なんかじゃない。

私が今知りたいのはそんなことじゃないのに……

そう思いながら両手をギュッと握りしめていた。

「……………」

のどが震えて上手く声が出せない。

でも聞きたい。

伝えたい……………」

忍様を見つめる自分の視線に力を込めた。

「し、忍様！私のこと、す、好きですか？私は忍様のことが大好きです！！」

いきなり叫ぶように言ったので、忍様はとっても驚いた表情になった。一瞬体がピクッと揺れて眼鏡がずれたようだった。そして指でそれを直しながら、

「好きですよ。さっきも言った通り、僕は津和路桃乃が大好きですよ。」

ニツコリとあの麗しい頬笑みで忍様が「好き」って言うてくれた。今度はちゃんと信じられた。でも顔に火がついたみたいに熱くなつて、心臓も急にドキドキ出して、頭がぼーっとなってきた。

いやいや、ここで終わりにしてはいけない。

「だったら、好きなら、好きってことをちゃんと教えて下さい。大人になった時じゃなくて今の私に・・・」

私は忍様をしっかりと見つめて言った。

忍様が力のこもった私の手をほぐすように両手で包みこみながらしっかりと見つめてくれた。

「いいですよ。ちゃんとお教えします。」

忍様の優しい声が私の耳に響いた。

私は心の中でシンに語りかけた。

「忍様について行きます

」

### 第36話 愛の書簡 1

ずじじじじじじじじん

の「~~~~~」がずっと頭の中で続いている。

昨日は色んな事が起こりすぎた。

プールで体力が果てるまで泳いでいたら、暴漢に襲われかけた。

間一髪で助けてくれたのは忍様。

あれ、そういえばどうしてあそこに現れたのかしら？

忍様のマンションに連れていかれて手当などをされて、その間私はほとんど寝たり起きたりだったから記憶がちょっと曖昧。

それから忍様から過去に「おいた」の経験がたくさんあることを告白され、まあこれは私からその話題を振ったのだけれど、詳細な内容に関しては私が大人になるまでにとおっしゃって昨日は教えてはくれなかった。

でも私は「好きってことを今の私にちゃんと教えてほしい」ってお願いした。

正直、一線を越えてしまうことも覚悟していた。

なのに

なのになのに

忍様が教えてくれたことは「津和路桃乃のどんなところが好きか」ということで、しかも1つ言う毎に、今度は私が「周防院忍のどんなところが好きか」ということを言わされ……

2ターン目を終えた頃、疲れ切った私は眠りに落ちていた。

朝は忍様に起こされ、忍様の作った朝ごはんを食べた。

美味しかったあ。

私が朝ごはんを食べている間に忍様はクリーニングに出した制服を取りに行つて下さり、それに着替えて忍様と一緒にあの度派手な車の置いてある駐車場へ行つた。

マンションを購入している忍様、駐車場もマンション内のものを購入入していて、その駐車場はそれぞれにシャッターが設置されている。

リモコンキーを使ってシャッターが上がり切るのを待っていた時だった。

隣の駐車場の人が同じようにリモコンキーでシャッターを上げ始めた。

何気なく隣りの人を見たらその人は立花高等科の生活指導の先生だった。

先生を見た瞬間私は無意識に「先生おはようございます」と挨拶をし、頭を下げた瞬間自分がとんでもないことをしてしまったと気が

ついた！

顔を上げれば先生の方も驚いた顔をしていて、それでも「おはよう」と答えて下さった。

こちらのシャッターが上がリ切った時に忍様は「お先に失礼します。」と挨拶をして下さったが、私は車に乗り込んで忍様がシャッターを下げている間はもうどうしていいのかわからず、頭の中はパニック状態だった。

絶対「朝帰り」だと思われる。いや「朝帰り」なのは間違いない。でも「おいた」は無かったのに……

いつそのこと忍様との間に何かが起きていたらこんな気分にはならなかったのかもしれない。

そう思いながら私は深い深いため息をついた。

「今日は何か予定が入っていますか？」

「いえ、特には……」

でも遊びに行ったりお出かけしたりする気分ではない。

「亜紀枝様に取成して頂くかと思うのですが、そういうのはお嫌ですか？」

正直に言えば嫌だった。なんだか他人の権力に縋るようで、でも本当の事情を知ってもらいという気持ちがあったし、今の忍様を誤解されるのは嫌だったから忍様の提案を飲むことにした。

「では僕の実家にこのまま向かいますね。」

そう言うと忍様は私の知らない道へ車を走らせた。



### 第37話 愛の書簡 2

長い時間走った車はあまり見たことがないくらい高い塀のそばに止まった。

長い時間といっても気分的に長く感じたただけかもしれない、実際はどのくらいの時間が良く分からなかった。

忍様が行き先を変更した時に時計を見ていなかったし・・・

車の窓から見えるその塀は距離もかなりあって、塀の中の敷地はかなりの広さのように推察された。

忍様はダッシュボードの中をいじっていて何かを探しているようだ。

塀の上から綺麗な緑の葉がたくさん見える。

あそこは公園かなにかで樹木がたくさん植えてあるのだろうか？と思っていたら、忍様が小さなリモコンを手にしてその塀に向けた。

塀だと思っていたけど、その一部は門だったらしく仰々しく開き始めた。

「・・・もしかして・・・」

いやまさか？と思いつつ声に出していたら忍様に聴こえていたようで

「はい、僕の実家です。」

え？

「嘘？」

これしか言葉が出て来なかった。

「すみません。嘘じゃないんです。僕の実家だけじゃなくて、親戚やうちで働いてもらっている者も住んでいるので、中に数軒家があります。敷地内の車道は一方通行で僕が住んでいた家には一番最後に着きますからもう少し車に乗っていて下さい。」

車はどうやら敷地内を時計回り進むらしく、門を入れて左に入って行った。門の方は今度はリモコン操作なしに勝手に閉まり始めた。

手に変な汗が湧いてきた。

車をゆっくりと走らせながら忍様はご親戚の家についても説明して下さった。

敷地内に住むご親戚全員が「周防院さん」になるので、敷地内で使われる通称があるらしく、門を入ってから見えるお家順に「鷹野宮」たかのみや「柏木」かしわぎ「高月」たかつきと呼ばれているらしい。

この呼び名はその家を建てた時にその家の奥さまに当たる人の旧姓が使われているらしい。

ちなみに忍様が住むお家は「本家」ほんけもしくは「朱雀」すざくと呼ばれているそうです。

4軒目に見た白い落ち着いた建物にはベランダがたくさん見え、周

防院家内で働く方々の寮ということだった。

1軒1軒の間にたくさんの樹木があつて高級別荘地を思わせる風景に啞然としていた。

最後に着いた白い大きな洋館が忍様の正式なご実家、「周防院本家」通称「朱雀院」<sup>すざくいん</sup>だそうです。

何故???洋館で「朱雀」??

しかも呼び方も「朱雀」だったり「朱雀院」だったりするようで、私のキヤパを軽く超えてしまっている。

忍様の「おいた」の詳細以前に本当に結婚できるのだろうか?と途方に暮れた表情<sup>かお</sup>をして黙っていたら忍様が声をかけてきた。

「もうひとつ話しておきたいことがあるんです。」

「な、なんですか?」

これ以上何があるんですか!?

私は顔を引きつらせていた。

忍様はそれ見て苦笑した。しかも笑い顔を見せないように横を向いたのよ。

ちょっと失礼じゃないですか。って思ったけど、多分引きつった私の顔を見ながらだと話しが続けられないでしょう。

そこは何も言わないことにした。

「僕、この家の相続権無いんです。」

### 第38話 愛の書簡 3

はい？

「子供の頃から医者になりたくて、でも父は周防院を継げと言っていたのでずっとケンカ状態でした。19歳の時に両親ともに亡くなって、20歳の時に正式に相続権を放棄しているんです。丁度、鷹野宮の一人息子、僕のいとこにあたる男で祝しゅうつていうんですが、彼が18歳になった時だったので、その時彼が後継ぎに決まりました。」

「はぁ……。」

「ってことはこのお屋敷達とはあまりご縁がないということかな？」

「それはそれでかなり気が楽でちょっと安心だったりする。」

「顔を引きつりがほぐれたのが分かった。」

「しがない勤務医になるでしょうが、それでもいいですか？」

「真顔の忍様が目の前に顔を寄せてきたのでびっくりした。」

「は、はい……。」

「反射的に返事をしてしまった。」

「あれ？今って運転中ではないのでしょうか？と思っていたら車は朱雀院の前に止まっていた。」

ん？今のやり取りってプロポーズでそれにOKしたことになっちゃ  
うのかしら？

自分の発言に悩んでいたら、大きな玄関ドアが開いてどこかでタイ  
ミングを計っていたかのように上品そうで優しい老紳士がドアの  
向こうから現れた。

老紳士は私が座る車の助手席の扉を開けてくれた。

誰かな？

「あ、ありがとうございます」

ぎこちなくお礼を言うと老紳士は優しく微笑んでくれた。

私が車を降りたと同時に忍様もご自身で車を降りられた。

「おかえりなさいませ、忍様」

???

このやり取りからすると・・・もしかしてこの人は？

「久しぶりです。桃乃ちゃん、彼はこの家の家政を取り仕切ってい  
る水嶋です。」

やっぱり～

執事さんだぁ！！！！

「は、初めまして津和路桃乃です。」

「お話は亜紀枝様より伺っております。」

頬笑みを絶やさず、水嶋さんが私の挨拶に答えて下さった。

「水嶋、亜紀枝様にお会いしたいんだけど、今こちらにいらっしゃる？」

「はい、ですが、ただいま来客中でございますので、中でお待ちいただけますでしょうか？」

「特に予定はないから待たせてもらうよ。」

水嶋さんの案内で私達はお屋敷の中の一室に通された。

そのお部屋は初めてお会いしたホテルのラウンジより広く、グランドピアノまであるのよ！

誰が弾くんですか？

お部屋の豪華さと品の良さに圧倒されていると三人掛けのソファーに座った忍様がこっちへおいでと言う様に手招きをしてきた。

「えっとお・・・」

この場合隣りに座ってもいいのだろうか？

いや、向かい側にある一人掛けに座るのは間違っているから・・・

確実に不自然と思われるくらいの隙間をあけて、私は忍様と同じソファーに浅く腰かけた。

ご実家だけあってかなりリラックス状態の忍様は少しだけ私の方に体を向けて背もたれに寄りかかるように座っている。

おみ足も長いから脚を組んだ姿たこれまたカッコイイ！

ポーっと見惚れていたら水嶋さんがお茶とお菓子を持ってきてくれた。

お菓子は小さい焼き菓子がたくさん、クッキーにカットしたパウンドケーキ、フィナンシェにマドレーヌ、どれも可愛くておいしそう。

「忍様、本日は柏木へのご訪問はいかがなさいますか？」

「由香里様かあ、亜紀枝様の来客は時間がかかりそう？」

「実は来客というのは祝様でございまして、祝様の社長ご就任のパティーに関してのことでしたから、さほどお時間はかかられないかと存じます。」

「だったら、今からちょっと行ってくるよ。桃乃ちゃん。」

「はいっ！..!」

お菓子の目を奪われていたら急に声をかけられたのでびっくりした。

「申し訳ないけど、30分ほど留守にします。ここで待っていても



らっていいですか？今から伺う柏木の由香里様にも貴女を紹介したいんですが、お話し好きな方なので今連れて行くと長くなりそうです。亜紀枝様へのお願い事もありあすからこれは後日ということにしたいのですが」

私の様子に笑いをこらえながら忍様がおっしゃった。

あまりの恥ずかしさに少し素っ気ない感じで「分かりました。」と答えてしまった。

忍様は「ゆっくりしていていいですからね。」とおしゃってからお出かけになられた。

もっと可愛くお見送りしたかったなあ。

### 第39話 愛の書簡 4

柏木にお住まいの「由香里様」は亜紀枝様のいとこの息子さんに嫁いできた方で、数年前に大きな病気で手術をされて、今は自宅療養中とのこと。

人がたくさん集まる賑やかな雰囲気のお好きな明るくて華やかなお方だそうで、忍様は亜紀枝様と同じように実のおばあ様として慕われているとのこと、だからご帰省される度に柏木をご訪問されっていると、水嶋さんが教えてくれた。

水嶋さんもお仕事があるので私は広い部屋に一人残されてしまった。

美味しいお菓子と香り豊かな紅茶を満喫していると、再び部屋の扉が開いた。

忍様が出掛けてからは10分と経っていないので、誰が来たのだろうと思つて扉の方を見た。

忍様と同年代くらいで青年実業家風の仕立ての良いスーツを着た男の人が立っていた。

「おつ、立花」

男の人は嬉しそうに言った。唐突な言い方で驚いていたら、癖のある茶色の髪に人懐っこそうな笑みを浮かべて「俺ってラッキー」と呟きながら男の人は私の方へ歩み寄ってきた。

「ねえ、お願いがあるんだけど」

先ほど忍様が座っていた位置よりも私に近い場所に座った男の人はスーツの内側にあるポケットから薄紫色の封筒を出してきた。

「この手紙を立花の『紫色のお姫様』に、誰にも内緒で渡して欲しいんだけど」

「??」

有無を言わず渡された封筒は紫色の濃淡の和紙で出来ていて、どつしりした手触りと独特風合いを持ったもので、表面には「紫様」と書かれていた。そして何枚便せんが入っているんだろうと思うほど分厚かった。

「あと出来るだけ早くね。あつ、それ渡す時は『命をかけて』ってことづけてね。」

いや、まだお引き受けするとは言っていないんですが、それに貴方は誰ですか？

そう言いたいのに男の人は自分のペースは崩さずに鞆の中からペンとメモ用紙を出して何やら書きだした。

書き終わるとメモ用紙を1枚剥がして

「で、ことが首尾よく運んだらここに連絡くれる？」

!!!

差し出されたメモ用紙を見て驚いた。

5年前シンが連絡先を書いてくれたのと同じ信用金庫のメモ用紙だった。

「この信用金庫・・・」

「周防院の個人資産で結構ここに預けているんだよ。あつ、ところで君だあれ？」

用事を頼んだ後に聞いてきますか？

なんだか突っ込みどころ満載な人だなあ。

「津和路桃乃と申します。」

「あつ俺はシュウ、周防院祝つていうの、よろしくね桃乃！」

この人が祝様かあ。

「宜しく願います。」

「うん！さっきのお使いも頼んだよ。なるべく早くね。それと朱雀の人にそれ見られると困るからもうしまっちゃって」

あつ、これやつぱり引き受けちゃったことになるんだ。

いい人そうだけどこの件に関してだけは納得が出来ないが、立花は女子校、関係のない男性は立ち入ることが出来ない。

手紙の内容が問題無いものなのかは気になるけど、祝様の雰囲気か

らすると大丈夫ではないかと判断して私は手紙とメモをポケットにしまった。

そして意外にもスカートのポケットが深いことを知った。

## 第40話 愛の書簡 5

「桃乃ちゃんお待ちせしま・・祝・・・」

ポケットから手を出したところで忍様が戻っていらして、祝様に気がついた。

「よお、忍、生きてたか？」

「お前いつ帰国したんだ？それにやせて・・」

忍様は驚いたようなそして心の底から心配しているという表情をしている。

「だってさあ、空港で留学前の知り合いに久しぶりに会ったら『太ったわね』って言われちゃってさあ。悔しいから言われたからその日から毎日昼しか食べていない。あつ日本に帰ってきたのは2週間くらい前かな」

「何やっているんだ、ちゃんと食べよ。」

そう言ったところで忍様は私と祝様が座っている間をじつと睨んだ。

「・・・ところでお前なんでそこに座っている。」

「水嶋から忍が来てるって聞いたから、どこにいるのかなって探していていたら、ここで桃乃が一人で寂しそうに座ってて、一緒にお茶しようかなって思ったところ・・・まさか・・・忍？・・・この子に・・・」

祝様は私と忍様を交互に見ながら段々表情を曇らせて、言葉も濁していつて

「また、昔の悪い癖が出たのかあ」

落胆するように言った。

「立花はマズイだろう。誇り高き亜紀枝様の愛する母校だぞ。どうすんだよ。」

聞いている忍様の方が苦虫を噛み潰したような表情になった。

「違う！彼女は先月僕とお見合いして、今は結婚を前提に交際している最中の女性だ。亜紀枝様のご学友の曾孫に当たる子だ。お前が想像しているようなことは一切ない！」

「ふーん」

祝様は今度は私の方をじっと見た。

「忍に運命感じちゃったの？年が近い俺にしておけば？同じ周防院だよ。」

「えっ、いやっ、だって・・・」

返事に困っていたら背後に回った忍様が後ろから私の両肩を掴んで祝様に噛みつくように言った。

「お前に入る余地はない！！」

「そうなの、桃乃？」

祝様がさらに強い視線を私に向けた。なんだか心の中を探られるような視線だった。

「えっとお・・・忍様が、いいです。」

祝様がニヤリと笑った。

私は恥ずかしくて顔から火が出そうなくらい熱くなって俯いた。

「じゃあさあ。忍と一緒においでよ。」

祝様は鞆の中から今度は白い封筒を取り出した。

さっきの封筒とは真逆にいかにも既製品という感じのさらりとした手触りのものだった。

祝様は私に渡したけど、表には「周防院忍様」と書かれている。

「何これ？」

後ろから覗き込んでいる忍様が聞いてきた。

「俺の副社長就任のパーティの招待状。大学もまだ卒業してないつてのに副社長つてなんだよって感じだよなあ。さっき亜紀枝様にも渡してきた。忍と桃乃で一緒においでよ。」

なんだか半分独り言のように祝様は話している。



「考えておく」

忍様は一言だけ言って招待状を私の手からさりげなく抜き取った。それからじつと祝様を見ている。

祝様は忍様に見られていることなんか気にしてませんという風に鞆を閉めて立ち上がった。

「じゃあな」

「祝、とにかくちゃんと食えよ」

祝様はフツと寂しそうに笑って部屋を出て行かれた。

## 第41話 愛の書簡 6

祝様が部屋を出ていかれてしばらくすると水嶋さんと一緒に亜紀枝様がお越しになった。

目の前に立つ亜紀枝様にはなんだかものすごいオーラがあつて・・・

こ、怖いよ。

忍様をチラッと見たら目が合つて、ニツコリとほほ笑んでくれたら、ここはもうお任せしちゃうことに決めた。

なるようになれって感じかな。

「ごきげんよう、忍さん、桃乃さん。祝さんといいお若い方達は行動が早いからね。」

そう、まだお昼前なのです。

「実は亜紀枝様のお力をお借りできたらと思ひまして・・・」

忍様は昨日起きたことをなるべく私の立場が悪くならないように脚色を加えて亜紀枝様にお話した。

「・・・つまりは忍さんが指定した場所で桃乃さんはずっと待っていたと」

「そうです。」

「そこに不届き者が桃乃さんを連れ出そうとした。抵抗しているところへ忍さんが到着したが抵抗していた時に桃乃さんは怪我をした。桃乃さんの心理状態が落ち着くまで忍さんのマンションにいたが、時刻が遅かったのでそのまま部屋に泊め、今朝マンションの駐車場で立花の教師と会ってしまったと。」

「その通りです。」

本当は忍様と待ち合わせなんてしてません。ごめんなさい。

「桃乃さん」

「は、はいっ」

えっ。私ですか？どうしよう辻褄の合わないこと言っちゃったら・・・

程よい空調の効いた部屋のはずなのに背中に変な汗がいっぱい出てきた。

「今朝ほど立花の先生とお会いした時は今と同じ制服姿だったのかしら？」

えっそれはもちろん着替えなんて持ってませんでしたから

「は、はい。」

緊張のあまりかつ舌が悪い言い方になってしまった。嘘を言っていると取られないといいけど、制服姿で会ってしまったのは間違いく事実だし……

すると亜紀枝様は電話をかけ始めた。

お部屋に設置されている子機を水嶋さんが亜紀枝様のお席まで運んで来たのよ。

映画やドラマみたいって思ってたんとしたら、なんと立花の学長に電話をしていたの！

忍様の縁談が決まりそうで、その相手が立花のOGの曾孫で今は立花の高等科にいと説明されていたわ。

縁故があるにもかかわらず進学クラスにいと聞かされた辺りで、学校長は私だと気づいたみたい、学校長の声は聞こえなかったけど、亜紀枝様が「そうですわ。津和路桃乃さんですよ。」とおっしゃっていたから。

電話を終えた亜紀枝様が私達を見た。凜としても慈愛に満ちた優しい表情だった。

「恐らくこれで大丈夫でしょう。」

そ、そうなんですか？今朝のことが一切話題になっていなかったのに、どう大丈夫なんだろう？

忍様も同じことを思っていたようで

「亜紀枝様・・・桃乃ちゃんに縁談があるということだけでどうして大丈夫だと言い切れるんですか？」

一瞬亜紀枝様の瞳がきらりと光ったように見えた。

眼光よ！眼光！

「仮にも立花で教鞭を取るものがですよ。これだけの情報を手にして桃乃さんの『おいた』があつたかどうかの真偽を判別できないようでどうするんですか！」

ええっ！

あの先生は今私と今朝会ってしまったことで立花の教師として試されているってことですかあ？

うわぁ、挨拶なんかしちゃって返って申し訳ない気持ちになつてきてしまった。

## 第42話 愛の書簡 7

「それに立花には『ゆかりさん』もお勤めでいらっしゃるのよ。真偽を確認するのは容易いことじゃないですか。」

『由香里様』？

何故今は療養中の由香里様が出てくるのだろうか？

それにしても『ゆかりさん』は柏木の『由香里様』ではないのかな  
く？

でも忍様は『ムラサキ』って……

一体全体どういうこと？？

そんな疑問を持つ私とは逆に亜紀枝様の今のお言葉に忍様は合点が  
いったようで……

「桃乃ちゃんの縁談の相手に周防院の名前が出ていて、今朝桃乃ちゃんと一緒にいた男が僕であるかどうかをムラサキに確認すればいいということですね。それをしないで、桃乃ちゃんの素行について騒ぎ立てるような教師なら立花には不要だというわけですか。」

「忍さんもお利口になられたのねえ……」

しみじみとおっしゃる亜紀枝様は続けておっしゃった。

「……だったら今回も水嶋か誰か周防院うちのものに連絡して桃乃さ

んを迎えに行くようになさるべきだったのではないかしら？」

そんなことは忍様にできるはずはなかった。何故なら今話している約束自体が存在していないのだから、忍様が悪いように言われるのは辛かったから

「忍様が悪いんじゃないやありません。私が・・・」

思わず体を乗り出して声に出してしまった。

すると「桃乃ちゃん・・・」と忍様に制されてしまった。

一瞬亜紀枝様から鋭い視線を感じたような気がするが、亜紀枝様の方を見ると目が合つて静かに微笑んで下さつた。私はソファに座つた。

話しの辻褄が合わなくなるとマズイ。そう思いつつ俯いていると亜紀枝様がお話を続けた。

「二人が外で会つのは構いませんが、桃乃さんに何かあつてはいけませんので、忍さん、水嶋の連絡先を桃乃さんに教えてしておいて下さい。桃乃さん。」

「はい！」

急に振られてびっくりした。

「忍さんがお約束の場所に現われなかったら水嶋に連絡して迎えに来てもらつてお帰りなさいね。」

なんだか恐縮してしまうが、話しを拗らすのは得策ではないと思い、控え目ながらも「はい」と答えた。

「忍さん、急に迎えに行けなくなった時は水嶋か誰かに桃乃さんを迎えに行くようになさって下さい。」

「承知しました。ご心配をおかけしました。」

そう答える忍様の横顔はりりしくて見惚れてしまった。こんなに立派な「紳士」って感じの人がどうして？ってやっぱり思ってしまう。ぼんやりと考えていると亜紀枝様の声がした。

「ところで桃乃さん、貴女には貸しが一つできたと思ってよろしいのかしら？」

はい？

「亜紀枝様は、今日のことは僕からのお願いなので彼女には・・・」  
今度は忍様の方が私をかばう様におっしゃった。

「忍さんには聴いておりません。桃乃さん。」

「はい」

「いつか、私の方から頼みごとをしてもよろしいかしら？」

亜紀枝様が私の頼みごとって、いつかって・・・



気安く返事をしてもいいのだろうかと思う反面、この亜紀枝様が無体な頼みごとをしてくるとも思えなかったから、私は亜紀枝様を真っ直ぐ見て答えた。

「もちろんです。私に出来る気ことであれば尽力致します。」

「ありがとう」

亜紀枝様は素敵なお顔を私に向けて下さった。

「では僕はこれから桃乃ちゃんを家にお送りしてきます。」

ドアのところに立った忍様は私の肩に手を乗せておっしゃった。

「邪魔しました」

私は亜紀枝様に向かってお辞儀をした。

扉が閉まる一瞬亜紀枝様を見たらいつも見せて下さる笑顔ではなくて、どこことなく複雑そうな表情だった。

やっぱり、忍様のお部屋に泊ったことはあまりいい印象を持たれてないのだろうか？



### 第43話 愛の書簡 8

「あのく、どうして私がいる場所が分かったんですか？」

忍様の車で家に向かっていている途中私はずっと疑問に思っていたことを聞いてみた。

「・・・電話をもらったんです。百合乃さんから。」

ママが！？

「学校へ行くと言って出掛けただけ、帰って来る様子がないし、携帯にも出ない。だから僕と一緒にいるのかどうかって聞かれたんです。それで最近は桃乃ちゃんと会っていないことをお話ししたら、もしかしたらスポーツセンタじゃないかって言われて・・・」

「ママ・・・知って・・・」

知ってたんだ。時々スポーツセンタに行っていたこと。

「・・・まさかあんな・・・でも、間に合って良かったです」

一瞬車内の空気が重苦しくなったけど、「間に合って良かった」って言った忍様の声にも私も笑みがこぼれて穏やかな空気が戻ってきた。

「それから一つお願いがあるんですが」

なんだろう？忍様からお願いって。

「なんでしょうか？」

「できたら『忍様』じゃない方がいいんですが」

んーそうすると

「・・・忍さん？・・・」

「はい」

忍様、もとい忍さんは私の疑問形の呼びかけにも関わらずすぐさま答えて下さった。

運転中なので私の方を向いては下さらなかったけど、私の呼びかけ（疑問形）にニツコリとされた横顔はとっても素敵

「本当に心配したんだから。」

「ごめんなさい。」

玄関で忍様からママに引き渡された。ママは忍様にお昼ご飯をうちでどうかとお誘いしたが、帰る途中大学のお友達から連絡が来て、研究か何かのことで大学に行かなくてはなくなっていたので、ママに夕べのうちに家に帰さなかったことを謝罪して忍様はすぐに

帰られてしまった。

家に着くともうお昼の支度が出来ていた。

「夏くんと萩乃様は？」

「夏くんのレッスン、今日は萩乃様に連れて行ってもらったの。桃乃は立花のお友達の家に泊ったことになっているから、でも夏くんのレッスンは夏休みだから時間が変更になって、桃乃が帰ってきたとき萩乃様に色々聞かれたら困るかなって、先に話を合わせておくかなって思っ、萩乃様には用事があるからって頼んじやった。夏人も帰りにアイスクリーム食べさせてもらえるって喜んじやあって、ふう、嘘を重ねるのは良くないと思うからこれからは嘘はなしね。」

ママも夕べは大変だったんだろうなあ。だから素直に謝れた。

「うん、ごめんね。それから・・・スポーツセンタに内緒で行ったことも・・・」

「いいわよ。」

ママは仕方がなかったわよねって顔をして言った。

「萩乃様が反対するだろうから、桃乃が言いたくなかったってのも分かる気がするし、あつ、知っていたのは偶然、夏くんの幼稚園のお友達ママが見かけたって、前に家に遊びに来た時に顔を覚えていたらしくて立ち話程度に教えてくれてたのよ。でももう今度からは一言言っ、」

ママって最近はずっと夏くんのバイオリンに振り回されているなあって思っていたけど、ちゃんと私のことも見ていたんだね。照れくさい感じもしたけど、少し心が温かくなった気がする。

「あ、勉強さんだけには本当のこと話してあるから。やっぱり夜中でも迎えに行った方がいいんじゃないかって心配してたからきちんと話してね。」

「分かった」

今日の私は本当に素直だ。

#### 第44話 愛の書簡 9

新学期が始まった。

夏休みの最後の日、少し遅れた夏くんの誕生パーティーを我が家で開きました。ママがケーキを焼いてくれて、夏くんの幼稚園のお友達がたくさん遊びに来てくれたの。

小さい子達とはしゃいで遊ぶのは意外にも楽しかった。なんだか保母さんにでもなった気分だったわ。

忍様――――違った。忍さんもお誘いしたんだけど、大学がお忙しいようで予定が合わずパーティーは欠席、まあ小さな幼稚園児達がメインの集まりだったから、返ってお気を遣わせてしまったからかも知れないわ。

私との予定がなかなか合わず、最近はたまに電話で話したり、後はメールのやり取りがほとんどだった。

それでもそのやり取りがなんだか「恋人同士」って感じで（そう言ってもいいよね。）とっても心地良くて、忍さんにお会いできないのも寂しい気持ちはあるものの、短い時間でも手が空いたからと連絡を頂けるのはとっても嬉しかったわ。

約1ヶ月ぶりの教室はやはり1学期と変わらない雰囲気、進学クラスである私のクラスメート達は今日は始業式だけにもかかわらず、

先生がまだいらっやらない時間を参考書を開いたり単語帳を見たりして過ごしている。

私も忍さんに紹介してもらった英語の参考書を読んでいようと鞆に手をかけた時だった。

「楓の組の皆様、おはようございます。」

生徒会長で縁故クラス……桜の組の雪姫こと北白川深雪さんきたしろかわみゆきが登場した。

よく通る涼やかな声で一瞬全員が自習の手を止めて雪姫を見た。

が、さすが進学組次の瞬間には各自自習を再開していた。

その数秒間、雪姫のキラキラした瞳が私に真っ直ぐに向けられていて、その視線を目が合ってしまった私は自習をするタイミングを失ってしまった。

「桃乃さん、おはようございます。夏休みはいかがお過ごしでしたか？」

私に声をかける時も続いたキラキラの視線が、「お見合いの件、伺いましたわ。」と如実に語っている。

「雪姫の方こそ、婚約者の東條様とうじょうに久々にお会いできるっておっしゃっていただけ、どうでしたか？」

雪姫は私の席の方へ歩み寄りながら「はい、色々なところへ連れて行って頂きましたわ。」とそれはそれは嬉しそうな笑顔を見せてくれた。



雪姫と婚約者の東條様は雪姫が生まれた時からの許婚で、2年生になる春休みに結納を交わしている。二人の縁談は政略結婚的要素が強いけど、幸いにも雪姫は東條様が大好きで、東條様の方も雪姫からの話では雪姫を大切にしてくれているようで、二人のお話を聞くとこちらも嬉しい気分になる。

うつとりと夏休みの楽しい思い出に浸っていた雪姫がハツとして私の方を覗き込むような表情になった。

「そんなことよりも、桃乃さんのことです。朱雀の忍様とお見合いをされたとかで・・・」

えっ！？

って自習をしているはずのクラスメート達が一斉に私を見た。

第45話 愛の書簡 10

「津和路、進学止めるの？」

私の隣りの席で単語帳を見ていた学年トップの三枝瑞希さんみづきなんか目を丸くして聞いてきた。

「止めません！進学しますっ！」

私はきっぱりと答えました。

「あら、そうなんですの？私てつきり来年は同じ桜の組になれるかと思っただけだわ」

雪姫が意外そうに言った。

「まあでも朱雀の忍様って以前色々ありだったみたいだから、少し猶予を持つて考えた方がいいかもしれせんね。」

「それって・・・『帝王』のこと？・・・」

教室ということもあってはつきりとは言えなかったけど、雪姫には通じたみたいで、

「まあご存じでしたの!？」

「んー、ちゃんとは知らないんです。小耳にはさんだとうか、かすめたという程度で・・・雪姫の方こそ忍さんのことご存知なの？」

雪姫のお家も名のある家柄だから知り合いであつてもそれほど不自然ではないわ。

「私自身は直接面識があるわけではないのですが、一度姉と縁談があつたのでその関係で・・・」

「雪姫のお姉さまともお見合いされてたんだあ」

「いいえ違います。母が私を身ごもつた時、もし後継ぎになる男の子が生まれたら姉と忍様の話しを前向きにしようという程度で、結局私が女だったのですね。姉は婿を迎え、その方に北白川の跡を継いで頂くということになりました、忍様も当時は周防院の跡取りでしたから、他家へ婿入りすることはできないので、そのままお話は終わってしまったのです。だから忍様ご自身がどんなお人柄かは私は良く分からなくて・・・でも桃乃さんが慕われる方ならきつと立派な方なんでしょうね。以前のこともきつと若気の至りというか、私達女性には理解しえない理由がありなんでしょう。」

さすが雪姫、忍さんへのフォローを忘れずに、上手くまとめられたわ。

でも雪姫が生まれる時つて、忍様は7歳とかそのくらいよね？雪姫のお姉様は私達の5歳上だから、えっ！？そのまま5歳じゃない！！！！

そんな時から結婚相手を探しているんだ。

びっくり・・・

「あつ、忍様の事でしたら、まあご本人に伺つたり、桃乃さんご自

身で確かめるのが一番かとは思いますが、高月先生に伺ってもよろしいんじゃないでしょうか？」

！！

雪姫が高月先生の名前を出した時、パツと目の前が明るくなった気がした。

そうだ！祝様に頼まれた手紙。

高月先生が祝様の手紙の届け先だと思った私は始業式もホームルームもうわの空だった。

## 第46話 愛の書簡 11

今日は始業式だけだったので、ホームルームが終わると、私は鞆を持って図書館へ向かった。

図書室の入口には「本日は貸し出しはありません」と書かれた札が掛けていたけど、扉の鍵はかかっていなかった。入口の横に管理担当の教師の名前が書いてあった。

「高月紫（たかつき ゆかり）」

よくよく考えれば祝様の言っていた「紫色のお姫様」ってのも高月先生を指しているはず。

高月先生は立花の卒業生だから、恐らく雪姫のようなあだ名がそんな感じだったのだろうと思う。忍さんが「ムラサキ」と呼んでいたのも高月先生のことには違いない。柏木の由香里様と区別するための愛称何だろうと考えた。

静かに少しだけ扉を開けると、中で書棚の整理らしき作業をしている高月先生がいた。

先生は長い黒髪を後ろで一つにまとめ、ピンクのサマーカーディガンに紺のマーメイドラインのスカートを履いていた。ピンと伸びた背筋から腰までのカーブを描くラインが大人の女性らしくて、でも清楚なイメージが損なわれていなくて見惚れてしまった。

それと同時に預かった手紙がラブレターだと気づいた。だって、あの和紙の封筒の雰囲気は先生にすごく似合っている気がして、当然だけど先生のためだけの手紙なんだろうなって、そう思うと心臓がドキンとして体中が熱くなった。

「失礼します。」

更に扉を開けて私は先生に声をかけた。

「あつ、今日は貸し出しはできないのよ」

高月先生は顔だけ扉の方へ向けておっしゃった。

「本が借りにきたのではないんです。私2年楓の組の津和路桃乃といます。」

先生には授業を習っていないので、自己紹介をした。

「津和路さん？」

扉を閉めて先生の方へ歩み寄った。先生作業が途中の本を近くの机に置いてきちんと私の方を向いて下さった。

先生の前に立ったところで鞆の中から祝様から預かった手紙を取り出した。

「先生にお手紙を届けるように頼まれました・・・」

「手紙？」

先生が本を置いた机に私は鞆を置き、手紙を両手で持って先生に差し出した。

「鷹野宮の祝様からです。」

「あっ！」

先生はものすごく驚いた表情になった。色白の肌が真っ青になって行く感じで、どうしようって思ってた私の表情が困惑していることに気がついてくれて「あ、ありがとう」とおっしゃりながら手紙を受け取ってくれた。

「祝に、会ったの？」

「はい、先日朱雀院で、その時初対面だったんですが、頼まれてしまっ

「仕方のない男<sup>ひと</sup>・・・」手紙を見つめて先生が少しだけ笑った。

「あつ、そっか津和蒨さんて忍くんとお見合いしたのよね。」

「はい」

それ以上は先生は何もおっしゃらなくて、沈黙が少し続いたところで私は祝様から伝言も頼まれていたことを思い出した。

「先生・・・伝言もあるんですけど『命をかけて』・・・！」

祝様の伝言を言ったところで気づいてしまった。

この恋は禁じられている・・・

見ると先生はさっきよりもっと驚いた表情になっていて、それでも私を気遣うように「大丈夫だから、ありがとう」とおっしゃってくれた。

どうしていいのかわからなくなってしまったけど、もうそばにはいない方がいいのかと思い私は図書室を後にした。

昇降口のところで靴を履き替えていたら、涙が出てきた。

忍さんの声が聞きたくなかった。忍さんはお二人をご存じだから、「あの二人は大丈夫だよ」って言うて欲しかった。禁じられた恋とかじゃなくて、ただケンカが何かをしていて気まずいだけだによって忍さんに言っただけだった。

校門を出たところで鞆から携帯を出した。そうだ。祝様にも連絡をしなくては。私は生徒手帳に挟んでおいた祝様からもらったメモを開いて電話をかけた。すぐに電話は繋がった。

「もしもし、私津和路桃乃と申します。」

「あつ、桃乃！元気？」

この前会った時と同じ陽気な声が聞こえた。

「は、はい、元気です。この前頼まれた手紙、高月先生に渡してきました。」

「……………」

「祝様？」

私の報告を聞いた祝様が電話の向こうで表情を変えたように思った。



「祝でいいよ。ありがとう」

その言い方はさっきとはまるで違う話し方で、あの手紙どんなことが書かれているかは想像できないけど、祝様と高月先生の恋が許されていないものだとすることが痛いほど感じ取られた。

## 第47話 眠りから覚める書簡 1

新学期が始まって1週間が過ぎました。

金曜日の昼休み、教室の窓から校庭を眺めていると高月先生が他の生徒達と円陣バレーボールをしている姿が見えます。

何か会話をしながらなさっているようで、時折高月先生は笑っていらっやいます。

図書室で見せられた青ざめた表情、それが原因となる憂い事なんかまるでなかったかのようです。

あの日、祝様に電話をした夜、忍さんとも電話でお話をしました。祝様の手紙のことを話そうとしたとき、祝様から「誰にも内緒で」と言われていたことを思い出し、結局、新学期の学校の様子を話す程度に留まってしまいました。

あの手紙にはどんなことが書かれていたのかは分かりません。今、高月先生が笑顔を見せてくれているということは、もう大丈夫だということなのでしょうか？

高月先生に直接聞いてみたい気もしますが、聞いてはいけないような気もして、毎日先生の姿を見かける度にその様子を観察してしまう毎日です。

「津和路、何見てんの？」

ぼんやりしている私に声をかけてきたのは三枝<sup>さえぐさ</sup>さんでした。

「・・・高月先生って綺麗だなあって」

「そうだね。って津和路何か悩んでるの？」

「特には・・・あつ、進路がまだ決まっていなことが悩みかなあ」

「あれ？結婚は？」

「してもいいかなとは思ってますが、まずは大学受験が先なんで、その志望学部とか志望大学とかがまだ全然決まっていなから・・・」

「雪姫の流れとはなんか違うんだね。」

「ん、忍さん、ておっしゃるんですが、忍さんから『諦めるな』って言われてて、そうなるのかなかこうバツチりきちんとした進路希望を考えなくてはと思うとそれが以外とプレッシャーというか、はああ」

忍さんとのこれからのことも気になる。

高月先生と祝様のことも気になる。

でも、自分の進路が定かではないのには本当にため息が出てしまう。

「まあ、自分が興味のあることから絞って行くしかないんじゃないかな」

「そうですね」

三枝さんはご自分の席に戻られて参考書を開かれた。

私はもう一度校庭を見た。一瞬高月先生と目が合ったような気がした。というより空を見上げた先生の表情がああ悲しそうな表情だった。祝様の手紙は高月先生を安心させるものではないのだと悟

った。

放課後門を出たところで見知らぬ男の人と目が合った。

黒のスーツをバッチリ着こなしていてアタッシューケースを持っている。目は細めだけどハンサムさんだ。年齢的には忍さんや祝さんよりはずっと年上でパパよりは年下だろうなって感じ。サラリーマンというよりは弁護士さんとか何か個人でお仕事してそうな雰囲気  
男性。

どうやら私に声をかけようとしているらしく、にっこりとほほ笑んでからこっちに近づいて来た。

「すみません。私わたくし渋沢直樹さわななおきと申します。周防院亜紀枝の個人事務所で働いているものです。失礼ですが、津和路桃乃さんでよろしいですか？」

「は、はい。そ、です。」

差し出された名刺を受取りながらかつ舌悪く返事を返した。

亜紀枝様の個人事務所！？なんですかそれ？

状況が今一つ掴めないで自分が津和路桃乃だと認めた後、黙っていたらその男の人、渋沢さんがおっしゃった。

「お時間よろしいですか？」

## 第48話 眠りから覚める書簡 2

渋沢様に連れて来られたのは近くのコーヒーショップ。

立花は寄り道に関しては校則で禁止されていなし、向かい合わせに座っていて「おいた」なんてことも言われないだろうから、特に問題は無いんだけど・・・

渋沢様の「お時間ありますか？」の問いに答える間もなく、連れて来られてしまったからちよつと、いえかなり戸惑ってます。

「あとう、渋沢様・・・」

「渋沢で結構ですよ。私の方が使われてる身なんですから」  
クスリと笑いながら渋沢・・・さんがおっしゃいました。

「津和路様以前うちの会長に、会長というのは亜紀枝様のことなんです、何か頼みごとあれば聞いていただけるとお約束されたこと覚えていらっしゃいますか？」

「はい、覚えています。」

「そうですか。」

渋沢さんはニツコリとおっしゃってからお話を続けられました。

「実はその約束を果たしていただきたいのですが、神奈川県K市に再逢寺さいおうじという寺院がありまして、そこに昔会長が預けた手紙があるんです。それを取りに行つて尚且つ記載されている宛名の方にお届け願えないでしょうか？」

そう言いながらアタツシユケースから書類と封筒を取り出してテールの上に置きました。

「これが再逢寺までの地図と連絡先です。2枚目は公共機関を利用した時の行き方です。封筒には経費として3万円入っています。ご確認ください。」

「さ、3万円て電車でしたらそんなにかからないじゃないですか。」

2枚目の用紙はネットで経路検索をした結果を印刷したもので記載されている金額も3万円なんて必要のない金額だ。むしろお金を預からなくても思ってしまう。

「これは交通費ではなく経費としてお渡しします。恐らく再逢寺には休日においで下さると思っております。そうなれば昼食を取られるでしょうし、手紙を受け取った後に、今度は届けていただかなくてはならないので、再逢寺の往復だけではありません。それに交通機関で事故か何か起こればタクシーや他の交通機関を利用することになるかと思えます。そういった時にお遣い頂くためのお金としてお渡しします。気になる点があればこの用事が済んだ後に会計報告していただければ結構です。」

なるほど、と渋沢さんの独断なのかは分かりませんが、用意の良さに感心してしまいました。

「・・・分かりました。一応お預かり致します。」

「では宜しくお願い致します。」

「ところで届け先ってどこのどなたなんですか？」

「実は会長がそのことに関しては私には何もおっしゃってくれなかったんです。ただ、手紙には住所が記載されているので、それで届け先が分かるかと思います。何か問題があれば先ほどお渡ししました名刺の携帯の方に連絡下さい。」

そして渋沢さんは仕事があるからその後すぐにコーヒーストップを出られてしまった。私は飲みかけのカフェオレを少しゆっくりめに飲んで、気持ちを落ちつけてから家に帰りました。

その夜忍さんの携帯に電話を試してみた。

「もしもし、桃乃です。今、お話しても大丈夫ですか？」

「もう家なんで大丈夫ですよ。どうかしたの？」

「今日、学校の帰りに渋沢さんとおっしゃる方にお会いしました。亜紀枝様の事務所の方だそうですが・・・」

「ええ渋沢は亜紀枝様の事務所の人間ですよ。彼がどうして桃乃ちゃんのところには？」

「それがこの前亜紀枝様とお約束した亜紀枝様の頼みごとを聞いて欲しいって、亜紀枝様の代理でいらっしゃったようで、その頼みごとというのは再逢寺に亜紀枝様が預けられた手紙を取りに行つて宛名の方に届けて欲しいということでした。」



「・・・またなんで、亜紀枝様が渋沢が取りに行けばいいような気がしますか？・・・届け先はどこなんですか？」

「それが渋沢さんもご存じないようでその手紙を見ないと分からないんです。」

「亜紀枝様が預けたというのはいつ頃か聞いてますか？」

「いいえ、聞いておいた方が良かったですか？」

「・・・再逢寺は周防院の菩提寺なんで、亜紀枝様も子供の頃から行っているはずですよ。万が一亜紀枝様がお若い頃に手紙を預けていると宛先の住所が今と違っていると思うので、そうなると届け先を調べるという作業も出てくることになりますよ。」

なんと！届け先の住所を見ただけでは判断できないという可能性もあるんだ。

とすれば、時間にゆとりのある方がいいから・・・

「だったら明日にでも行ってみます。」

「明日ですか？」

忍さんが驚いた声をあげた。

そんなに驚くことだったかしら？

「土曜で学校がお休みなので、記載されている住所が今の住所でどこなのか調べる必要があれば帰るか、明日改めて調べることができますから。」

「出来たら車を出して一緒に行ってあげたいのですが、この土日は教授の学会発表の手伝いに行くことになっているんです。」

「大丈夫です。渋谷さんから地図や経費を預かってますから。何とかなと思います。」

「そうですか・・・何かあれば連絡して下さいね。」

忍さんは私が一人で行くのが心配だというのがありありと分かる様子だった。

そんなに頼りないかしら？

この際だから亜紀枝様のお遣いをきっちりこなして私がしっかりしているところをアピールしておかなくては。

「ありがとうございます。それでは忍さんおやすみなさい。」

「おやすみ・・・」

第48話 眠りから覚める書簡 2（後書き）

2010・12・26 誤字訂正致しました。

## 第49話 眠りから覚める書簡 3

翌日の土曜日は夏の暑さより秋の気配を感じる爽やかさだった。

朝食の時に亜紀枝様に頼まれた「お遣い」に行くと言話をしたら、萩乃様からは「しっかりやるんですよ。」と激励されたけど、ママからは「どうしても桃乃じゃないとダメなの？」って言われてしまった。

「先日お会いしたときに『私にできることはお手伝いします』って言うってしまったから、それに困ったことがあったら忍さんか洪沢さんに連絡していいことにもなっているから大丈夫だよ。」

「なんだか周防院家にいいように振り回されている感じね。」

私の言葉にママがため息を交えて呟いた。

「何を言っているんだい。再逢寺といえば周防院家の菩提寺、桃乃がどこへ行っても恥ずかしくないだけの行儀作法を身につけると認めてもらえている証ですよ。」

ママのぼやきに萩乃様はご立腹のようだった。

ママと萩乃様の態度に温度差を感じつつ出掛ける支度を始めた。

朝食の前までは一番問題になりそうだった夏くんは今日はパパと遊びに行くことで頭がいっぱいらしくて、特に引き止められることはなく、とりあえずお土産を買ってきて欲しいとだけせがまれた。

行き先は我が家から歩いて15分ほどの最寄駅から乗換1回で行ける場所だった。

ただ距離があるので時間はかかるけど、その分早めに出発したから手紙の届け先のことを考えなければ帰宅時間はそんなに遅くなると

は思えない。

のんびり電車で揺られている間は読みかけの本を読んで過ごした。そうして着いた駅は海に見える高台の町だった。

再逢寺以外にもお寺が多くあるようで古式ゆかしい雰囲気漂う町並みが少し大人になったような気分になった。

太陽の光を浴びてキラキラと輝く海を横に見ながら一本道の国道を進むと渋沢さんから渡された地図が再逢寺を示す場所へと近づいて行った。

!!!!

驚くことに再逢寺の手間に見つけてしまったのは、かつてはシンからそして先日、祝様から渡されたメモ用紙の信用金庫の看板だったのです。

海からの風が一瞬私の体をかすめた時、まるでシンがすぐそばから私を見ているのではないかという錯覚に陥りました。

通り沿いには来客用の駐車スペースがあり、その奥の信用金庫の建物に目をやるというのはずのしないシンの後ろ姿が見えてきた。

胸がギュツと苦しくなつて、駅前小さな花屋さんで買った小さな花束をぐつと握りしめていました。

もう一度海を見つめて、私は走って信用金庫の前を通り過ぎ再逢寺へと向かいました。

本堂は今歩いた道より更に高台にあるため、階段を昇って行く私はその途中で男の人とすれ違いました。その男の人はびっくりするくらい綺麗な方でした。

忍さんが男性の色香めいたものを花の香りのように醸し出しているとしたら、今すれ違ったその方はその方は太陽の光のように色香を放射していると言った感じです。

階段のある道は高く伸びた木々に囲まれていて色濃い葉の隙間から

日光がシャワーのように降りている幻想的な雰囲気で、すれ違った男性がその雰囲気には合う様な合わないような、すれ違ったその一瞬不思議な気分になってしまいました。

階段を上り切ったあたり着いた本堂の脇の出入り口で声をかけると、住職の奥様、絹代様が出ていらした。

「亜紀枝様より連絡を頂いています。お暑い中ようこそいらっしやいました。」

ママよりも少し年上の感じの絹代さんが中へ招いて下った。

「あのう、その前に周防院家のお墓にお参りすることって出来ますか？」

絹代さんは一瞬驚いたような顔をしてそれからにっこり微笑んで「今ご案内致します。」とおっしゃって下さった。

広っ！

やはり名だたる名家のお墓はただものではなかったわ。

お花も仏花ではない豪華なお花が供えられていて、私が持ってきた花を飾ってもらってもいいものかと躊躇われた。

「先ほど朱雀様がいらしたので」

花を見つめていた私に絹代様が、花が新しいわけを教えて下さった。

「朱雀様？」

朱雀とはどこかで聞いたような・・・

「亜紀枝様のお母様のご実家の後継ぎの方ですわ。本名は南雲省吾なぐもせいごさんとおっしゃるんですけど、南雲家のご先祖様に『朱雀宮』と名乗られていた方がいて、その名残で南雲家の方『朱雀様』と再逢寺の者は呼んでいるんです。」

なんだかややこしい感じもするけれど、周防院家の『本家』が『朱雀』と呼ばれている理由がなんとなく分かった気がする。

「省吾さんは今は海外にお住まいなんですが年に数回日本に帰っていらしてて、その時はいつも再逢寺に祀<sup>まつ</sup>つてあるご自身のご実家のお墓と周防院家のお墓にお参りして下さっているんですよ。」

「そうなんですか。」特に興味が湧かなかったこともあって、なんとも言えないような返事をしてしまった。

絹代様はそんな私の態度に気分を害したというわけでもなく私が手にしていた花束に気がついた。

「良かったら別の花器をお持ちしましょうか？朱雀様のお花と混ぜて飾って下さっても構いませんが、こちらのお墓は広さも十分にありませんから花器を増やしても問題ありませんよ。」

少し迷って別の花器を貸していただくことにしました。

絹代様と一緒に水場へ行つて花器に花を生けてもう一度お墓へ戻りお線香をあげました。

第49話 眠りから覚める書簡 3（後書き）

2010・12・26 誤字訂正致しました。



## 第50話 眠りから覚める書簡 4

お参りを済ませた後、再び本堂へ戻った。  
通された和風の応接間で玉露の冷茶を頂いた。

「美味しい・・・」芳しい香りの中に甘味を含んだ豊かな味のお茶は、夏の暑さは幾分和らいだとはいえのど越しよく体に染みこんだ。

「桃乃さん。これが祖父が亜紀枝様よりお預かりした封書にございます。」

本来の目的である亜紀枝様が昔こちらお預けになったという手紙を絹代様から手渡された。

「はい、ありがとうございます。」

受け取った手紙をみてびっくりした。

一番の心配事項だった宛名がなんと萩乃様だった。

力強く形の整った文字で「津和路萩乃様」と書かれた封筒の裏には「周防院早馬」と書かれていた。

何て読むんだろう。「そうま」？

一体誰だろう・・・

かつては白だったであろう封筒が黄ばんでいることからこの手紙が古いものだと思われた。

どうしてか胸に堪らなくなるような気持ちが込み上げてきた。

早く、早く萩乃様にこの手紙をお届けしよう。

そんな気持ちでいっぱいになった。

「お邪魔しました。」

昇ってきた階段の近くまで絹代様が見送って下さった。

「いいえ、またいらして下さいね。朱雀様もきつとお会いしたがると思いますよ。」

「・・・はい」

朱雀様ってどんな人なんだろうと思いつながら返事をしてしまった。忍さんはご存じのかたかしら？階段を降り切ったところで忍さんにメールを送った。

《手紙の宛名は萩乃様でした。このまま家に持ち帰って萩乃様に渡します。桃乃》

「桃ちゃん！お帰り」

「夏くんただいま。」

夏くんへのお土産は家の最寄駅の駅ビルに入っているショップのシュークリームにしてみました。

もちろん家族全員の分を買いましたよ、お小遣いで。

渋谷さんに連絡する前に萩乃様の部屋に手紙を持って行った。手渡された手紙の差出人の名前をじつと萩乃様は見つめていた。

「はやまさま・・・」

『はやま』って読むんだ。

それから萩乃様は静かに私の方へ顔を向けて「ありがとう」とおっしゃった。

「桃ちゃんシュークリーム食べたい。」

一緒についてきた夏くんが待ちきれないとばかりに騒ぎ出した。

「あと1ヶ所電話をしなくてはいけないからママ達と先に食べてくれるかな。」

「桃ちゃん、早くね。」

萩乃様は私と夏くんのやり取りの間に手紙の封を開け、中の手紙を読み始めていた。

私はリビングから渋谷さんに電話をかけた。

夏くんは隣りのダイニングでママとパパとシュークリームを食べ始めた。

電話は発信音が聴こえるとすぐに通話に切り替わった。

「はい、渋谷です。」

「こんにちは、津和路桃乃です。今お話してもよろしいですか？」

「大丈夫ですよ。何かありましたか？」

「いいえ、取りに伺った手紙が私の家族宛だったので、先ほど渡したところです。」

「そうでしたか。お疲れさまでした。」

「それで、交通費で預かったお金を遣わせてもらったんですが、やはり余っていて、お返ししたいのですが・・・」

「それならアルバイト代ということで受け取って頂いても構いませんよ。」

「でも、アルバイトは校則で禁止されていますから」  
どの道受け取るわけには行かないから、お返しするタイミングを確認したい。

電話の向こうで頑なに受け取ろうとしない私の言葉にクスリと笑いながら洪沢さんが答えて下さった。

「分かりました。後日受け取りに伺います。日付はまた改めて連絡させていただきます。」

「分かりました。それまでお預かりしています。」

「桃ちゃん、おでんわおしまいならいつしよにたべよう!」

受話器を置いたところでつかさず夏くんが声をかけてきた。

夏くんとパパは既に半分以上食べ終わっていた。

席に着くとママが紅茶を淹れてくれた。

「夏くん、美味しいね。」

一口食べたところで夏くんに話しかけた。

夏くんとパパに今日出掛けたときの話を聞いていたら、萩乃様がダイニングに現れた。

「はぎさまあ、桃ちゃんが買ってきたシュークリーム、いつしよに

たべようよ。」

夏くんの呼びかけに萩乃様も席に着いた。  
ママが萩乃様の紅茶を用意するためにキッチンへ行った。

「萩乃様、差出人の早馬様ってどなたですか？」

「早馬様はねえ、亜紀枝様のお兄様で、そりゃあ素敵なお方だったんですけどね。大病で20歳のときにお亡くなりになったんですよ。」

萩乃様への手紙には余命僅かの頃、病院で書かれたものだったらしい。

あの力漲る文字からは到底想像できなかった。

「萩乃様は早馬様のことが好きだったんですか？」

「桃乃っ」

はしたないと言いたげなママだったけど、萩乃様はそんなことはお構いなしに答えて下さった。

「早馬様にお会いした子はみんなあの方を好きになっていたのよ。お優しくて、お心は強くて、誠実で・・・」

うつとりと昔を思い返しているような萩乃様。

なんだか質問を間違えてしまったような気になってきた。

「お顔は忍さんに似ていなくもないかね。」

「へえ」

忍さんに似の早馬様かあ。いや違う、この場合、忍さんが早馬様に似ているのよね。

「萩乃様、その、手紙には何て書いてあったのですか？」

萩乃様は手紙に書かれていることを思い出すかのように視線を私たちから外して

「・・・ずっと、私も子供もその子供も、見守っているからって、だから自分が死んでしまったことを嘆かずに明るく元気に暮らして欲しい・・・そんなことよ。」

分かっているであろう夏くんまで黙って萩乃様の話を聞いていた。

「本当にねえ。見守って下さっていたと思うのよ。桃乃がね、6年生の時塾に通っていたじゃない。夜遅いからバス停まで迎えに行くと通りの向こうに早馬様の姿と見たことがあってね。」

「えっ!？」

萩乃様の発言に私もママもパパも目を見開いた。

「私も年で幻覚が見えるようになったのかと思っていただけ、早馬様が桃乃を心配して下さっていたからなのねえ。」

「萩乃、さま、それ、って？」

萩乃様は私の噛みまくった問いかけは耳入らずうつとりしている。

今の萩乃様の発言は幽霊を見たってことかしら？

いや、何十年も前にお亡くなりなった方を幽霊と呼ぶのかしら？

消化不良になりそうなティータイムになったけど、萩乃様ご自身は  
とても嬉しそうで、だからそれで良しとすることにしました。  
部屋のドアの前で携帯の着信音が聞こえて慌てて部屋に入り携帯を  
手にするとディスプレイには忍さんのお名前。

「忍さん！」

私の慌てっぷりが何かツボにハマったらしくクスクスと笑う声が聞  
こえる。

「そんなに慌ててどうしたんですか？」

「もしかして何度もかけてくれましたか？今まで下でシュークリー  
ムを食べていたんで」

萩乃様の早馬様トークの間に何度も連絡をしてくれていたらと思う  
と一方的にメールを送っておいてチェックを怠ったことが申し訳な  
かった。

でも忍さんの方もお忙しかったらしく

「いえ、僕も今メールを見たところだったんです。お遣いお疲れさま  
でした。」

「いいえ、案外あつけなくて」

色んな意味でホッとしたことを正直に告げた。

「それと、来週の祝のパーティーの件ですが」

「はい」

「桃乃ちゃんを連れて行くに当たって条件が2つあります。」



第51話 命懸けの試練 1（前書き）

ご無沙汰します。

## 第51話 命懸けの試練 1

「うわぁー！素敵です。」

忍さんのエスコートで訪れているのは祝様の社長就任の祝賀パーティーの会場。

忍さんと初めてお会いしたホテルのパーティールーム。

ものすごく広くて、たくさんの人が招かれている。

会場内の装飾は白と基調として豪華で、でも派手過ぎず上品に飾られた会場は別世界と言ってもおかしくないくらいたくさんの花が飾られている。

受付を済ませた後に会場係りの人に会場内の席に案内された。

「ビュッフェスタイルだから好きなものを取りに行ってくるというですよ。係りの人に頼むこともできますが、桃乃ちゃんなら自分で見て選びたいんじゃないかな？」

もちろんです。

さすが忍様知り合って3ヶ月に満たないですが、私を理解されている。

「忍さんはどうしますか？」

「今日は昼食が重かったので少ししてからにします。ここで待たますからいつてらっしゃい。」

「はい。」

さすが、お上品な忍さんは夜のパーティーのために昼を抜くとかしないのね。

きっとデザートも美味しいものが出るだろうと期待している私はおやつ抜きで来たのに。

飲み物を持って席を周っている係りの人にコーヒーを頼む忍さんに

「行つてきます。」と告げて私はビュッフェコーナーへ行つた。

食べきれないのではというくらいのたくさんのお料理が用意されている。

端から順に回つて行くとちゃんと前菜、魚、肉のメインとなつていくみたいだけど、前菜だけでもお腹いっぱいになってしまうのではないかと心配になるくらいの種類があつて、とりあえずどれから自分のお皿に盛つて行こうか真剣に悩んでしまった。

「社長就任」というだけあつて周りは大人のお客様ばかりだった。

男性は明らかにオーダーメイドだと思われるようなスーツ姿の方ばかりで、女性もエレガントな装いの方ばかりだ。

自分で盛りつけたお皿を持って、少しだけ肩を落とした。

だつて・・・

祝様のパーティーに行くに当たつて忍さんから条件を2つ出された。その一つ目が「制服で行くこと」だった。

忍さん曰くパーティーではお酒も振舞われるから間違いがあつてはいけないということで、立花の制服でいれば未成年であることを明らかにしたいということだった。

確かに今会場にいる女性達のように気飾つたりしたら「若く見える成人女性」と勘違いされるかもしれないと思えなくもないけど、やっぱり制服ではなく手持ちの服の中でも可愛くておしゃれなもので行きたかつたと思つてしまった。

だつて立花の制服つて地味な茶系で、「立花ブラウン」て呼ばれるくらい一部では人気もあるらしいけどこの場所ではやっぱり地味な存在だわ。

それからもう一つの条件は「8時には会場を出て帰宅する。」ことだった。

今日車で迎えに来て下さった忍さんは事前には言っていたけど、出発の際改めてママに「9時頃には送り届けます。」と言っていた。確かにパーティー会場を8時に出れば、万が一道路が混んでいたとしても9時前には家は着くはずだから。

忍さんで、真面目な方よね。

改めて実感したわ。

夏休みに一緒に旅行なんてしてしまっただし、その時同じ部屋にだったし、「夜の帝王」のこともあるから実感なかったけど、あの同室はかなり不本意だったんだろうなあ。

「帝王」のこともいずればきちんと話しをするとおっしゃっていたし、真面目だわ。

忍さんのいるテーブルに戻ると祝様がいらした。

この前お会いした時より少し痩せたような気がしたけど、光沢のあるスーツ姿に以前とお変わりない柔らかな表情にホッとした。

「祝様、おめでとうございます。それからお招きありがとうございます。」

「桃乃・・・なんで、制服？」

「立花の制服は礼服でもあるし、問題ないだろ。」

「いや、問題はないけどさ。忍が指示したの？」

「彼女は未成年なんだ。それが見知らぬ人にも分かるようにしてもらっただけです。」

「まあ確かにね。アッキーが見たらえらく感心して褒めちぎりそうだけど、桃乃はそれで良かったの？」

来てみてちよつと後悔はあったけど、忍さんの考えも事前に理解できていたから、すぐにでも「大丈夫。」と言うべきだったのかもしれない。

だけど、祝様の雰囲気は私が今「ちよつとだけでも可愛くして来たかった」という気持ちを悟られているような気がして言葉に詰まってしまった。

忍さんが持っていたコーヒークップを置く「カチャリ」という音が聞こえるくらい3人の中に沈黙が一瞬生まれた。

「祝。ミツワ電機の社長が挨拶がしたいと言っているぞ。」

低くて、でも良く響く威厳のある男性の声がした。

忍さんが顔をあげて席を立った。

振り返るとロマンスグレーとワイルドさを上品にブレンドされたような掘りの深い「オジサマ」と亜紀枝様のような雰囲気忍さんの掛けている眼鏡と似たシルバーフレームの眼鏡をかけた婦人がこちらに歩み寄ってきている。

「あつ、俺もあそこのオーディオが欲しいんだよね。社長割引とかないか聞かないと。忍もミツワ製品で欲しいのある？」

忍さんにしなだれかかるように祝様がおっしゃったけど、忍さんは何も答えなかった。

「祝、早く行け。」

「分かったよ。親父、忍のこといじめちゃダメだよ。それじゃね、桃乃、今度から『様』はいらないからな。」

祝様を急かすロマンスグレーのオジサマ、祝様のお父様なのね、彼におどけた仕草さで告げて祝様は別テーブルへと行ってしまわれた。

「ご無沙汰してます。」

忍さんが静かに頭を下げて挨拶されたので、それに続くように祝様のお父様達に挨拶をした。

「初めまして、お招きありがとうございます。津和路桃乃です。」

「津和路・・・新栄重機の津和路常務のお嬢さんかね？」

「えっ？・・・あの、確かに父の勤め先は新栄重機の開発部ですが、すみません、役職までは・・・」

「父親の役職を知らないとは・・・」

この言葉には明らかに侮蔑の意味があった。

パパは私や夏くんにどんな仕事をしているのかはきちんと説明してくれるけど、どんな役職に就いているかは一度も話してくれたことはなかった。

パパにちゃんと聞いておいた方が良かったと思った時、忍さんがさっきの挨拶より強い言葉を発した。

「叔父さん。桃乃ちゃんの家庭は親の地位や実績が子供のものでもあるような教育はしていないんです。」

「慎三郎さん、桃乃さんは亜紀枝様の同窓生のお孫さんなのよ。初めまして祝の母の恵です。忍の父親の妹にあたります。」

きりつとした感じはさすがに亜紀枝様のお孫さんという感じだったけど、最後に見せて下さった笑顔の柔らかさは祝さんそっくりだった。

「忍くんもいけないのよ。お医者さんになりたいとか後継ぎたくないとかで夜遊びして、そのくせ今度は手の平を返したかのように亜紀枝様の言うままにお見合いなんかするから。偶然かもしれないけど、慎三郎さんの実家のライバル会社の重役のお嬢さんとくれば、この人みたいな人はヘンに勘ぐってしまうのよ。」

「お前は知っていたんだろう。」

「・・・釣書きに書いてありましたから、でもそれが彼女との話しを進めている理由ではないです。」

「どうやら、祝さんのお父様と忍さんはあまり仲が宜しくないようで、忍さんが私の釣書きを見て叔父様への当てつけにお見合いを進めていると思われるしまったみたい。」

「というか祝さんのお父さんは婿養子に入られているのかしら？」

「だって祝さんの名字って「周防院」だったし、まあ今の雰囲気からするとすぐに結論を出す必要はないかな。」

「とにかく、周防院の後は祝に継がせるからな。お前の出番はないぞ。」

「そんなことは分かってます。いずれ「慶」が成人すれば祝を立派

にフォローできるでしょうし」

「・・・そういうことだ。」

「それに今日のパーティーには祝の縁談も兼ねているんだ。」  
えっ!?

忍さんも驚いたらしく

「菱川銀行の頭取のお嬢さんだ。美大時代からの祝のファンだったらしく、向こうから話しを持ってきていてな。」

「叔父さん、でも祝は後を継ぐ条件に紫と結婚したいって・・・」

「たかがきもの屋の娘じゃ、祝の力にはなれん。とにかくこれからもお前は周防院の後継ぎに関しては口出しをするな。」

そう言い切ると慎三郎叔父様は別のテーブルに向かわれてしまった。  
「紫ちゃんとは連絡がつかないみたいなのよ。立花で先生をしているのは分かっているんだけどね。」

ちらりと私を見て恵叔母様が忍さんに囁いた。

そして慎三郎叔父様の後について行かれた。

## 第52話 命懸けの試練 2

「あのー、慶様ってどなたなんですか？」

ビュッフェコーナーから持ってきたお料理を食べ始めたけれど、目の前の忍さんはさっきから憂いを帯びていて、それもかつこいーとか思ってしまうけど、やはり先ほどの叔父様とのやり取りが原因なのかな。

何か話題をと思ったけど、これはというテーマが思い浮かばず、結局さきほど話題を引きずるような質問をしてしまい、私のバカとかな心の中で思っていたら、ずっと黙っていた忍様の声がした。

「祝の弟なんです。『慶悟』と言って今高1で、僕と祝が通っていた北条高校にいます。」

北条高校！

私立の男子校で知らない人はいない有名校じゃないですか。

北条高校は小等部と中等部が併設されていて、小中は一環教育だけど、高校に入学するためには中等部の生徒は全員例外なく一般受験生として受験して合格しないと進学できないシステムだったはず。立花の縁故クラスが北条の小等部、中等部に、進学クラスが高校に相当すると私は理解していた。

「その慶悟様がいずれは祝さんの・・・」

んんん、なんだかこの言い回しとってもヘンだね。

だって祝さんの弟さんに「様」なんて、って思っていたら忍さんも同じように思ったらしくクスクスと笑いだして

「桃乃ちゃん、慶にまで「様」はいらないですよ。」



話しの内容はともかくやつと忍さんが笑ってくれてちょっとホツと  
してしまった。

「慶悟さんが祝さんのお手伝いをするということになるということですか？」

改めて忍さんに伺うと忍さんは途切れ途切れにお答え下さった。

「その、なんていうか叔父は自分の事業を祝に継がせるために色々  
とやってきたのですが、祝自身が絵に興味を持ってしまい、その上  
才能があつたようで・・・で、叔父は次男の慶に後を継がせようと、  
しかも祝のように別の道に興味がいけないようにと、かなり早い時  
期から経済や経営なんかの英才教育を、幼児教育や経済学や経営学  
のプロを呼びよせて作った特別カリキュラムみたいなものを慶に受  
けさせたんです。なので今の段階でも祝よりも慶の方が経営手腕が  
あると叔父は踏んでいるんです。ただ、まだ未成年ですし、思春期  
というか精神的にも難しい時期なので無理強いはできないので、な  
ので現時点では叔父の理想みたいなものでしょうが」

いずれは祝さんの足りない部分を充分に補える優秀な補佐になるこ  
とは間違いないらしいと忍さんはおっしゃった。

細かい事情はよくは分からなかったけど、祝さんは本当は絵の道に  
進む予定でいて、忍さんがお医者様を目指すために周防院家の後継  
ぎから外れたことで、祝さんが周防院家の後継ぎになり、慶悟さん  
はその補佐になる予定らしいことは分かった。

忍さんは今は何もおっしゃらなかったけど、祝さんは紫さん、いい  
え、高月先生と結婚できるからこそ後を継ぐと決めたんだと思われ  
る。

そう、「紫さん」は間違いないく高月先生を指している。

だって「紫色のお姫様」だし、高月先生のご実家が和服の「多香月」  
たかつき

だから叔父様がおしゃっていた「きもの屋の娘」ということから間違いない。

なのに今日、この場が祝さんのお見合いも兼ねているなんて、祝さんはそれで納得していないはずだ。

だから私があの手紙を預かって、そういえばあの手紙には何が書かれていたんだろう。

ずいぶん枚数があったように思えたけど・・・

ぼんやりしていたら忍さんの呼ぶ声がした。

「桃乃ちゃん。」

「はいっ」

「お皿が空のようですが何か頼みましょうか？」

「あっ、いえ自分で行ってきます。忍さんこそ何かお持ちしましょうか？」

良く見れば忍さんは本当にコーヒーしか飲まれていない。

「大丈夫ですよ。」

私つてばガツガツし過ぎているかしら？

でもビュッフェコーナーの美味しそうなたくさんお料理を見ると気分も盛り上がってしまって、あれもこれも食べたくなってしまう。

しかもどのお料理も少しずつ楽しめるように小さな器に綺麗に盛り付けられていたり、時にはスプーンに乗せられていたり「これなら食べられそう」って食欲を刺激する演出も素晴らしいんです。

そんなお料理を選んでお皿に乗せていると私の背後で男性達の会話が聞こえてきた。

「来てるらしいぜ。周防院の元後継ぎ。」

「良く顔出せたなあ。」

一瞬背中に悪寒が走った。

明らかに忍さんのことだ。

しかも悪意を感じる。

忍さんは今立派なお医者様を目指して頑張っているのに、なんて酷いことを言う人達なんだろう。

そう思つて怒つた顔で振り返ると会話をしている男性達も私に背を向けていたので、私の怒つた顔を見られることはなかった。

「やっぱ跡取りに未練あるのかな。」

「でも今さら、だろ？」

しかも会話は続いている。

「ちよっ・・・」

そんな言い方酷いんじゃないんですかって言おうとしたら腕を掴まれた。

とっさにお皿に乗つたお料理が落ちないようにバランスを取つて腕を引く人物を見たら、見知らぬ男性が立っていた。

柔らかそうな癖っ毛は祝さんみたいで、でももつと、なんていうか祝さんより冷たいような、冷静さをどこまでも貫き通してそんなそんな印象の男の人だった。

「やめとけよ。」

男の人は静かに言つた。

失礼な会話をしていた男性達もいつの間にかどこかへ行つてしまつたようで、飲み物かお料理を取りにでも行つたのでしょう。

もう私の視界には入つては来なかった。

「どうしてですか？あんなこと、忍さんに失礼です。」

収まらない怒りを私は初対面の男に人にぶつけていた。

「別に、さっきの奴らなんかが忍くんの上に行くことは絶対じゃないんだから、アンタが騒げば忍くんの格を下げるだけで、騒いだ分損するぞ。」

やっぱり男の人は表情を崩すことなく淡々と語っていた。

「そ、そう、なんですか？」

「そうだよ。これから今みたいなことを耳にすることがあつても勝手に言わせておけ。」

・・・そんなことできるかしら私に？

「ところで、あなたどなたですか？」

「俺？俺は鷹野宮の周防院慶悟。祝の弟。」

### 第53話 命懸けの試練 3

ええ〜っ!?

弟って、確か高1って私の1コ下だつて。

でも目の前にいる「慶悟くん」はどう見ても年上で・・・  
老け顔?

「ところでアンタさあ・・・」

「あれ〜、桃乃と慶って知り合いだったっけ?」

慶悟くんが何か言いかけたとき祝さんの声が重なった。

「知らない。」

慶悟くんは一言そういうと足早にその場を去ってしまった。

「うわあ〜。感じ悪いなあ。ごめんね桃乃、慶って今思春期で荒れててさあ。」

今の態度と思春期はあまり関係ないような気がするし、祝さんもそれを分かってておっしゃっているような気がした。

「大丈夫です。先ほど忍さんからいつか祝さんを助けてくれるすごい方だつて、伺いましたよ。」

「まあねえ。でもそれがアイツが本当にやりたいことなのかどうかは分かんないけどね。」

慶悟くんにも好きなことをやって欲しい。

しみじみとした語り方はお兄さんとして祝さんの優しさを感じる台詞だった。

祝さんて素敵なお兄さんなんだなっと思って、弟のいる私も祝さんみたいに夏くんことを考えてあげられるようになりたいって思った。  
「ところで桃乃に二つほど聞きたいことがあるんだけど。」

先ほどのふざけた様子が全くない声で祝さんはおっしゃった。

「はい。なんでしょうか？」

「まず二つ目。忍、なんか食ってる？」

「いえ、全然です。コーヒー飲んでいるだけで何も召しあがってません。何か持つて行った方がいいですよ？」

お昼が重かったというより明らかにここで食事をする気がないような感じがしてきたところだったから考えていることをそのまま祝さんに言ってみた。

「いや、無理はさせなくていいよ。」

静かな笑みを湛えておっしゃった。私は祝さんの意見に反論したくなっただけ、それを言う前に祝さんは私に一步步寄り添って、それは私の横に並んでも向きは私とは逆の、まるですれ違う一瞬を止めたような状態で静かに囁いた。

「二つ目、今日ここで紫に会った？」

心臓がキュっとなった。

「・・・いいえ・・・」

「そう、サンキュ」

祝さんの静かな囁きが聴こえたけど、祝さんがそのまま私のそばから離れて行った。

振り返ると来客の方に満面の笑みでごあいさつしている祝さんがいた。

きつとあの笑顔の下で高月先生を待っているのかと思うと切なくて胸が苦しくなった。

手紙のことを忍さんに相談しよう。

高月先生と連絡が取れるのなら連絡してもらおうと思って私は席に戻った。

席に向かうと忍さんが立っていて誰かに挨拶をしていた。  
良く見ると

!!!!!!

亜紀枝様!!!!!!

今日もお上品かつ威厳という名のオーラをバリバリと放たれていて更に良く見ると亜紀枝様と並んで車いすに座る貴婦人が、年齢にしたらうちの菊乃様より少しお若い感じで、亜紀枝様同様に上品さを備えつつ柔らかく明るく華やかな雰囲気漂っているお方だ。

しかし、一番の問題なのはその車いすを押している女性だ。

彼女を認識した瞬間私は全身が硬直し、そこから先忍さんの元へ進めなくなっていた。

何故ならその女性は、夏休みに忍さんと旅行したホテルで出会った。「サオリ」さんだったから。

口紅の色は夏に会ったときより地味目なローズブラウン。

肩にかかっていた少し癖のある、でも柔らかさを損なわない髪は後ろで一つに結別れていて、服装も紺をベースにしたパンツスーツで、明らかに車いすの夫人の付き添いのためにここにいるということを示していた。

重い脚を一步步進めて忍さんのそばにたどり着くと忍さんが気がついてくれた。

「美味しいものは見つかりましたか？」

「ええ・・・亜紀枝様ご無沙汰しています。」

テーブルに持っていたお皿を置いて、それから亜紀枝様にご挨拶をしました。

「こんばんは。先日はお遣いをありがとう。」

「いいえ、萩乃様・・・祖母は大変喜んでおりました。」

「そお、なら良かったわ。萩乃さんのご負担にならないかと、そればかりが気になって随分と年月が経ってしまったのよ。」

「由香里様。こちらが津和路桃乃さんです。」

忍さんが私を車椅子のご婦人に紹介して下さいました。

「まあ。可愛いお嬢さんだこと。初めまして、座ったままでごめんなさいね。周防院由香里です。柏木に住んでいますのよ。お話は忍くんから聞いていてお会いできるのを楽しみにしていたの。」  
お世辞ではなく心から喜んで下さっている笑顔だった。

「初めまして津和路桃乃です。私もお会いできて嬉しいです。」

視界に「サオリ」さんがいるので少し緊張した笑顔になってしまったけど、由香里様は気にする風でもなかった。

忍さんはどうなんだろうと思って忍さんをチラッと横目で見てみたけど私のことを見ていたらしく目が合ってしまった。

恥ずかしくて顔を背けたら今度はニコニコと私達を見ていたらしい由香里様と目が合ってしまった。

「本当に可愛らしいのね。ね、そう思わないサオリさん。」

由香里様が後ろにいるサオリさんに声をかけた。

「ええ本当に賢そうなお嬢様で。」

どことなく彫刻を思わせる美し過ぎる笑みを見せてサオリさんが答えた。

夏に会ったことがあるということを書かない私に対して念を押しているような一言だった。

「そうだね。彼女はね。今日私のために付き添ってくれる看護婦さんで真崎佐織さんとおっしゃるのよ。」

由香里様は後ろに控えていた「サオリ」さんを紹介して下さった。

忍さんが何か反応をされるかなと思っていたら、「えっ？」と驚いていたけど、その声は小さくて亜紀枝様も由香里様も気にされてはいなかった。

「初めまして。真崎佐織です。」

モデルかスチュワーデスでもしていたかのような背筋の綺麗なお辞儀を佐織さんはした。

「・・・初めまして、周防院忍です。彼女は」

「先ほど伺ってましてから大丈夫ですわ。」

彼女に合わせて初対面の挨拶を返した忍さんの言葉を佐織さんは遮った。

一体彼女はこういう人なんだろうとじっと見つめてしまったが、にっこりと笑顔を返されてしまい、何故か恥ずかしくなってしまった。



「亜紀枝様！！」

なんとなく会話が途切れたところで再び祝さんのお父さんが現れた。「こちらにおいででしたか。ゆっくり出来るようにと思い別室を用意してありますので、そちらへ。」

流石の祝さんのお父さんも亜紀枝様達には頭が上がらないような態度だわ。

「祝さんにお祝いが言いたくて先にこちらに来ただけです。でもご挨拶に忙しいようですから・・・慎三郎さん伝言をお願い出来るかしら？」

「どのような？」

「お祝いに花を贈ります。とそれだけですわ。」

「花？」

祝さんのお父さんは亜紀枝様の言葉に首をひねっている風だった。

私も亜紀枝様のお人柄を考えるとなんとなくすっきりしない感じはしていた。

亜紀枝様達はそんな私達様子を気にする様子は全くなく。

「では参りましょうか。」

「ええ、亜紀枝様。桃乃ちゃん。柏木にも遊びに来てね。」

「はい。」

「失礼致します。」

亜紀枝様を先頭に佐織さんが由香里様の車椅子を押して3人は会場を後にしました。

## 第54話 命懸けの試練 4

「亜紀枝様も耄碌もろうくしてきたか？」

用意された別室へと向かう3人を見送りながら祝さんのお父さんはどことなく勝ち誇った表情でおっしゃった。

「どうして？」

忍さんの疑問に私も同感で祝さんのお父さんの方を見てしまった。ほんと、どうしてかしら？

「祝いの花って、こういう会場に贈るものじゃないか？」

確かに、受付のところにかくさんの祝花が飾ってあった。

タイミングとしてはあそこに飾ってもらうために贈るのが一番いいはずだわ。

「僕には亜紀枝様のお考えが計りかねますので。」

「何か意味があるとしても言いたいのか？」

「それが正解かどうかも・・・」

忍さんははつきりとは結論付けなかったけど、亜紀枝様のおっしゃる「お祝いの花」って花そのものを指しているわけではないってことかしら？

「まあいい。ところで祝を見なかったか。」

えっ？

「あのう、私さきほどビュッフェコーナーで御見かけしましたけど・

・・」

「いないんですか？」

さつきとは違う、声音に鋭さを込めて忍さんは聞き返した。

「いや、そんなはずは、お前が気にすることじゃない。」

祝さんのお父さんの方も忍さんの変化に気がつかれ、忍さんに聞くべきことじゃなかったと判断したようで、その場を立ち去ってしまった。

忍さんを見ると祝さんのお父さんの背中をじっと見つめている。

私はどうしていいのか、忍さんになにか声をかけた方がいいのか迷ってしまった。

そうだ、手紙のことを忍さんにお話ししよう、そう思ったら忍さんが私の視線に気がついて、こっちを見て「心配ないですよ。」と言いたげに笑って下さった。

私も微笑み返したら

「桃乃ちゃん。次はデザートにして帰る準備をしましょう。」

パーティー退出宣言をされてしまった。

ええっつ。

デザートだつてたくさんの種類が用意されていたのでここは時間をかけてと思っていたのに。

かなり恥ずかしい気持ちもあったが、私は意を決して一番大きなお皿に乗りきれだけのデザートを乗せてきた。

席に戻った私を見るなり忍さんは声を殺して笑っている。

だってこうでもしないと潔く帰ることが出来ないじゃないですか、と視線だけで訴えると忍さんは私の気持ちを理解して下さったよう

で、  
「ゆっくり味わって下さいね。」  
とおっしゃった。

だったらすぐに帰るって言わないで欲しいなあとも思ったけど、意外と時間は早く過ぎたようで、時計を見たら忍さんがママ達に約束した時間が迫っていることが分かった。

パーティー自体はまだまだ続いているようで今到着したばかりのように周囲の方に挨拶されている方もいらした。

けれど、私達が会場を出るまでに祝さんが戻ってきた様子はなかった。

会場を出る最後の瞬間忍さんが厳しい表情で会場を振り返った。

会場にいる人たちで忍さんに好意的な人があまりにも少ないことにびっくりした。

腫れものの扱いで遠くから見ているような人が多かった。

食事を取りに行けばさっきの人達のように噂をしている人は他にいない。

さつき慶悟くんが助言してくれたように私が忍さんの脚を引っ張らないように聴こえない振りを続けた。

駐車場へ向かうためにロビーを通りかかった時だった。

「高月先生」

頼りなさげな表情でロビーに立つ高月先生がいた。

忍さんと目を合わせて、先生に声をかけようと先生のそばまで歩み寄った。

「津和路さん、忍くん。」

「祝が待っているんじゃないの？」

「……」

忍さんの問いかけに高月先生は黙ったまま目を伏せた。

祝さんがパーティの会場から姿を消したのは高月先生と何か約束をしてからだと思っさんは思っているようだった。

私もそう思った。

あの手紙に今日のことが書いてあったんだ。

でも肝心の祝さんがいない。

探しに行きませんか？と声をかけようとした時だった。

「見つけた！」

背後で底抜けに明るい祝さんの声がした。

祝さんには私も忍さんも全く見えていないようで、足早に高月先生の前に現れた。

そこからはまるでスローモーションで景色が流れているようだった。高月先生と祝さんは向かい合って立っていて、二人は見つめ合っている。

祝さんの表情はさっきお会いした時は全く違う喜びに溢れていて、高月先生を見つめる瞳は甘くて優しい。

なのに高月先生の瞳は今にも泣きだしそうで、そう学校で見たあの悲しげな表情だ。

でも祝さんはそんな高月先生の悲しげな様子に言葉をかけることなく、そのまま高月先生の肩に両手を置いて

口づけをした。

瞬間忍さんが私の両目を塞ごうと手を伸ばしたけど私は二人の姿に見入ったまま忍さんの両手を視界の隅で捕まえた。

口づけは続く、少しずつ角度変えて祝さんは高月先生の方に置いてあった手を先生の背中と後頭部を支えるように移動させてより深く長く。

その光景は恥ずかしいというよりは切なくて苦しくて、シンのキスシーンを見た時は自分が消えてしまいたいって、この場にいたくないって思ったけど、今は二人にどこにも行かないでって二人で一緒にいてってそう叫びたくなる悲しさだった。

無意識だったと思う、視界を遮らないようにと掴んでいた忍さんの両手をさらにギュツと力を込めて握っていたのは。

「来てくれたんだね。」

私たちは目もくれず高月先生を見つめたまま祝さんは嬉しそうに告げた。

なのに先生は視線を外してしまった。

「津和路さんに『命をかけて』なんて伝言させるから・・・」

「おいで・・・紫に似合うドレスを用意したんだ。」

高月先生の言葉には一向に耳を貸さない祝さんは先生の手を取って先生をエレベータへと連れて行こうとした。

けれど先生はそれを拒んだ。

「紫？」

「行けないよ。祝はちゃんと周防院の跡取りとしてそれにふさわしい女性と一緒になっ」

絞り出すような高月先生の言葉に、瞬時に祝さんの表情は凍りついた。

「ふさわしいって何？俺はずっと紫がいいって言うてきたでしょ？」

「もうそういうの止めようよ。ちゃんと自覚を持ってよ。祝がこれから周防院でどんな人間にならなきゃいけないかって」

まるで毒でも飲んできたかのような高月先生の苦しげな声から出た言葉はまるで矢のように祝さんを貫いているようだった。それくらい祝さんの表情は絶望でいっぱい辛そうだった。

「・・・分かった・・・」

高月先生も祝さんも忍さんも私も動くことをしなかった。

この辛い沈黙はいつ終わるのだろうと思ったそのとき、祝さんが着ていた上着を静かに脱いで、次の瞬間視界が遮られた。

何っ？

気がつくや祝さんの脱いだ上着が私達の目の前に投げられていたのだ。

そのとき高月先生が「祝っ、腕！」って叫んだ。

「祝！待てよ！」

忍さんが叫んだ。でも祝様は大きな自動扉の向こうへと駆け込んでしまった。

夜の暗闇の中に祝は消え去ってしまった。

## 第55話 命懸けの試練 5

祝さんの腕に何かをみた高月先生は腰を抜かしたようでそのまま口ビーの床に座り込んでしまった。

驚愕している表情から涙がポロポロとこぼれ出している。

「先生……」

綺麗だと思う反面どうして二人は苦しんでいるのだろうと思った。忍さんと二人で先生を立ち上げらせようと膝まづくと、視線が定まらないまま誰かにつかまりたいように両腕を伸ばして呟いた。

「祝の手首の所に傷が……」

「リストカットか？」

まさか？と信じられないという忍さんの思いが現れた言い方だった。私も祝さんと知り合ってから時間が短いけど、簡単に命を絶とうとするような方には思えなかった。

「祝が……嫌っ……死んじやって嫌……」

忍さんにしがみついたまま首を横に振って泣きじゃくる高月先生。かけていい言葉が見つからず、私は黙ったままそばにいることしかできない。

「急ごう。桃乃ちゃん、車を入口に持ってきますから、紫と外に出むき



ていて下さい。」

「はい。」

忍さんは駐車場に向かって走って行った。

私は高月先生に肩を貸すようにして一緒に扉の外に出た。

タクシーを待つ人、私達のように駐車場から出てくる車を待っている人が数人いるので、その人達の邪魔にならないように立っていた。しばらく待っていると忍さんの赤い車が現れた。

車に乗り込んで一般道に出たところで忍さんが高月先生に質問を始めた。

「紫、祝はどこにいるか心当たりはある？」

「・・・S区に由香里様所有の一軒家があるの、忍くんが前に住んでいたアパートの近くの、覚えてる？」

「菖蒲の庭の？」

「そう。留学する前まで、その庭の手入れを祝はずっとしていてじゃない。まだ鍵を持っているなら、他にマンションとか購入していなければ・・・あの庭がすごくお気に入りだったから・・・」

「分かりました。今から行くなって祝の携帯に連絡して」

「番号知らない。っていうか祝が留学した時に祝の連絡先消去しちゃってるから・・・」

「あつ私分かります。この前祝さんに教えてもらったので」

「それですぐに電話して！留守電になったら紫を連れて今向かって  
いるって言い残してくれればいいから」

「分かりました。」

忍さんの指示を受けるや否や私は制服の胸ポケットにある生徒手帳  
に挟んだ祝さんのメモを開いて携帯に電話をした。

制服でパーティーに参加したのは不本意だったけど、この状況だと  
帰って良かったのかもしれない。

私服だったらこのメモは手元になかったからね。

携帯は案の定留守電になっていた。

私は忍さんに言われた通り「先生を連れて行きます」とメッセージ  
を残した。

気持ちは急いているのに車のスピードは法廷速度しか出せない。

最悪の場合は一刻を争うというのにスピード違反で捕まっては行け  
ないし、事故に遭っても行けない。

忍さんはいつにも増して慎重に運転しているように見えた。

「どうして、祝を拒絶したの？」

信号待ちのところで再び高月先生に問いかけた。

「おじ様に、周防院の利になる家の娘さんに嫁いでもらいたいわって、  
祝は忍くんと違って小さい時にしっかりと教育できなかったから、  
それを補える女性にそばにいて欲しいって・・・」

「どうでもいいでしょ。そういうことは。」

「忍くんのせいでもあるのよ！」

呆れたとでも言いたげな忍さんの言葉に高月先生が声を荒げた。

「祝は跡を継ぎたいなんて思っていなかったんだから、二人でお父さんの着ものを作る手伝いをして行こうって話していたんだから。それなのに、忍くんがあんなことしなかったら・・・周防院の亜紀枝様の後継ぎなんて・・・でも跡を継ぐなら、亜紀枝様達からちゃんと認められてそれで、その方が祝だって、きつと自信が、つくだろう・・・し・・・私じゃ、そんな風に祝の事支えられないって」

高月先生は言い終わると俯いたまま黙ってしまった。

忍さんはものすごく辛そうな表情になっていて・・・

でもふうつと息を吐きだし、メガネに一瞬触れた次の瞬間表情ががらりと変わって

「祝はそんなこと望んでないでしょ。跡取りとしてダメって烙印を押されたとしてもあいつには大したダメージはないはずだ。むしろ紫の拒絶された現状の方が大きなダメージなんじゃないの？こっちに帰ってきてから二人の間に何があったの？紫が見たキズがリストカットとは思えないけど、そこまで祝が追い込まれるようなことだったの？」

「・・・知らない・・・ただ、去年変えた携帯の新しい番号、祝には教えてなかったの。今住んでいる住所も祝が聞いてきても教えないでっってお父さん達には頼んであったし・・・多分それで立花の在校生を巻き込もうってしたんじゃないかな？津和路さんに手紙を預けるなんて・・・腕に傷はどうしてかな？・・・やっぱり私が苦しめちゃったのかな？・・・どうしよう・・・」

涙声で先生は言った。

「祝が死んだら生きていけない・・・」

ただそれだけが高月先生の本心なんだと痛感した。  
車はどこかで見たことがる様な風景の中を走っていた。

「紫、もうすぐ着くから、祝のところに行ったらちゃんとすよ。今のこと。」

先生は静かに頷いた。

「もし、周防院の跡取りとしてダメだとかって話しになれば二人で好きなように生き行けばいいでしょ。紫がいれば祝にはそういうたくましさはちゃんとありますから。貴女だけは絶対に不幸にはしないはずですよ。」

「それでいいと思う？」

俯いたままだった高月先生が顔をあげた。

自信なさげな疑問に満ちたまなざしだったけど、さっきよりは全然いい状態に感じた。

迷いながらも前に踏み出そう、祝さんの元へ行こうとしているような雰囲気だから。

「いいと思いますよ。」

忍さんも微笑んで告げた。

その笑顔は高月先生には見えてはいないかもしれないけど、きっと忍さんの声音で分かったのだと思う。

だって忍さんの言葉を聞いた高月先生はとても嬉しそうな表情をしたから。

それから窓に顔を向けた高月先生。

多分のその先が祝さんがいる場所なんだろう。

車は古めかしくでも上品な趣の家の前に到着した。

その途端先生がものすごい勢いで車を飛び出した。

そして私が知っている先生とは思えないほど乱暴な音を立てて門扉を開けて敷地の中へ飛び込んで行った。

門が勢いよく開く音が聞こえたのか中の明かりが点いて縁側の扉が開いた。

先生は迷いもなく一目散にその扉の方へ走って行って、扉を開けた人物に抱きついた。

扉を開けた方の人も先生の背中にしっかりと腕を巻きつけている。

その人は、祝さんだった。

室内の明かりが逆行となっていて祝さんの表情は見えないけど、私達が乗っている車の方に顔をあげてくれた。

きっと世界で一番幸せ、っていう表情をしているんじゃないかなと思った。

ジャケットのうちポケットから忍さんは携帯電話を取り出した。  
どこかに電話をかけているようです。

「……忍です。今紫を送り届けました。……桃乃ちゃんも一緒

です。」

え？

忍さん、誰とお話しているの？

「・・・ええ分かりました。桃乃ちゃんを送り届けたら朱雀に寄ります。」

一体全体どういうことだろうと思って忍さんを見てみると、通話を切った忍さんが私の方を見た。

「約束の時間を過ぎちゃいましたので、なるべく早く送り届けるようにしますね。」

「あのう今のお電話は・・・」

「亜紀枝様です。亜紀枝様の方が津和路の家に連絡を入れて置いてくれるそうですから。」

「いえ、そうではなくて。高月先生を送り届けるって・・・」

「ああそのことですか。僕もずっといつどうしていいのかわからなかったんですが、先日亜紀枝様から『然るべき時に紫を祝の元へ送り届けるように』と言われましてね。なのに肝心な紫と連絡が取れなくて、高月の実家には連絡が欲しいと話してはあったんですが、多分紫は祝に繋がるのを恐れていたんでしょう。僕にも連絡をくれなかったんですよ。」

「でもどうして亜紀枝様は高月先生を祝さんの元へ？」

「運転しながらでもいいですか？」忍さんが静かに車を発進させてそう聞いてきた。

「祝はね、確かに経営者として周防院の跡取りとしての教育は受けては来ませんでした。周りはそうさせようとしていたんですが、本人が拒否していたというか絵の道への才能を発揮させていたので、その頃は僕が正式な跡取りだったから無理強いされることはなかったんです。それでも祝には、厳しくてシビアなビジネスの世界で生きて行く人間としての人を見る目や、駆け引きに勝つため優れた能力は備わっていたんですよ。」

忍さんがおっしゃるには、祝さんが後継ぎとして名前があがったとき、祝さんは高月先生との結婚を後継ぐ条件として希望された。周囲の望むような後継ぎになるから高月先生と結婚させて欲しいと亜紀枝様や祝さんのお父さんは留学でそれなりの実績を作ったら結婚を認めると言っただけで、祝さんと高月先生は正式に婚約はしないまま祝さんは留学してしまった。

祝さんが留学してしまうと祝さんのお父さんは高月先生に身を引くように持ちかけた。

でも祝さんに見てもらったらお父さんの行動も高月先生の反応も想定内の出来事だったようで、事前に周囲の誰にも気づかれないように亜紀枝様取引を持ちかけたそうです。

周防院家の中では亜紀枝様の力はまだまだ強く、いくら祝さんのお父さんが反対しても亜紀枝様がOKを出せば効力があることを祝さんは見切っていたのです。

「どんなことでもするから自分が不在の間、紫を別の男性と結婚させないでほしい」

祝さんが一番恐れていたのは高月先生が他の男性と結婚してしまうことだった。

周囲に何か言われて一旦身を引いてしまいうくらいなら帰国した時に取り返しがつくけど、結婚されてしまつては打つ手がなくなつてしまう。

そう考えた祝さんは亜紀枝様に高月先生に来る縁談を止めるようにお願いしていたらしい。

「紫の父親、高月 蒼苑そうえん氏の従姉妹が周防院家の分家に嫁いで来ていて、紫は正確にはハトコに当たるのですが朱雀と同じ敷地内に住んでいたので小さい頃から顔を合わせることがあつたんですよ。」

そんな縁から親戚というにはいささか遠い存在の高月先生の縁談に関して亜紀枝様の意見が通ることが出来たのだ。

祝さんは留学先のロースクールで論文を書いたり、預けられていた企業では実際に取引を成立させたりと、亜紀枝様に認めてもらうために相当の努力をされたようでした。

そしてその努力の甲斐あつて亜紀枝様は忍様にお遣いを言い渡されました。

でも、祝さんを想うあまりに高月先生が身を引こうとして連絡を絶つたり、祝さんは祝さんで亜紀枝様にばかり頼らず自分で行動を起こそうとこれまた周囲に気づかれないように私に手紙を託したり、忍さんのお遣いは簡単には進まなかつたようです。

「私が早く手紙のことを忍さんに相談すればよかつたんですね。」

「そんなことはないですよ。それにもう心配しなくてもいいでしょう。あの二人のことは。」

そうだ。

だってもう絶対離れたりなんてしないっていうくらい抱き合つていたんだから。



「そうですね。」

家路に着く私の心はとても穏やかだった。

第56話 紫の苑 1

「さあ桃乃遠慮しないでいいんだよ。何がいい？服か？車か？ブランドのバッグか？」

迫りくるような勢いで祝さんが私に「欲しいものはないか？」と問いかけてくる。

「いえ、そんな、」

頂く理由がないのでさっきからずっと断り続けているのだけど、祝さんはまるで熱病に浮かされているかのように一向に聞く耳を持ってくれない。

「何言ってるの、桃乃が手紙を届けてくれたから今こうして紫と一緒にいられるんだから。」

「でも亜紀枝様の方もその・・・」

高月先生との結婚を認めて下さったじゃないですか。

そう言いたいけど、肝心祝さんがキッチンに立つ高月先生をうつとりと見つめていて、幸せすぎて上の空で私の言うことなんて全く聞いてくれない。

はあ・・・

今、私がいるのは先日高月先生を忍さんが送り届けた由香里様所有

の菖蒲のお庭のお家。

祝さんが高校生の頃から鍵を預かってお花の手入れや家の修理を少しずつしていきらしい。

修理・・・

そう由香里様から祝さんが頼まれたのは修理だとさきほど聞いたはず、なのに元の状態が私には分からないけどこの家の内装は全て紫色を基調としたお部屋になっているのです。

どう考えても「高月先生ラブ」の祝さんが「紫<sup>ゆかり</sup>」という名にちなんで紫色にした気がしてならない。

けれども流石に絵をたしなまれていた祝さん、紫色の室内なんて聞けば驚く人が多いだろうけど、今いるこの家の中の、色づかいはとっても上品。

家の柱は木材のそのものの色を残し、壁紙や障子など融通の効く箇所は一つと残さず紫色を施している。

場所によっては薄いものを、障子なんかは菖蒲の花の絵が隅に描かれていたり、一番驚いたのは玄関に飾ってあった祝さんが書いたという書画。

金箔が散りばめられた本当に薄い紫の半紙に「愛一途」と堂々と書かれていて、それがまた見事なくらい達筆だったりするから色々な意味で驚いてしまった。

「アッキーはいいの。面倒くさい条件色々出して来てたんだから。でも桃乃は違うでしょ。ある意味無償でしてくれたんだから。やっぱりきちんとお礼がしたい。」

私に何かお礼を、その一点をどうしても祝さんは譲ってくれない。そもそも「高月先生の手料理」を食べに来ないかと言われてきたので、お昼をご馳走になるだけで十分お礼の意味をなしているはずなのに、しかも提案されるのがバッグとか服とかって、どんな言い方

をすれば差し障りなくお断りできるのだろうかと途方に暮れてしま  
う。

「で、桃乃。バッグがいい？それとも洋服？あつ多香月で着物を作  
るってのはどお？蒼苑先生そうえんに頼んでみようか？」

高月蒼苑先生つて高月先生のお父さんでいずれば人間国宝になるん  
じゃないかって言われている方じゃないですか。

その方が絵を付けた着物たとえ小さな花一輪の絵だとしても、恐れ  
多くて着れません。

「祝、もうそれくらいにしてあげなさい。」

台所での作業が一段落したらしい高月先生がやっと私と祝さんのと  
ころにいらしてくれて助け船を出して下さった。

「紫は分かってないんだよ。日本に帰ってきて、んにやその前から  
紫と連絡が取れなくなつて俺がどれだけ心を痛めたか。」

「だからそのことはこの前からずっと謝っているじゃない。それを  
津和路さんまで巻き込んで。」

そうなんです。

祝さんは私には想像できないくらい、高月先生と連絡が取れなくな  
ったことに焦りや憤りや不安を抱えていらしたようで・・・  
でもそのお礼が過分なような気がします。

「えつとお。じゃあ祝さん、今回私は祝さんが困っているときにお  
助け出来たわけですよ。だったらもし私が困ったりしたら助けて

くれますか？お礼をそういう風にしてくれますか？」

「えっ・・・」

どこか不満げな祝さん。

それを察知した高月先生が

「祝！そうよ。もし津和路さんが何か助けが必要なら一緒に助けてあげましょう。立花に在学中は私は教師の立場になるから上手く助けられないこともあるかもしれないから。ね、そうしてあげて。」

高月先生が柔らかな笑みで祝さんを見つめてお願いしてくれた。

「・・・わ、分かった。」

やはり納得はして下さらなかったけど、最愛の高月先生からの提案じゃあ否定するわけにいかないようで、祝さんのお礼は「いづれ恩返し」という感じで収まった。

「で、今は困っていることないの？」

・・・そう来たか。

「大丈夫ですよ。」

高月先生には及ばないもののニッコリ笑顔でお答えする。

「・・・忍のこととかは？」

「えっ？」

「ねえ、桃乃は本当に忍でいいの？アイツ桃乃が思ってるほどお行儀よくないよ。」

「祝！」

祝さんが言いたいことは分かっている。

きつと「帝王」のことだ。

高月先生は私には聞かせたくないようで祝さんの発言を遮った。

「えつとお。『律療大の帝王』とかのこと、ですよね？」

「桃乃、知ってたの？津和路家の人みんな知っているの？それよりそのことって誰から聞いたの？アッキーがしゃべったの？」

「家族は、多分知らないです。私はちよこつと小耳に挟んだというか、たまたま聞いちゃって、だから亜紀枝様も私が知っているかどうかは・・・」

「そうなんだ。ほんとあんなときは大変だったんだよ。アッキーは寝込むし、どうしてそんなことしたんだってうちの親父とかが問い詰めても忍は『相続から外してくれ』っていう以外はしゃべんないしね、紫。」

同意を求められた高月先生は答えようがなかったのか少し困ったような表情になった。

高月先生が何も言わないけど気にするそぶりがない上に祝さんは止まらない。

「いかにも『御曹司の鏡』って感じのヤツが、だよ。誰かれ構わず

ホテルに行っちゃってたんだよ。」

「祝、あまりはつきりとした言い方は・・・津和路さんはまだ未成年なんだから」

「でもさ、中途半端な情報よりはつきりとした事実を知った方がいいよ。そもそも桃乃と忍はお見合いなんだし。忍の素行で隠し事があるのってのはこのまま話しが進むんなら、やっぱり後々桃乃が困ることになるし。」

「あつ、でも忍さんは私が大人になったらちゃんと説明するって」

「「えっ!?!」」

祝さんと高月先生がの声が被った。

「忍、説明するって言ったの?」

「はい。」

「それって、あんだけのことしかしたのに『理由』があっただってこと?」

茫然としながらも祝さんが私に問いかけてきた。

「よく分かりませんが、多分私が忍さんと結婚してもいいかどうかを決めるために話して下さるってことで、言いわけがあるという意味ではないと思います。」

「うん・・・」

祝さんは考え込むように黙ってしまった。

高月先生も私の方をじっと見ていて、何もおっしゃってはくれない。短いような長いような沈黙が続いた。

何か言った方がいいのか迷った時だった。

「・・・紫、お昼にしようか。」

祝さんは誰にも目を合わせずにそれだけ告げた。



## 第57話 紫の苑 2

あゝっ。

高月先生の手料理はなんて美味しいんだろう。

私を招待するにあたって高月先生が用意してくれたメニューの一つは、一見和食、鶏肉と根菜を中心にした煮物って感じだったけど、食べてみてびっくり。

味付けはエスニック風味でした。

それから魚介のサラダ、ローストビーフ、これもソースを数種類用意してくれてどれも美味しいし、なんていうか国際色が豊か？ソースを替えるだけで違う国の料理を食べているような気がしてしまっ

た。

「先生すごいっ！絶対いい奥さんになりますよ。」

多香月のお嬢様でお嬢様学校の先生って肩書きからしたらお料理が上手ってイメージはあまりわかない。

それに高月先生みたいな女性はお料理が上手でも「和食」「洋食」って得意なジャンルがはっきり決まっ

てそうって思っていたけど、実際の高月先生はそうじゃない。

和食や洋食って拘りなく美味しいものを作り出せる実力がある感じだ。

そんな気持ちを込めて力説したたら眉間にしわを寄せた祝さんが声をかけてきた。

「桃乃。」

「はひ？」

ローストビーフ、ワサビマヨネーズ風味ソースバージョンを口に入

れたところだったから、キッチンと返事が出来なかった。

「そこはさあ。『祝さんの奥さん』って限定してもらわないと。」

祝さんがどう思っただけでそうだったのかはよく考えずに口の中に広がるほんのり鼻を刺激するわさびと、絶対手作りですよっていう濃いめのマヨネーズソースを肉の歯ごたえと一緒に満喫しながら頷いた。祝さんの隣りでは頭痛いつて表情の高月先生がいたけど、とにかく目の前にある美味しいものに集中しようと決意した。

エスニック風味煮物を小皿に取り分けていると部屋の電話が鳴った。電話機に一番近くに座っていた高月先生が立ち上がって受話器を取った。

「もしもし……あつ先日は大変失礼いたしました。高月蒼苑の娘の紫ゆかりです。……はい、おります。少々お待ち下さい。」

通話口を手で押さえて高月先生は祝さんの方を振り向いた。

「祝。柏木の由香里様から。」

「えっ？なんだろう……出ないと、ダメ？」

なんで「いる」と言われたにも関わらず、電話に出なという選択肢があると思うだろう。

祝さんでリアクションの一つ一つが普通ではない気がする。

そんな祝さんのリアクションに慣れている高月先生から強い口調で

「ダメ」と言われてから、どうしか私を見る祝さん。

私も「出ないとダメでしょ」という気持ちを含めた視線を送った。

祝さんは「ちえっ」と言いたそうな表情で席を立ち高月先生がいる

電話機の方へ行った。

「もっしもっし。祝でえーす。」

高月先生が完璧に頭痛を起こして頭をテーブルに突っ伏した。私もそれはちよつと社会人としてどうなんですかって思った。

先日「副社長」に就任したはずだと思うんですが……

「だってさあ今紫の美味しいご飯食べてたんだよ。……そうそう桃乃も来てるよ。いいでしょう」

えー。

なんとなく今のイキオイで私の名前を出して欲しくはないんですが・

・

「……M区の不動産？……何それ？……俺に出来るの？……ねえそれ慶悟じゃダメ？……あつそう。……うんじゃあ話してみる。」

受話器を元の場所に置くと祝さんは黙ったまま厳しい表情で床に視線を落とした。

「仕事？」

心配そうに高月先生が問いかけている。

うーん、らぶらぶな感じを醸し出しているわ。

もしかして私お邪魔？？

「んー仕事になるのかなあ。俺にはよく分からない……だから慶悟に振っちゃおうかと思って。」

「だから」のあとからはハートマーク5個くらいあったんじゃないかな。

とっても明るい言い方に変わっていた。

受話器を切った後の鬱々とした雰囲気が全くなく楽しそうな表情に変わった祝さんは電話をかけ始めた。

ところが一向に繋がる様子がない。

留守電にすらならない。

どこにかけているんだろう？

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・出ろっ！お兄様からの電話だぞ。」

祝さんの念が通じたのだろうか、祝さんの言葉の後に電話がつながったようだ。

「もしもし慶悟おー。お兄ちゃんだよ。あのねお願いがあるの。・・・・・・・・・・・・・・・・。あ、違っ違っ。ユカリンがねえ、M区にある、ある人のお屋敷を管理することにしたんだって、でね、ほったらかしにするのもなんだから何か使い道がないかなって言われちゃって。・・・・・・・・建物と庭はそのままにして欲しい。・・・・・・・・それは要相談じゃない。そこまで話してないし。・・・・・・・・えっ紫？」

そうして祝さんはとても難しい表情をして高月先生を見た。そうして見つめたまま電話の相手に答えていた。

「二人つきりはダメ。」

祝さんの言葉につられて、電話の向こうの慶悟くんとどんな話をしているのかは分からないけど高月先生を見てしまった。目が合う高月先生も訳が分からないという表情だった。

「うーん。・・・分かった。じゃあ俺がここにいる時ね。ユカリンには直に連絡して。お・ね・が・い。」

最後はご機嫌で電話を終えたけど、どう聞いても祝さんの発言だけではお仕事の内容とは感じられない電話だった。

「慶くんにおんぶにだっこでいいの？」

席にもどってくる祝さんに高月先生がさらに心配そうに声をかける。「だってあいつの方がこういうの上手そうじゃん。まあ手はちゃんと貸すけどさあ。あつそれと慶が紫に聞きたいことがあるっていうから今度ここで会ってやって。なんか俺には聞かせたくないから二人っきりで会わせろ」って危ないじゃないか。

「どうして危ないのよ。」

「だって俺が日本に帰って来てから見る慶はなんだかイライラしてて、欲求不満？じゃないのって何度も思ったぞ。そんな男と紫を二人っきりになんかできません。」

「祝っ！」

私がいるから祝さんの発言にもっとソフトさを求めている高月先生だけど、あまり気を遣われても申し訳ないと思ひ少し口を挟んでみた。

「慶悟くんも高月先生がお好きなんですか？」

「それはないと思うんだけどね。アイツは自分の願望は隠さないからさ。まあ大っぴらに言ってるってわけじゃないけど。それに人でもものでも欲しいものが出来れば手に入れられるように行動す

るタイプだし。もし仮に紫が好きで会いたって思っているなら直接会いに行くんじゃない。こんな風に俺を通すってことは本当に聞きたいことがあるんでしょ。」

「じゃあ二人つきりでもいいじゃない。」

「ダメ。」

なんだかなあ。

祝さんは慶悟くんをダシにしてじゃれたいだけのようない気がする。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4936k/>

---

サマー・エンゲージ

2011年8月16日19時08分発行